DRAGON BALL GT AFTER ～最強魔道士達と最強戦士の珍道中膝栗毛!?～

70-90

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＲＡＧＯＮ　ＢＡＬＬ　ＧＴ　ＡＦＴＥＲ　～最強魔道士達と最強戦士の珍道中膝栗毛！？～

【Ｎコード】
Ｎ２１４９Ｕ

【作者名】
７０－９０

【あらすじ】
超一星龍との死闘を終え、神龍と共に消滅した孫悟空。しかし気がつくと、異次元の世界に飛ばされていた。そして、リナ＝インバースと名乗る（自称）天才美少女魔道士や新たなる仲間と共に、新たなる旅に出る！！
ＯＰ　：　さよなら傷だらけの日々よ　／　Ｂ'ｚ
ＥＤ　：　Ｒｅ．Ｓｔａｒｔｉｎｇ　ａｇａｉｎ　／　林原めぐみ
ＴＨＥＭＥ　：　ＹＯＵ　ＧＥＴ　ＴＯ　ＲＵＮ　／　ＴＨＥ　Ａ

L
F
E
E

新たなる旅立ち！！　新たなる期待！！（前書き）

どうも、７０－９０です。

執筆に至ったのは、ネットに探しても、どうしてドラゴンボールとスレイヤーズのクロスオーバー作品がないんだと激しい憤りを感じたので・・・。（オイ！

更新は不定期になるのかもしれませんが、よろしくお願いします。

新たなる旅立ち！！　新たなる期待！！

ある少年は最後の戦いを終え、かつての仲間に別れを告げ、緑色の龍に跨り、旅をしていた。彼はその龍との約束を果たそうとしていたのだった。

龍は彼を乗せてそのまま空を飛んでいた。

「神龍（シェンロン）の背中、あったけぇなぁ…」

彼はそのまま神龍の背中に自分の身体を捧げた。すると少年の身体に星の入った7種類の球”ドラゴンボール”が入っていった。最後の一球が入った時、少年の姿は消え、それと同時に神龍は消滅した。

ドラゴンボールは7つ集めると、一つだけどんな願い事でも叶うという特性を持っていた。しかし、何度も人間が使ってきたことによって、負のエネルギーが生まれ、頼り続けてきた人類にその代償を与えるという、全宇宙の消滅の危機が訪れた。

その少年達の活躍により、それは免れたものの、もう二度と起こらぬように自ら神龍はドラゴンボールを封印することにしたのだった。それは、彼が自ら償う人類の代わりとなるというのと一緒であった。

これによって、少年は神龍と合体し、消滅した。

…はずだった…。

とある世界。ここは、中世ヨーロッパを基調とするような街並みが目立つ、先ほどの世界とは少し古典的であった。その上空に一つの光が現れ、そのまま真っ逆様に森の中へと落ちていった。

「がっ…！！！　ぐぉっ…！！！　でぇっ…！！！？」

間抜けな音を漏らしながら、枝にぶつかりながら地面に激突した。さすがにも堪らなく、目を覚ました。といっても、枝にぶつかりまくった時点で既に目を覚ましていたとも言えるが。

光の正体、その彼、何度も地球、いや全宇宙の危機を救った人物

―孫悟空は頭を押さえながら起き上った。

「いってぇ～～～……。前にもなかったっけこんなの？」

デジャヴを感じ取った悟空であった。

「あれ…？」

彼は自分の身体を見て、あることに気付いた。

「オラの身体が、元に戻ってる…」

悟空の身体は、以前はピラフ一味の仕業によって子供の頃の姿に戻されていた。そのために超サイヤ人になったり、瞬間移動を使ったりすることが出来なくなっていた。彼の努力の成果によって取り戻し、すっかり慣れていたのだった。

ところが何の断りもなく、子供にされる前の姿に戻されていたのだった。

「それに…、いってぇどこだここ…？　さっきまで神龍と一緒にいたってぇのに…、おっかしいなぁ…」

勿論、神龍の姿は森を見回してもどこにも見当たらない。悟空は腕を組みながら、首を捻って考え始めた。

「よくわかんねぇけど…、…ま、いっか！」

しかし普段から細かく考えるのが面倒臭い悟空は、詮索するのをすぐにやめた。

「よいしょっと……。ふんっ！」

悟空は立ち上がり、舞空術を利用して空に飛び立った。ちなみに激突した時の衝撃による痛みは、長年の武道家としての活動によって培ったために既にひいていた。

「助けてくれ～～～～～！！！」

「ん？」

悟空は誰かの悲鳴を聞き、その方向に向かっていった。

「おい、じいさん。大人しく金目の物を俺達によこしな」
「ひいいいいいい……！　命だけは御助けを…！！」

盗賊の1人が剣を肩に乗せながら、男に迫ってくる。後ろに少しずつ足をすりながら、後ろの道から逃げようとするものの、そうはいかなかった。

「おーっと、ここは通さねぇぜ！！　へっへっへっ！」

仲間が回り込み、逃げ道を塞いでしまった。そしてだんだんと詰め寄ってくる。

「さあ大人しく金目の物をよこせ！！　ひひひひひ！！」

突然、リーダー格らしき1人の前に人影が現れた。悟空である。

「なんだオメェは…？　命が惜しければとっととどきな！」

しかし、ピクリとも動かないままじっと睨んでいた。

「チッ、このやろう！！！」

彼の行動にプチンと切れた盗賊の１人は剣を大きく振り上げ、振り下ろしてきた。それを見ている男は狼狽していた。

しかし、悟空は何も変わらぬ様子で左手で受け止めた。

「な…、何…！？」

「…ふん！！」

そして悟空はその剣の刃を手首を捻って半分に折った。折れた方の刃先はそのまま地面に落ちた。

「ひ…、ひいいいいい！！！！！」

それを見た盗賊の連中からはすっかり気迫がなくなっていた。それとは裏腹に恐怖が湧きあがっていた。それも当然だ。この世界にも悟空のような格闘家はたくさんいるものの、片手で剣を折られるのはとても珍しいことだった。

「お…、覚えてろ…！！！！」

捨て台詞を吐き出し、目にもとまらぬ速さで退散していった。姿が見えなくなると、男の方を向いた。

「でぇじょうぶか、じいさん！！」

盗賊の時とは逆に彼は笑顔を送っていた。自分の家族や仲間に見せた時と同じように。

「あ…、ありがとうございます、若いお方！！」
「”若い”って…、こう見えてもオラ、もう…６０なんだけどな！はははっ！！」
「えっ…？」

悟空は指で数えながらそう言った。彼は”サイヤ人”であり、戦闘種族のためか肉体の老化が非常に遅い。そのために外見はまだ青年期のままだった。

男は驚いていたが、納得したかのようにすぐに落ち着き、こう訊いて来た。

「もしかして…、”魔道士”のお方では…？」
「”魔導師”…？　まさか…！」

悟空にとって魔導師と言えば、魔人ブウを蘇らせ、地球に恐怖を至らしめたバビディである。まだ生きているのかと思ったが、まだ気づいてはいなかったが、この世界の魔道士とあの世界の魔導師とは全く違うのである。

―でも待てよ…、ならなんで落ち着いてんだ…？　それに、強い”気”が全く感じられねぇ…。

彼は気を感じ取ることによって相手の強さを推測していた。バビディの時は強力な気を感じることが数え切れないほど経験したものの、この世界ではまったく感じられず、またどうやら男は魔導師を信用しているように見えた。

悟空の頭の中ではすっかり混乱していた。

「わりぃけどオラ、魔道士についてよくわかんねぇんだ」
「そうですか…」
「でも、魔道士っていってもなんでこんなに落ちついてんだ？　オラからしては悪いイメージしか浮かばねぇけど…」
「そんなことありません！！」
「うわっ…！」

急に男の声が大きくなったので悟空はビビった。

「魔道士と言うのはいつも盗賊から守ってくれてるんです！　噂では、倒した盗賊団は数千にも上ると…」
「数千…。……す、数千！！？」
「はい。さらに、地形を変えたり、何箇所かの森や村を消し飛ばしたりするほどの力を持っているというのも、聞いたことがあります」

聞いていくうちに悟空はすっかり胸が躍っていた。この世界でも、とても強い人がいると聞くと彼にとってはたまらないのだ。

「ひえぇぇぇ…！！　す、すんげぇなぁ…、なにもんなんだそいつは…！？」
「はい、リナ＝インバースと呼ばれる魔道士です」
「リナ＝インバースかぁ…。…サンキューなじいさん！！　そんじゃ！！」
「え！？　ああっ…」

悟空は期待を胸に秘めながら飛び立っていった。男はまだ言いたかったことがあったようだった。

―リナ＝インバース…。会ってみてぇなそいつ…。オラワクワクしてきたぞぉっ！！！

悟空が飛んでいる様子を、何者かが森の陰に潜んで見ていた。そしてすぐに立ち去った。

こうして悟空はこの世界で新しい旅に出るのであった。

いきなり遭遇！？　あたしが天才魔道士リナ＝インバース！！（前書き）

悟空　：　５７
リナ　：　１６
ガウリイ　：　２１（おそらく）
アメリア　：　１４
ゼルガディス　：　１８（おそらく）

外見はあんま変わらんのにどんだけ年の差あんねん！！！（笑）

いきなり遭遇！？　あたしが天才魔道士リナ＝インバース！！

悟空の来た世界には”魔法”が当たり前のように存在していた。またドラゴンやゴブリンなど、何処でも聞くような童話の登場人物にすぎない生物までも存在している。彼は色々な街並みを舞空術でざっと一周してきたが、自分は別世界にいるとやっと気付いた。

―でも・・・、この世界でもすげぇ奴がいるってことか…。

と言っても、既に仲間や家族にお別れを言ってしまったことや、自分より強い者と闘うという不動の夢のために、元の世界に戻ろうという気は今の時点では、ない。”全く”までにはいかないが…。

空を飛んでいるとき、腹が悲鳴を上げた。

―そういや何も食ってねぇなぁ…。仕方ねぇ、あの街に行くか！！

そう思い、偶然視界に入った街に降り立つことを決めた。そのまま、その街の方へと入っていった。

「よっと！」

悟空は着地し、あたりを見回した。

そんな中、ある街中ではこんな噂が流れているのを、悟空は聞いた。最近、ここの近くの街をいつも襲っている盗賊団が姿を消したということだ。彼らはとくに有名で今まで、首長の寝所までも襲い、多額の宝などを奪いつくしたのであった。何とかしようとして対策は練ってきたものの、何度も破られ、手の施しようがないほど勢力が大きかったそうだ。

しかし、最近になるとすっかり来なくなった。しばらく月日がたって、ようやく魔道士の仕業と確信したのであった。

喫茶店では3人の若者がそれについて話していた。

「もしかしたら、”盗賊殺し（ロバーズ・キラー）”の仕業かもな…」
「盗賊の話と言ったら、まずそうよね…。でも、どうやって懲らしめたのかしら？」
「噂では頭から生えた触覚から眩い光線を放って、跡形もなく消し去ったそうだ…」
「怖っ！！！」

その他にも、『人間に見えても実は何百年前に既に死んでおり、その身体を魔族が憑依してこの世の中を歩きまわっている』とか、『舌を伸ばしてハエを捕食する』とかなど、なんとも皮肉的な噂が

飛び交っていた。

そのため、盗賊よりもそのリナという魔道士の方が怖いという意見が多い。中には盗賊に襲われたほうがましだととんでもない本音を漏らす人もいたであった。

「あとさ、こういうことも聞いたんだけどさ、襲われた盗賊団のアジトからは金銭のものが蛻の殻だったんだってさ…」
「あのさ、ロバ何とかってぇのはリナ＝インバースのことか？」
「そうそう、色々な面で色々叩かれてる……って」
「「わぁぁっ…！！？」」

悟空である。その噂話に興味を持ったがために、つい勝手に話に介入してしまったのだった。

「な…、何なんだ急にお前は！！？」
「わりいわりい！　オラ、そのリナってぇ奴を探してんだ。なんか知らねぇか？」
「そうか。そいつを探しに……」

言葉が止まり、しばらく間が空いた。3人は彼の言った言葉を冷静に考えるとだんだん、彼の言ったことがある意味大事態だと感じた。

「「「えええぇーーーっっ！！！？」」」

「うわっ…！！？」

度を超えた驚きの音に彼はビビった。それと同時に疑問に思った。

「あんた、本気なの！！？」
「えっ？　なんでだ？　なんか悪いことでもあんのか？」
「やめときなさいよ！！　殺されるわよ！！？」

さらに悟空の頭に疑問符が打ち込まれた。

「こっ、殺される？　なんでだ？　なんで、いつも盗賊からおめぇらを守ってくれてるやつが、おめぇらを殺す必要があんだ？」
「わかってないなぁ…。それは俺達を欺かせる手段の一つで…」
「実際には魔族であり、俺達の信頼を集め、世界を破滅させるつもりなんだってさ…」
「ええっ…？　魔族ってことは…、そんなに悪い奴なのか？」
「当たり前じゃん！！！」

目撃情報か捏造か…。そういう変な噂には信憑性があるとは限らないものの、世間には深く刻み込まれていたのであった。

「ところで、会ってみてどうするつもりなの？」
「できれば戦いてぇなぁと思って…」

「戦う…。…って…」
「「「た、たたたたたたた戦うっ！！？？」」」
「どわっ！！？」

３人の驚きの音が綺麗に重なり、悟空に詰め寄った。今度は彼はその迫力によって後ろにこけてしまった。

「おめぇら、ちょっとは落ちつかねぇか…！」

悟空はゆっくりと身体を起こしながら注意した。しかし、そうはいかなかった。

「落ち着いてられるか！！！　何寝ぼけたこと言ってんだバカ！！！」
「バカっておめぇ…」
「戦うって…、魔道士でないくせにどう立ち向かうつもりなんだよ！？」

―まいったなこりゃ…。…仕方ねぇ、オラ１人で探すか…。

とにかくこの若者達の話には当てにならない…。そう思った挙句の果てに、もう話を終わらせて自分で探索しようと決めたのだった。

「どうだ？　これで頭が覚めただろ？」
「おめぇらの言いたいことはだいたいわかった。とにかくあぶねぇ奴だってことだな？」

３人は今の彼の言葉を聞いてホッとした。これで行く気が失せたのだろうと安堵していたが、実際悟空の心は変わらぬままであった。

「でも…、やっぱ会ってみねぇとわかんねぇか！！」
「ええっ！！？　おい、ちょっと……！」

そして悟空は走っていき、舞空術を使い、空に飛び立っていった。３人は目を丸くしながら見送っていた。

「今…、そっ、空を飛んでなかったかしら…？」
「ああ…、飛んでた…」
「もしかして…、今まで俺達は魔道士の目の前で悪口を言いたい放題言っていたのかよ！！？」
「まさかね…。ハハハ…」

３人は見合わせながら、焦りを抑えようとしていた。しかし、その意志とは裏腹に冷や汗をかくばかりであった。

ところ変わって、ここはある盗賊団のアジト。ここでもまた、例の件が発生していた。アジトのほとんどは既に壊滅状態であった。ちなみに、起こってからたった5分後のことである。

「な…、何なんだこのガキは…！！？」
「”火炎球（ファイヤー・ボール）”！！」
「ぐわあああああああっ！！！！」

盗賊団に火の球が直進して命中し、爆発した。あたりはもう火の海であった。

「ううっ…。なにもんだお前は…」

盗賊の1人の視線の先には、何者かが自分を見下ろすような視線を与える姿が目に入った。栗色の長髪で額に黒いバンダナを付け、世界を股にかける1人の少女であった。

彼女こそ、あくまで自称ではあるが、あの天才美少女魔道士――
―リナ＝インバースであった。

リナはいつも盗賊達を日常茶飯事的に殲滅しまくっていたのだっ

た。”悪い奴の音を絶やすため”と謳っているものの、実際の目的は資金の調達である。リナのような魔道士は、”魔術”の研究などのために多額の経費を消費していたのだった。

「「「「うりゃあああああっ！！！」」」」
「はっ…！！」

後ろから盗賊の一味が剣を振りおろしてくる。

「はぁっ！！！」
「「「「ぐわあああっ…！！」」」」

しかし、第3者の介入によって防がれた。黄色の長髪で、美形の剣士がリナに並んで立っていた。

「あたしは、あんた達盗賊を成敗しに来た美少女天才魔道士、リナ＝インバースよ！！」
「そして俺はこいつの保護者、ガウリイ＝ガブリエフだ！」

彼女の相棒、ガウリイ＝ガブリエフ。共に旅を続けてからもう3、4ヶ月である。

その名を聞くと、盗賊は狼狽し始めた。

「何！！？　リナ＝インバースだと…！！？　まさか…、我らのような盗賊が避けて通れぬ天敵、あの悪名高き最強の”壁女”―」

それを聞いた途端、リナの顔が急に暗くなり、俯いた。両腕は強く握りしめており、ぶるぶると震えていた。

「か…、”壁女”…？　壁女ですって…？」

実際彼女の胸は小さく、それに大きなコンプレックスを抱いていた。そのせいで大きなトラウマを抱えるような出来事に何度も遭遇してきた。以来、自分の胸に対して触れると最もキレやすくなっていたのであった。

「どうやら、よっぽどママにすがって泣きたいようね…！！　いいわ…、やってやろうじゃないの！！！」

一度逆鱗に触れたリナはもうだれにも止められない。彼女は頭の真上に両手を上げ、呪文を唱え始めた。

「『黄昏（たそがれ）よりも暗き存在（もの）、
血の流れより紅き存在、
時の流れに埋もれし
偉大なる汝（なんじ）の名において、

我今ここに闇に誓わん、
我等の前に立ち塞がりし
全ての愚かなるものに
我と汝の力もて、
等しく滅びを与えんことを』…！！！」
「ええっ！！？　こんなところで！！？」

リナの両手には徐々に赤い光が大きくなっていった。

同じころ悟空は空を飛んでいたが、すぐに空気の異変に気付いた。

「ん？　なんだ、この強い気は…？」

悟空はすぐにリナの気を感じ取り、一旦止まった。そして、その気が出ているとされる方向に身体を向けた。

「あっちだな！！」

先ほどよりもっと速いスピードで駆け付けた。

悟空が駆け付けて見回すが、何も大した様子は見られなかった。

―あれ…？　おっかしいな…？　おそらくここなんだけど……ん？

地上に視線をずらすと、両手に魔力をチャージするリナの姿が目に入った。

―もしかして…！！　あの女か…！！

リナは十分に魔力が溜まったところで、両手を真横に添えた。

「”竜破斬（ドラグ・スレイヴ）”！！！！」

両手を前に突き出すと、赤いエネルギー波が真っすぐ放たれた。そのままアジトにぶつかり、ドーム状の大爆発を起こした。

「うぉおっ…！！？」

爆風が強く悟空に押し寄せてくる。それに対して彼は両腕で顔を覆って砂を防いでいる。

しばらくしてからゆっくりと腕を下した。

「いいいっ！！！？」

悟空は今の光景を見て驚いた。視線の先には、アジトは一つもな

く直径５ｋｍぐらいのクレーターがあるのみであった。穴ぼこから黒煙が黙々と湧き出していた。

―すっげぇ威力だな…！！　なんだあのかめはめ波みてぇな技は…！！？

実際、呪文を唱えるという点を除いては、ほとんどかめはめ波に似ていた。

―気が消えた…。ってぇことは、一気に使い果たしたってことか…。

一方、リナは貯蔵されていた財宝をかき集め、袋に詰め込んでいた。当然収まりきらずとも、しばらくの間は十分に食費など確保できる量であった。

「おいリナ！　そんなに持っていくのか？」

そんな彼女にガウリイは話しかけた。

「当たり前でしょ？　今懐には何も残ってないし、それに、あんたに耳が腐るほど何度も言ってるけど、悪人には人権なんてこれっぽっちもないの！！　こんぐらいあたし達が取っても仕方ないんだから！！」

『悪人に人権なんてない』…。これが彼女の口癖であり、モットーでもあった。

「いや、そんなに耳は腐ってはないけど…」
「……ああ～～っ…！！！　このクラゲ頭！！」
「ぐへっ…！！」

ガウリイはリナに強烈な飛び蹴りを喰らわした。

彼は剣術については確かに達人並みの実力を持つ。魔術が使えなくとも、それを補えるほどであった。しかし、頭脳はリナ曰く『クラゲ頭』、つまり重度のアホであった。

「ったく…！」

２人はそのまま次の目的地に旅立とうとした。

「おい、待ってくれ！！」
「ん？」

2人は呼びかけられたほうに振り向いた。そこには悟空の姿があった。

「い、いつの間に…」
「おめぇが…、あのリナ＝インバースってやつか？」
「そうだけど…。あんた、何者？」
「オラ、孫悟空！！　さっきからずっとおめぇのこと探してたんだ！！　噂ではめっちゃつえぇ奴らしいからな！！」
「えっ…？　そっ、そう…？」
「いやぁ、何だ今の技は？　一発であんなに消し飛んでしまうなんてな！」

―なっ…、何なのこの人…！？　今まで会ってきた中で何だか一番物凄く喜んでるんだけど…！！

内心焦っていた。むしろ悟空のハイテンションにはまったく追いつけなかった。

今までリナに会ってきた人達のほとんどは、畏敬の念を払ったり、命乞いをしたりするなど、彼女にとっては好ましくない態度を示すばかりであったからだ。

「てかあいつらが言うほど、そんなわりい気は出てねぇと思うんだけどな…」
「なっ…、どういうことよ！！？」
「いろんなとこでわりい噂ばっか流れてたぞ。なんだっけ？　…『いいことばっかしてオラ達を欺いていて、実際には世界を滅ぼそうとしている』とか…、『おでこに触覚が生えていて蠅を捕食する』とか…」
「何ですってぇっ！！！？」

リナはまた、堪忍袋の緒が切れそうだった。

「ははははは！！！　お前やっぱそうとう―」
「笑うな！！！」
「すいません…」

それを聞いて大笑いするガウリイに一喝した。すると１８０ｃｍを超えるほどの長身かつ５歳も年上である彼は、１５０ｃｍにも満たないリナに頭を下げて謝るという、保護者としては情けない行動をとったのであった。

「それで…、このあたしに何か用でもあるというの？」

リナは腕を組み、悟空に問いかけた。

「ああ、…できればおめぇの力はどんなにつえぇか、この体で感じてぇんだ」
「「はぁぁぁっ！！！？」」

２人は反射的に驚きの音を上げた。自ら宣戦布告してくる人間に会うのも初めてだった。

「あんた…、今自分がなんて言ったかわかってんの！！？　そんなの、ひ弱な草食動物がライオンに自ら身を捧げてることと同じようなもんよ！！？」
「おい、草食動物のみんなに大変失礼じゃねぇか」
「ほっとけぃ！！！」

自分のつっこみにさらにつっこみを入れられたリナは、悟空の態度は挑戦的に感じられた。

―何なのこの好戦的な人は…？　でも…、あまり大した力がない奴が…、このあたし、天才美少女魔道士リナ＝インバースに無謀な挑戦状を突きつけてくるとは、言語道断よ！！！

プライドに傷をつけようとする人はどうしても許せなかった。彼女はいつもそうであった。自分の悪口をいう者はどうしても見逃せなかった。

徐々に、悟空を懲らしめてやろうという気持ちになっていたので

あった。しかし、まだ知らない。悟空には魔力が使えない代わりに、気力をコントロールできるということを。

「…いいわよ！！」

「ええっ！！？　お…、おいリナ…。こんな奴をわざわざ相手にするのか？」

ガウリイはリナにややあきれた様子で訊いた。

「仕方ないでしょ。こいつがどうしてもあたしと闘いたいって言ってるんだから。ただ…、あたしからの軽い返事をするだけだから！」

「はぁ…。ってなんだ今の間は？」

彼はため息をついた。

「『黄昏より暗きもの…』」

彼女は”竜破斬”を発動するために、呪文を唱えていた。

「どこが軽い返事だよっ！！？　殺る気満々じゃねーか！！？」

ガウリイも思わずつっこみを入れてしまった。

悟空は彼女から距離を置いていた。そして、視線をリナの方に向け、じっと凝視した。

「どうやら、あの技をやる気だな…」

彼はそう確信した。

―やっぱ…、『毒を以て毒を制す』しかねぇか…！！

悟空は両手を前に突き出して重ね、ゆっくりと右脇腹に持っていった。

「かぁぁぁぁっ……、めぇぇぇぇぇっ……、はぁぁぁぁぁっ……、めぇぇぇぇぇっ……！！！！」

すると悟空の掌に水色の球体が浮かび上がっていった。

「なっ、なんだあの光は…？」

ガウリイは悟空のいる方向に目を向けていた。

2人が十分にエネルギーを溜めた途端、強く前に両手を突き出した。

「”竜破斬”！！！！」
「波ぁぁぁぁぁっ！！！！！」

それぞれ、リナは”竜破斬”、悟空は”かめはめ波”を放った。
真っすぐ飛んでいき、そのまま激突した。

「うっ…、うううううっ……！！！！！」
「くぅぅぅぅぅっ……！！！！」

2人の光は互角に押し合っていた。片方の光線が引いたり、今度はもう片方の光線が引いたりしていた。

―う…、ウソでしょ…！？　あたしの”竜破斬”とほとんど同じじゃない…！！？

―ぐぅぅぅっ……！！！　やっぱこいつは半端じゃねぇ…！！！

リナは仰天していた。実際、”竜破斬”は誰にでも使える魔術では当然なかった。リナという例外を除いては、どんな上級の魔道士でも習得するのに結構年月を費やさなければならないからだ。

しかし、リナとほとんど同じ年齢で”竜破斬”のような魔術を使える少年がいたのだった。そういう状況が上手く飲み込めなかった。

ただ、実際、悟空は青年のような外見とは裏腹にもう６０歳手前であり、さらにかめはめ波については、少年期に一目で初めて見て、ごく僅かな威力であったがすぐに習得したという武勇伝を持っている。

２つの光はこれ以上耐えきれず、先ほどよりずっと大きな大爆発を起こした。

「どわぁぁぁっ…！！！！」
「きゃああっ…！！！！」
「うぉおおっ…！！？」

３人は強大な爆風に吹き飛ばされた。

光が消えた時には随分巨大かつ深いクレーターが出来ていた。

「いったたたた……」

リナはその淵で頭を摩りながら痛がっていた。急にお尻に違和感を持った。すぐにビビって後ずさりした。ある者の頭が泥だらけで地面から出てきた。

「おい…。大したことないのに、随分派手にやってくれたんだな…、2人とも…」

「……」

「り、リナ…？」

「いやあああああっ！！！！！」

リナは悲鳴を上げた。

「”炸裂陣（ディル・ブランド）”！！！」

「ぎょえええええっ！！！！」

リナがその呪文を発動した時、地面が爆発し、大量の砂埃を撒き散らした。

「乙女の…、じゃなくてこのあたしのお尻にそんな汚い顔を突きつけてくるなんて、このドスケベ！！！」
「うううっ……。だからと言って…、そっ…、そこまでしなくても……」

ガウリイは沢山埃の付いた姿で倒れていた。そしてゆっくりと起き上がり、座った。

「それにしても、孫悟空っていう人は…、タダモノじゃなかったわね…」
「ああ、リナの”竜破斬”とほぼ互角の魔術を繰り出してきたからな」
「一体どこでそんな呪文を覚えてきたのかしら…」

そう呟いた矢先、悟空の姿が1秒も経たない間に現れた。

「「おわぁっ…！！！」」

それを言うのも無理はない。悟空は”瞬間移動”を使えるのだ。

「お前、ゆ、幽霊か！？」
「ははは！　何度も死んだことはあるけど、わっかはついてねぇぞ

！！」
「？？？？」

クラゲ頭のガウリイは意味がわからなかった。いや当然、このことについては悟空とその仲間しかわからない。

そのまま悟空も腰をかけ、胡坐をかいた。

「悟空」
「ん？　なんだリナ？」
「あの魔術、どこで覚えてきたの？」
「魔術…？　何じゃそりゃ？」
「あらっ…！！？」

リナはこけた。魔術を使えるのだろうと思ったが、当然そうではない。

「ちょっと！！！　さっきあたしの必殺魔法とほとんど同じものをぶちかましたというのに、魔術自体知らないの！！？」
「さっき…？　…ああ、”かめはめ波”のことか」
「”かめはめ波”…？　何そのネーミングセンスがなさそうな魔法は…！？」
「いいや魔法じゃねぇ」

そして、悟空はリナやガウリイにかめはめ波を説明した。

「驚いたわね…。まさか魔法代わりに自分のその…、気というものであんなに強力なのを出せるなんて…」
「なあ、俺にも使えるのか？」
「あららっ…！！」

今の一言に彼女は思わずこけそうになった。

「だってさ、かめはめ波って、別に魔力を使うわけじゃないしな」
「アホか！！　確かに魔道士ではないこの人は使えるけど、クラゲ剣士のあんたが使えるわけないでしょーが！！」

リナはあまりにも呆れ果てて、頭を押さえた。

「いや関係ないだろ！！！？」
「いいや、誰だって使えるさ」
「ええっ！？」

リナは、悟空の一言に驚いた。そんなに強力な技を誰でも使えるとは思わなかった。

「まあ、上手く気をコントロールできればだけどな」
「まっ、無理でしょうね…。こんなバカじゃあ…」

「だから関係ないだろ！！！？」

やや低めにそう言ったリナにガウリイはつっこみを入れた。自分でも天然な奴だと自覚しているが、そんなにしつこく言われたくはなかった。

「じっちゃんが言うには、完ぺきに覚えるには５０年ぐれぇもかかるそうだし…」

「ご…、５０年！！！？　俺達もうその時おじいさんじゃないか！！！」

「まぁ、オラは子供ん頃に初めて見て、一瞬で覚えたんだけどな！！」

「「だぁぁっ…！！！！！」」

―訳わかんないわね…。その技も…、この人も…。

２人はこけた。そのうちリナはやや呆れたことを思っていた。

「ところで、さっきリナが出した、あのかめはめ波みてぇな技は何なんだ？」

「”竜破斬”よ」

リナもまた、”竜破斬”のことを説明した。

「へぇ〜〜。どおりでこんなにすげぇことになるんだなぁ…」

彼が見た先には先ほど悟空とリナが作った巨大なクレーターである。

「あれはおそらく、あたしの”竜破斬”と悟空の”かめはめ波”がほとんど互角で強力だから、２つがぶつかるとその分威力が大幅に増大したに違いないわ」

「ふ〜〜ん…」

悟空はわかったようなそぶりを見せた。

「とにかく…、おめぇはすげぇな！　よくそんな小柄であんなでけぇ魔法をつけぇるなんてなぁ！！」

「あっ、当たり前じゃない！！　あたしは……、…って”そんな小柄”ってどういうことよっ！！！！」

またもやリナは呪文を唱えようとした。しかし、突然腹からグゥ〜〜ッと情けない音が鳴った。

「あっ…」

悟空からもまた、同じような音が鳴った。

「あちゃあ～、オラもなんも食ってなかったなぁ…。…そんじゃあ、メシにすっか！！！」
「あたしもそう言おうとしてたつもりなのよ！」
「それじゃあ、近くに町があるからそこに行こうぜ！！」
「そうだな！」

全員一致で昼ご飯を食べに行くことにした。３人は勢いよく立ちあがった。

「そんじゃ行くか！！　よっと！！」

悟空は舞空術を用いて飛び立った。

「空を飛ぶこともできるのね…。ならあたしも、…”翔封界（レイ・ウイング）”！！」

リナもまたその呪文を使い、飛び立っていった。

「……。…おい待て、ずるいぞ、お前ら空を飛べるなんてよ！！！　こらぁぁっ、俺を置いてくんじゃなぁぁいっ！！！！」

結論にたどりつくのに１０秒かかった。剣士であるガウリイのみ

は当然空を飛ぶことが出来ない。そのまま2人を全速力で追いかけていった。

3人がレストランででも互角な食事バトルを繰り広げたのは、別の話である。

初登場呪文など

・火炎球（ファイヤー・ボール）

火炎系では初歩的な呪文。火球を生み出して撃ち出し、着弾した火球は爆発すると同時に周囲に火炎を撒き散らす。リナが絶好調の場合は鉄をも溶かしてしまうほど強力になることがある。

・竜破斬（ドラグ・スレイヴ）

リナが主に使用する必殺魔法の一つ。闇魔術に分類される。赤眼の魔王の力を借りることにより、赤光が伸びて着弾した目標の精神を破壊し、余剰エネルギーが爆発するという効果を持つ。威力は街一つを消し去ってしまうほどの力を持つが、リナが憤りを感じることがあればつい濫用してしまうケースが多い。

・炸裂弾（ディル・ブランド）

地面を爆発で吹きあげる呪文。術者を中心に波紋が広がり、相手を拭き飛ばすが、殺傷能力は低い。その強化版に爆裂弾（メガ・ブランド）がある。

・翔封界（レイ・ウィング）

風の結界を纏い、高速飛行を可能とする呪文。しかし、欠点が多く存在し、一つを上げれば、最高速で飛行するには地面スレスレで飛ばなければならない。また、持続時間は術者の集中力により長距離は移動できない。

・舞空術

前者とは異なり、全身の気をコントロールしながら放出することによって空中飛行を可能とする技。元々鶴仙流独自の技だが、原作『ドラゴンボール』に登場するほとんどの戦士がこれを体得した。

・かめはめ波

悟空が主に使う必殺技の一つ。体内の潜在エネルギーを凝縮し、光線状に一気に放出する。瞬間移動と併用して後ろに回り込んで使用したり、それを利用して空中移動を行ったりなど、色々な用途がある。悟空の場合、熟練したために捻じ曲げて方向を変えることが出来る。勿論、大量のエネルギーを消費するものの、超サイヤ人になるとさらに威力が倍増される。

・瞬間移動

悟空がヤードラット星人に教わった超能力。知り合いの気を感じ取り、瞬間的にその場所まで移動する。移動範囲は、原則上神や死者しか行けないあの世までと、非常に広い。

改めて出発進行！！　手を組んだ最強戦士と最強魔道士

悟空達はとある街のレストランで昼食をとっていた。

食欲は尋常ではなかった。健啖家であり、普通に料理を一人当たり3人前～メニュー全部のあたりの量を注文するのであった。それらを当たり前のように全て食べ切ることが出来るのであった。それでも体型が全然変わらないのは全くの不思議である。

山ほどあった料理も、がつがつ食べまくる3人によって空っぽの皿が３０段、４０段と積み重なっていった。

最後のお皿に残った一つのシューマイをガウリイのフォークが捉えようとした。しかし、その動きをリナのが押さえた。

「ちょっとぉっ！！　取らないでよ！！！！　これ、あたしが最後に取っておいたものなんだからぁぁっ！！！！！」

「何言ってんだ！！　これは俺が先に見つけたんだぞぉっっ！！！！」

リナとガウリイは、まるで剣のようにフォークを使って必死に決闘していた。

２人は今まではこういう風にお互いに競り合って、必ずどちらかが勝ち取るという事になっていた。

「いっただきっ！！」

「「あああっっ！！！　あたし（俺）のシューマイいいっ！！！！！」
」

しかしその決闘の合間に、悟空という名の第三者に、笑顔満々で漁夫の利を取られてしまった。

「こらぁぁぁっっ！！！！！　よくもあたしが取っておいたシューマイをっっ、この泥棒ザル！！！！」
「だから俺のだって！！」
「ははは、わりいわりい！　残ってたからもう食べねぇのかなぁと思って！」
「あたしらをないがしろにするなっっ！！！！！」

笑いながら言い訳をする悟空にリナが欲求不満のままでつっこんだ。

「でも、おめぇら十分バカほど食ったじゃねぇか」
「メニュー全部を頼むあんたに言われたかないわ！！」
「ははははは！！」
「笑って済ますなぁっ！！！！」

またもや彼女は突っ込みを入れた。

「そうだ…。なぁリナ、ちっとおめぇに聞きてぇことがあるけど」

「何？」
「この世界って一体どんなとこだ？」
「ええっ？」

リナは悟空の発言を聞いて驚いた。

「ちょっと、何急にあたしにそんなこと聞いてくるのよ！？」
「ええっ…！？　いや、オラ全然わかんねぇから聞いてるだけだけど…」

彼女はため息をついた後、悟空に一つ尋ねてみることにした。

「それじゃあ…、”シャブラニグドゥ”とか聞いたことある？　あたしの”竜波斬”などの魔術は、その魔族の力を借りて発動してるんだけど…」
「”シャブラニグドゥ”……？　……なんだ？　その…、しゃぶしゃぶみてぇでめっちゃいいにくそうな名前は…？」
「だぁぁぁっ！！！！」

腕を組みながらもじってきた。もじって全く別の食べ物の名前に変えてきた。

勿論である。初めてその名を聞いたので、悟空には全く意味不明であった。

「あっ、…確かにしゃぶしゃぶに聞こえるな」
「聞こえるか！！！　どんな耳してんの2人とも！！？」
「こんな耳だけど？」
「その耳じゃないっっ！！！」

またもやガウリイの天然が炸裂したので、彼女は後頭部にスパンとキレのいい音を一発鳴らした。自分の片耳を見せつけてきたからだ。

悟空はそれを見て少し困惑していた。

「まあとりあえず…、オラはこの世界の事を知りてぇんだ」
「はぁ…。…結構長いから、ちょっと混乱してしまう事があるかもしれないけど…、いい？」
「ああ」

リナは渋々ながらも、説明することにした。

今悟空がいる世界は、同じく地球の中である。しかし、その中の世界の構造はここでの伝説によれば、まるで皿回しをされているような状態であり、”混沌の海”という基盤が杖を持って幾つかの皿を支えている。また、それぞれ色々な世界が存在しているというそうだ。

それぞれの世界には神族と魔族が存在している。それぞれの国には両者の間で抗争が起こっている。特に魔王はその杖を欲しがり、

世界を滅ぼそうとしていた。魔族側の赤眼(ルビーアイ)の魔王”シャブラニグドゥ”はその野望を秘めていたものの、それと対の存在である赤の竜神(ゴン)”スィーフィード(フレアドラ)”との争いによって、約５０００年前に７つに分断されて封印された。

しかし、１０００年前にその一部が復活した。スィーフィードの分身である水竜王に倒されたものの、その身体と大地が繋がってしまったのだった。そのためにこの世界の均衡が崩壊し、モンスターという者たちが増殖していった。

ちなみに、ある事件によってその魔王のもう一部が復活してしまった件があったものの、リナ達によって滅ぼされている。ただ、あと５つが封印されているのでまだ”竜波斬”などシャブラニグドゥの力を借りて発動する黒魔術を使用することは可能である。

「そういうことなんだけど……、わかった？」
「ちっとはわかったかな…」
「さっぱりわからん…」
「あらっ…！」

２人はそれぞれ個性のあふれる感想を述べた。悟空は納得した様子だが、ガウリイは腕を組んでそう答えた。それを聞いたリナは机の上に伏した。ガウリイにとってはあまりにも複雑すぎて、頭の中での整理がつくのがとても困難だったのだ。

「とにかく魔族とか神族とかっていうすんげぇやつらがこの世界にいて、めっちゃ仲がわりいってことはわかった…」

「そう捉えても別にいいけど……ってそういえばガウリイ……、あんたには前も一度話したじゃないのぉっ！！？」
「そうだっけ？」
「あああっっっ！！！！　まだ一年も経ってないのに、このゼリー頭！！！」
「くぁっっ…！！！」

彼女はさらにガウリイの後頭部に蹴りを加えた。効きすぎたのか、彼はしばらく机の上に伏していた。

実は、ガウリイは前にも聞いた事があった。しかし、クラゲ頭には記憶力が全然ないのか、まったく一文字たりとも覚えていなかった。

―こいつ、さっきもそうだけど…、手加減ってぇのを知らねぇんだよなぁ…。

２人の様子を見て、彼はまたもや困惑していた。実際、彼女にはオーバーすぎる点がよく見られるのであった。盗賊を狩るときにはいつも”火炎球”などの精霊魔術を用いたり、彼女が憤慨した際には”竜波斬”を発動したりして、駆逐を繰り返していた。また、こういう突っ込み方が彼女流の軽いコミュニケーションだという。彼女が世間で悪く見なされているのは、その破天荒な性格にもあるともいえよう。

「ってぇことは……リナとガウリイは、その魔族のやつらを退治す

るために旅してんのか？」
「いいや、実際に…」

しかし、彼が答える前にリナに顔を机にガツンと強く押さえつけられた。皿の塔が大きく左右に揺れた。

「そうそう！！　この美人で最強の魔道士、リナ＝インバースはそういう悪い連中をやっつけるために世界を股にかけて旅を続けてるの！！」
「り…、リナ……、顔がぁぁっ……」
「うるさいわねぇ…。あたしの信用を得るためにこういうことしてるんだから、我慢しなさい…」
「そんなぁぁぁ……」

リナは小声で彼を注意した。

「ならさぁ…、オラも一緒に付いてってもいいか？　その魔族ってぇのを倒しに」
「「ええっ！？」」

ついに悟空は、リナ率いるパーティの加入宣言をしたのだった。

しかし、リナは腕を組んでこう言った。

「でも…、魔族という存在は非常に強力な力を秘めているから、普通の人間を連れていっても当然足手まといになるだけよ。例え、さっきあなたが出したかめはめ波を打てるとしてもね」

一瞬、彼女は決まったと自分の態度に誇りを持った。

しかし、これでは悟空は諦めるどころか、さらに好奇心を湧かせるだけだった。

「オラさ…、そういう強そうなやつのことを聞くと、うずうずしてたまらねぇんだ」

「”うずうずしてたまらねぇ”って…、悟空！！　本気で言ってるの！！？」

「やめといたほうがいいぞ…。俺リナの保護者でもあるけど、飼い主でもあるから…」

「そっちかい！！！　てかあたしは犬かっ！！！」

リナはまた彼に突っ込みを入れた。

「オラ、その魔族ってぇのと戦ったことあるし」

「「ええっ！！？」」

実際悟空は、この世界のとは全く異なるが、魔族と戦った経験が何度もあった。幾つか例を上げると、まずピッコロである。少年期に仲間を殺され（結局はドラゴンボールによって生き返ったものの）

一度敗北したが二回戦でついに大魔王を倒した。青年になってその息子であるマジュニアと戦ったが結局は共に戦う者というかけがえのない仲間の一人となった。次に不老不死を手に入れ、世界征服を目論んだガーリックＪｒ．もである。言うまでも無く彼は強力で苦戦を強いられ、２度も戦うこととなったが、一度目は悟空、二度目はその息子、悟飯が別空間に閉じ込めたのだった。

「驚いたわね…。ちょっと種類は違うけど、既に魔族と戦った経験があるとはねぇ…」
「まぁ、オラだけで戦ったわけじゃねぇんだけどな」
「じゃあ、別にこいつを連れてっても、別に何の問題もないんじゃないのか？」

ガウリイが耳元でそう彼女に促した。

「そ…、そうね…」
「そんじゃ、オラも付いていっていいってことか？」
「そうだな」
「よっしゃ！！　すっげぇワクワクすっぞ！！」

２人は異常に気分が高まっている悟空の姿を見て困惑していた。

「いいけど、一つだけ条件があるわ」
「なんだ？」

普通の気分に戻った悟空が応えた。

「それは…、あたしの言うことを必ず守る事！！」
「へっ！？」
「おいおい…。リナらしいなぁ…」

ガウリイが呆れた様子で言った。年上をこき使う、リナにとってこんなことは当然であった。

「ええっ…、例えば……？」
「例えば……、悟空がいつも食事のゴチになることかな？」
「ゴチになるって…、オラ一文も持ってねぇぞ」
「「えええっ！！？」」

悟空はポケットを裏返して2人に見せびらかした。

悟空は働いていたものの、ある意味で”働いた”事がないため、金をロクに集めた事がなかった。サイヤ人の本能によっていつも戦いに明け暮れていたからだ。

「仕方ないわねぇ…。…まぁいいわ。それじゃあこれはガウリイがいつも奢るという事で…」
「えええっ！！？　そんなぁぁっっ！！！？」
「冗談よ！　……まぁ、この旅はあたし中心で続けてるみたいなも

のだから、それ相応に扱ってちょうだい。いい？」
「ああ、わかった。……そんじゃいくとすっか！！！」
「そうだな！！！」
「わかってなぁぁいっっ！！！！」

出発宣言をした悟空やそのノリに乗ったガウリイに、リナは激高した様子でつっこんだ。

「早速約束を破ってるし！！！！」
「オラ先に行ってるから、勘定頼むな」
「それじゃあ！！」
「パシってないで戻ってこぉぉい、このクラゲ、サル！！！！」

―はぁ…。こりゃロクのないことばかり起こりそうね…。この先…。

リナは落胆した。また、取引して1分も経たぬ間に後悔していたのであった。

こうして3人の珍道中が始まったのであった。

「そういやぁ、リナの保護者ってことは、ガウリイはリナの父ちゃんなのか？」
「そうだ」
「違うわ！！！　そういう意味で使ってない！！！　って自然に断定するな！！！」

パーティ全員集合！！　最初の敵は御伽噺の魔人！？　：　前編（前書き）

今回からＮＥＸＴに入ります。

ＢＧＭ　：　『ＳＬＡＹＥＲＳ　ＮＥＸＴ　ＳＯＵＮＤ　ＢＩＢＬＥ』、『ドラゴンボール改　オリジナル・サウンドトラック』より

パーティ全員集合！！　最初の敵は御伽噺の魔人！？　：　前編

空から見下ろせば壮大な森の先に一つの城が建っており、また、その周辺に広い城下町があるのがわかる。

つまり、一行はついにゾアナ王国に入ったのだ。

この時、祭りが行われており、力自慢があったり、街の娘達が踊っていたり、芸者がそれぞれ個性溢れる芸を披露していた。

とにかくこの様子から伺える事は栄えているということだ。しかし、今の一行にはそんなの関係ない。とある用事があってこの王国に来たのだ。

「おばちゃ～ん、あたしAランチ3人前！！！」
「ああ俺にも3人前！！」
「オラは5人前！！」

3人が元気よく料理を注文した。

一行は腹を空かしていた。旅をしながら色々な珍騒動に巻き込まれては、ド派手に閉めていたからだ。

「はい、お待ち！」

料理が来たこの時が火蓋であった。

「「いっただきま～す！！！」」
「おりゃあああああっ！！！！！」

そして勢いよく食べ始めた。パスタを強引に巻いては食べ、ソーセージを取りあい、といつものパターンが始まったのだ。

「ちょっと邪魔よっっ！！！」
「ええじゃねぇか、オラもめちゃんこ腹減ってんだし！！」
「少しは遠慮しなさいよ！！！」
「リナこそ遠慮ってものがないのかっ！！？」
「何ですってぇっっ！！！！」

こう言う風にだ。口喧嘩をしながら大食いバトルを繰り広げていた。

「ところでリナ、しばらくこの街にいるつもりなのかぁっ…！！？」
「そりゃなんてったって―」

ソーセージを狙っていたリナとガウリイのフォークが挟まった。
2人は眼で牽制し合い、フォークでガンガンと金属音を立てながら交えていた。

「って何回説明させんのよこのクラゲ頭！！！」
「もーらいっ！！！」
「「だぁぁぁぁっっ……！！！！！」」

悟空にソーセージを横取りされ、２人は悲鳴を上げた。

「旅に加わってからいつもそうだけど、こっちが揉めあってる合間にセコすんな！！！」
「ははは！！」

リナは笑顔のままの悟空に突っ込みを入れた。

「がぁっ…！！！？」

突然ガウリイの後頭部に巨大な壺が何故か直撃した。そのまま彼は伏してしまった。悟空とリナはそれを見て茫然としていた。

「なっ、なんだ今の…？」
「…なんだか知んないけど、今のうち！！！」
「おい、ええのか気にしなくて…、ってあああっっ！！！　それオラの肉だぞっ！！！」
「あんたに言われたかないわ！！！」

しかし、全く彼のことを心配せずにリナは再びガツガツと食べ始めた。お返しを食らった悟空もまた食べ始めた。

すると今度は人が派手にテーブルに突っ込んできた。いや、吹き飛ばされたのだ。そのおかげで料理はめちゃくちゃになってしまった。

「あたしのごはん…」

「あちゃあ…」

またもや2人は茫然としていた。

「ケンカだケンカだ!!!」

悟空がその声に釣られ見回してみると、何が原因で始まったのかは不明だが、喧嘩が勃発していた。男達が椅子を使うわ、殴り合うわ、大変なことになっていた。

リナはすごい剣幕で立ち上がった。身体が少し震えていた。

「あたしのごはん……、あたしの…ごはん……!!!!」

涙目でリナは反芻していた。その表情とは裏腹に怒りが二次関数

的に湧きあがっていた。

「“炸裂弾”！！！！！」

関係ない人々を全く気にせずにリナはそれを発動し、周囲を吹き飛ばした。

「なっ、なんだ……！！？」

「何しやがる…！！！」

吹き飛ばされた男達が言う。煙から一つの影が浮かび上がり、ゆっくりと近づいてきた。勿論リナである。

「あんた達がどこでどうケンカしようと勝手だけど、そのケンカに人様を巻き込み、なおかつ乙女の食事を邪魔するとは言語道断！！！　しかも、その相手がこのあたし、リナ＝インバースとなれば、この程度のお返しで済んだってのがラッキーってことね！！！」

リナは一方のチキンで2人を指しながら宣言した。

「いっちちち……。…あいつまたやってやがる…」

悟空が頭を押さえてリナに目を向けながらいった。

2人の男は剣を抜きだし、リナに向けた。

「こっ、このクソガキ！！！」
「ちょっと待った！！」

ガウリイが声を上げ、スパッと2つの刃先を切った。すると見事にバラバラになった。

「けけけけけ剣が…」
「街中でそんなもん振り回すとあぶないぜ」

ガウリイが2人を注意した。

「ところであいつ、リナの踏み台にしてはなかなかの腕なんだなぁ…」

ガウリイの凄さを実感した悟空であった。いつもリナにいじられている姿しか見かけないので、保護者にしてはあまり大した奴じゃないと思っていたのだった。

「それにさぁ、あいつに逆らったらホントに何されるかわかんないぞ…」
「ちょっとぉっ！！！　聞こえてるわよ！！！」

耳を借りてこそこそと話すガウリイにリナは突っ込みを入れた。

「それを聞いたからって『はい、そうですか』って引き下がれるか！！！　よぉし、こうなったら徹底的にやってやる！！！」

「おおっ…！！」

これでも2人はこの最強の娘に立ち向かおうとしていた。

「やめたらいいのに…」

本気になっている2人を、いつしかガウリイは心配するようになっていた。

実際リナは凄かった。たった一人でラリアット、飛び蹴り、パンチをうまくこなしては沢山の男たちを徹底的にぶちのめしているのだから。

「あいつ、素手でもやるなぁ」
「このぉぉぉっっ！！！！」
「うあああああっ！！！！！」
「んっ…！」

今度は前後から悟空を殴ろうとする男達が接近してきた。

「よっと！」

そのまま殴るかと思いきや、当然悟空は瞬間移動を用いて回避した。

「「がっっ……！！！！」」

当然の結果である。お互いの拳をまともに喰らい、仲良く後ろに倒れたのであった。

ガウリイの真横に悟空の姿が現れた。

「よっ！！」
「わっ…！　…なんだ悟空か、おどかすなよ」
「わりい。…リナのやつ、いつもこんな感じなのか？」
「まあね…。あいつ、一度売られたケンカは必ず買いまくるほうだから…」
「そっか。てかあんなに手加減しねぇのに会ったの、久しぶりだな」

悟空とガウリイは手加減なしに懲らしめ続けるリナの姿を見ながらそう言った。

「このアマぁ、少しはやるじゃねぇか…！！」

「“霊呪法(ヴ＝ヴライマ)”！！！」

リナは地面に手をつき、その呪文を発動した。地面に光の筋が亘っていき、そのまま銅像に直撃した。すると、その銅像がゆっくりと腕を広げた。

「ひえーーっっ！！！　あんなでけぇ銅像も動かせんのか！！！！？」
「まあ普通なんだけどね」

悟空は今遭遇している現実にびっくり仰天していた。彼は、彼女の凄さを知っているだけで、魔術については全く知らない。

「それいけぇぇっ！！　えやっ！！　はぁっ！！！」

銅像はある2人の男を持ち上げ、両者の頭を何回も何回もぶつけ合い、そのまま投げ出した。

すっかりリナの周りには瀕死の男達が倒れていた。それでも彼女たちを回り込む人々はリナの凄さに感心していた。

その人々の中に、馬に跨り、ティアラとピンクのドレスを身に纏った女の子がいた。どこかの国らしき国旗の旗を掲げ、後ろには2人の家来を連れていた。彼女はリナの姿を見ると驚いた。

リナもまた彼女を見つけると驚いた。

「り、リナさん！！？」
「あ、アメリア！！？」
「リナさぁぁぁん！！！　お久しぶりですぅぅっ！！！」

するとアメリアと呼ばれたその人はリナに飛び込んだ。リナは彼女をキャッチし、うまく着地させた。

「アメリアじゃないの！　どうしたの、いい服着ちゃって！」
「なんだ？　知りえぇなのか？」

悟空がリナ達のもとに向かって尋ねた。

「そういえば悟空には初めてだっけ？　この子はアメリア！！　あたしに一生懸命貢いでくれてる最高の仲間よ！！」
「あらっ…！！　貢いでくれてるって、今まで私達はそのためだけの関係だったんですかっ！！」
「冗談よ冗談！！」

彼女の名は、結構長いが、アメリア＝ウィル＝テスラ＝セイルーンである。彼女は“セイルーン”と呼ばれる、世界的にも有名な大国の王女である。しかし、この前はリナ達と共に旅をしたり、共に魔族と戦った事があるのであった。

「ところでリナさん、この見慣れない服を着たこの人は…？」
「オッス、オラ孫悟空！！　ちっとこいつに世話になってんだ！！　よろしくな！！」
「孫悟空！！？　あの“西遊記”のですか！！？　…でも…、実物は意外にも人の身体をしてるんですねぇ…」
「あのねぇ…」

リナが今の彼女の一言に呆れながらそう言った。悟空はその意味が分からなかった。

「なんだ、アメリアじゃないか！」
「はっ、ガウリイさんも！！」
「よっ！」

ガウリイも人ごみの中を通ってリナ達のもとに来た。

「それにしても、相変わらずですね…」
「まあね…」
「でも、こんなところでリナさん達にまた会えるなんて…、…何をしてたんですか？」

アメリアはリナに尋ねた。

「何をしてたのってそりゃ、ゾアナの魔道書を見に来たに決まってんじゃないのよ！」

リナは笑いながら答えた。

「そういうアメリアは違うのか？」

「ああ、私はお父さんの代理で…、…あっ…！！」

すると言いかけた矢先に途中で台詞を切り、首を振って、何故か台詞を変えた。何やら内緒にしたかったようだ。

「そっ、そうなんです！　私もゾアナの魔道書を見に来たんです！」

３人は彼女の行動に不信感を持つようになっていた。今の彼女の誤魔化し方でそう感じ取ったのだった。

すると焦ったままアメリアは後ずさりし始めた。

「じゃっ、じゃあ…、私には他に行くところがありますから…、この辺で…。それじゃ、そういうことで！！」

アメリアは馬に跨り、砂煙を立たせながら、目にもとまらぬ速さで去っていった。

3人はただ困惑しながら見届けることでしかできなかった。

「…え…？」
「なんだ…？」
「アメリアっちゅうやつ、そういやなんであんな派手なドレス着ちゃってんだ？　ひょっとして、ここの王女様なんか？」

いや、ここの王女ではない。むしろ、ゾアナ王国の王女はアメリアとは全く正反対の考えを持っているのであった。

それでは、その王女がどんな人なのか見てみよう。

城下町で見上げるとよく目立つ所に立っている城。その中では例の王女、マルチナ＝ゾアナ＝メル＝ナブラチロワと、その父親であるモロス国王が話しあっていた。

「お父様、セイルーンの使者が到着したとか！」
「うむ、フィリオネルの奴め、自分の娘を送ってきおった」

フィリオネルとはセイルーンを統治している“王子”であり、ア

メリアの父親でもある。ちなみに、何故その人が国王ではなく王子なのかはまだその父親が国王に在位中であるからだ。しかし、病弱のため、代わりにフィリオネルが治めているのであった。

「ということは…、セイルーンはまだわが国の誠意に、確信を持っていないと…？」
「さて…、それはどうかな…？　何しろ喰えん奴だからな…。だが、セイルーンがどう出ようとも、いずれ世界は我が手に…」
「その通りですわ、お父様」

このやり取りから察するに、世界征服という、決してよからぬ目論みを立てているのであった。

すると、2人は少しずつ笑い始めた。

「「はっはははははは！！」」

そして大笑いに発展した。よほどゾアナ王国の戦力に自信があるのであった。

しかし、2人は急に笑うのをやめ、目を合わせると、またそれより大きな声で笑い始めた。もっと大きくした方が悪者らしいのかと思ったに違いない。

今度はモロスが急に息を切らし始めた。どうやら調子に乗り過ぎたようだ。また、一つ懸念していることがあった。

「はぁ、はぁ、はぁ…。時にマルチナ…」
「なぁに、お父様」
「このレリーフ外しちゃあいかんか？　不気味でしょうがないんだが…」

モロスが王席の背後の壁に掛けられている、金銀と半分半分に塗り分けられ、五か所に角のようなものが生えている顔のレリーフを指差しながら、マルチナに尋ねた。

「あら、かっこいいじゃありませんか。私の信じる、魔人ゾアメルグスターですのよ」

マルチナがそう言い返す。

「お前の趣味をとやかく言うつもりはないが…、わしの玉座に掛けるのはちょっと…」
「却下いたします」
「そうか…」

そっぽを向いたマルチナに即却下され、モロスは項垂れた。父親と言えども、あまり勇気がなかったのであった。

「それよりも、今はセイルーンの使者を…」
「…なぁに…、小娘も一人や二人、どうにでもあしらえんわい…。それとも、フィリオネルの娘を人質に取り、一気にセイルーンに攻め込むとするか…」

彼は立ち直り、今後の計略を立てていた。アメリアを出しに使って、侵攻しようという卑怯な手段を採用しようとしていた。

「フィリオネルの娘はなかなか魔道に長ける者だと聞きます。そううまくいきますかしら…？」
「どれほど魔道に長けようとも心配はいらん。…のう、魔道士どの。」

モロスがある方向に視線を向けた。マルチナもつられて、顔を向けた。

そこには、アイボリー色のマントを被り、マスクを着けている、ターコイズの肌とアイリスの髪をした男が立っていた。鋭い視線が2人を見ていた。

「すっ、すてき…」

しかし、マルチナは見てすぐに惚れた。

この人もまた、アメリアと同じ、いやそれ以上に魔道の技術が長

けているのであった。２人はもはや勝負あったと確信した。

一方パーティ一行は街中を歩いていた。行先は城である。２つの目的を果たすために行くのであった。

「あのアメリアの態度、明らかにヘンだったわよね…」
「いつもあんなもんだった気もするけど、ちょっとな…」
「あれじゃあ、実はなんかの事件に絡んでますと言ってるようなもんよ」

リナはある確信を持っていた。

「絶対、なんかの事件に関わってるに違いないわ！！　それであたし達を巻きこませまいとして、わざとよそよそしく振る舞ったのよ」
「って事は、あいつそのためにあんなカッコをして、城に向かったってわけか？」
「ホントかよ？」

リナには強力な魔力容量（キャパシティ）だけでなく、かなりの推理力と洞察力をもつ。しかし、彼女の性格のために偏見で決めつけられるパターンが少なくなかった。そのため、保護者の彼は納得出来なかった。

「それしか考えらんない！！　だってアメリアはあたしに絶対服従を誓ったはずだもん！！」
「いつ誓ったんだよいつ！？」
「さっきリナはそう言ってたな」
「ええっ！！？」

ガウリイは困惑しながら突っ込みを入れた。

「とにかく！！　今はアメリアを助けてやんなきゃ！」
「ええっ！！？」
「何よ？　今度は？」
「いや…。なんか珍しくまともな事を言ったなって…」

その一言を言った途端、ガウリイはリナに背後から強く両頬を抓られた。

「あたしだってたまにはまともなこと言うわよ！！！」
「痛いたいたい、あ～～～っ…！！！」

リナはパッと離し、拳を握りしめた。

「それに！！」

「それに？」
「あの子はあれでも一応セイルーンのお姫様なんだから！！　うまくいけば、手をまわしてゾアナの魔道書を優先的に見せてもらえるじゃない！！」
「あのぉ…。さっきからなんだ、そのゾアナの魔道書って…？」

今度は屋台の売り物に顔を叩きつけられた。悟空は困惑していた。

「も～～～～っ！！！　何回も説明したでしょうがこの脳みそヨーグルト男！！！」
「食べます？」
「いらないよっっ！！！」
「それじゃあオラが―」
「わざわざノラなくていい！！！」

そういうショートコントはさておき、リナは眼を輝かせながら、またゾアナの魔道書を説明することにした。

この世界で最も有名な魔道書の一つに“異界黙示録（クレア・バイブル）”が現存し、しかもその内容は魔王の復活などに関わる事項が明記されている。ゾアナの魔道書はそれに匹敵するような代物で、ここの王国に保管されている。ちなみにそれは５０年に一度王室にて限定公開されるようになっている。丁度今が５０年たった日である。

リナはそれが目的でゾアナ王国にこの上なく行きたがっていたのであった。

「ふ～ん、そのゾアナの魔道書っちゅうもんを手に入れて、魔族を倒す方法を見つけるってことか」
「ってこと。わかった？」

リナはもうこれで理解しただろうと思い、彼に確認を取った。

「あっ、すまん。聞いてなかった」
“炸裂弾”！！！」
「どえええええっ……！！！！」

またもやリナはその呪文を使い、ガウリイをお仕置きしたのであった。

「あのなぁ、ちっとは手加減てぇのを…」
「うるさい！！　これが彼に対するあたしなりの調教なのよ！！！」
「ちょ…、調教…？」

一瞬、本当に保護者と子供との間の均衡が成り立っているのかと少し混乱した。

「さて、つべこべ無駄話してないでゾアナの魔道書を見に行くわよ！！」
「お、おい…！！」

悟空はマイペースのリナを追いかけていた。一体どっちが重要なのかさっぱり分からなくなってしまった彼であった。

パーティ全員集合！！　最初の敵は御伽噺の魔人！？　：　後編

アメリアは2人の家来と共に、巻物を持ちながら入城した。

扉が開くとそのまま渡り、廊下に沿って歩きだした。

フィリオネル王子はモロス国王との間にある用事があり、そのためにアメリアを派遣して果たそうとしたのだ。彼女はやる気満々であった。

ただ、一つ懸念している事があった。リナのことである。

―あ～あ…、リナさん達に悪い事しちゃったかなぁ…？　でも、今回私はセイルーンの外交特使として来てるんだし！　そんなとこに騒動と破壊の象徴であるリナさんに首を突っ込まれたら、それこそ戦争になりかねないし…！

もしかしたら、自分の事でリナ達が駆け付けて来るのだろう。自分の代わりに、過剰なお返しを仕出かしてくるのだろう。それを封切りに戦争を好まないセイルーンが弦を持たなければならないのだろう。そう不安を抱いていたのであった。

彼女は知らない。まさにそうなりそうになるとは。

彼女が気付くと、もう王室の扉の前にいた。そこにいる家来がゆっくりと扉を開けると、中から吹奏部による歓迎の曲が鳴り響いた。その中を彼女は渡っていった。

彼女が玉座の前で立ち止まり、座っているモロスが手を上げると演奏は止まった。そして彼から口を切った。

「これはアメリア殿、遠い所をよく来た」

モロスが念を押す。アメリアはため息をつくと、巻物を広げモロスにバッと見せた。

「モロス国王、上意である！！　貴国が我が国との約束を大きく違い、著しく兵力を増強しているのは明白！！　よってこれ以上軍の拡大を続けるならば、正義の名のもとに、セイルーンは貴国を敵対国家と見なします！！」

それを聞いた家来や兵士達はざわめき始めた。

「アメリア殿、我が国の軍備はあくまで自衛のための―」
「お黙りなさい！！　自衛のための軍備であろうとも、他の国が脅威となっているのは確か！！　それにより、国と国の間にいらぬ緊張が高まり、何れはどこかで争い事が起きましょう…！　そうなった時、いかに責任を取るつもりか！！」

彼女の持論は説得力が高く、内容もまた事実であった。彼の顔からは焦りの色が出始めていた。

「あっははははは！！！　あっはははははは！！！」

マルチナが今のやり取りを聞いて笑い始めた。王室にいる全員が、シャンデリアに乗っかっている彼女をすぐに見た。

「とおっ！！！」

マルチナは大きくジャンプし、そのままゆっくりと降下した。全員が彼女を目で追っていく。

「うわぁっ…！！！」

しかし、着地は見事に失敗した。派手に頭から地上に叩きつけられたのだった。

「ひねりが甘いです！！　着地の時はこう回転を加えて―ぐわっ…！！！」

そう忠告するアメリアもまた頭ごと地面にぶつけた。

「あんたに指図される意味合いはないわ！」

マルチナは罵倒した。気を取り直して彼女は次のように宣言した。

「責任は我が国が、この世を支配することで取りましょう」

彼女の言葉を聞いたアメリアはゆっくりと立ち上がり、彼女と目を合わせた。

「この世を支配ですって…！？」

「その通り。そしてこの世を魔人ゾアメルグスターに捧げるのよ！」

マルチナはゾアメルグスターのレリーフを誇りよく見せながら宣言した。むしろ、明らかに今のところ、マルチナとモロスの立場が逆転していた。

モロスは今の発言に動揺を隠せなかった。

「いやぁ、わしはただ世界征服がしたいだけなんだけど…」

彼は念のため、こう補足を付けた。

「いずれにしても、私の野望の一番の邪魔になるのは、セイルーンよ！」
「この世を支配し、怪しげな魔人に捧げようとする野望、それはつまり悪！！　天が許しても、このアメリアだけは許さない！！」

両者一歩譲らず。

「言ってくれるわね！！　皆の者、この小娘を取り押さえなさい！！」

すっかり兵士にアメリアを取り押さえるよう命令するまでにいった。するとモロスが彼女に寄り縋った。

「あくまでも王はこのわしなのだぞ、マルチナ…」
「お父様は黙ってて！！」
「あ、はい…」

情けなく娘の命令に従うはめになった。彼は自問した。本当に自分は父親としての自覚を持っているのだろうかと。

「かかれ！！」

マルチナの合図で一斉に兵士が槍を突き付け、彼女を取り押さえ

た。マルチナはそのざまを見て高笑いしていた。

「“爆煙舞(バースト・ロンド)”！！！」

アメリアがその呪文を発動した。すると地面から複数の小さな火球が飛び交い、兵士を吹き飛ばした。

「くっ…、魔道に長けているのは本当らしいわね…。だけど、こっちだって…！！」

するとマルチナは口笛を鳴らした。

すると煙の中から、例の魔道士の姿が現れた。マスクを外し、アメリアと対峙した。

彼女はその魔道士を見て、驚いた。

「はっ…！　ゼルガディスさん！！？」

ゼルガディス＝グレイワーズ。実は彼もまたリナ達の旅仲間であった。彼はこう見えても元々は普通の人間であり、かつての宿敵、赤法師レゾによって合成獣(キメラ)にされたための容貌であった。

「こんな再会をするとはな…。ほっ…、何の縁だか…」

ゼルガディスがそう呟くと剣を抜き、アメリアに向けた。

「どうしてゼルガディスさんがここに！？」
「俺は今この国に雇われている。つまり今の俺とお前は、敵同士ということだ」
「そっ、そんなぁっ！！？」

ゼルガディスがそう言い放つと彼女はさらに愕然とした。

「最近俺はお茶目な奴と思われているようだが、これが本来の俺の姿だ！」
「ああっ…！！　かつて正義の為に戦った2人が、引き裂かれて戦い合わなければならないなんて…！！　なんて燃えるシチュエーション！！」
「おい…！」

何故か前向きに立ち直り、ゼルガディスは思わず扱けそうになった。

「俺の力は知っているはずだな、アメリア」

ゼルガディスは構えの態勢に入った。彼女もまた構えた。彼はやる気だが、彼女は葛藤していた。

―かつての仲間と本気で戦うなんて…、でも、ゼルガディスさん相手に手加減なんかしたら勝てるわけありませんし…。けど、昔の仲間だからといって、その行いを全て多めに見ることも、決して正義とは…。

「はっ…！　ああっ…！！！　いつの間にぃぃっ！！！！？」

不覚にもアメリアが葛藤している隙を取られ、沢山の兵士に縄で腕ごと巻きつけられていたのだった。これでは呪文が使えない。ゼルガディスはあまりの彼女のドジさにまたもや扱けそうになった。マルチナはすっかり大喜びしていた。

「さすがにやりますねゼルガディスさん！！　私の正義を愛する心を逆手にとっての心理攻撃とは…！！！」

「別に狙ってやったわけではないのだが…」

ゼルガディスは剣を鞘に戻しながら、そう返した。

彼女は父親譲りで正義という志に心酔していた。ほとんど彼女が戦うときにはそれを忘れずに、それをモットーにしていたのだった。そのため、このようにドジを踏むようなことがあるのであった。

アメリアは城内の塔にある鐘に吊るされた。ゼルガディスは塔の淵で座り込み、外を眺めてたそがれていた。

「私は世界の平和のためにここで散るのよ…、はぁ…、なんて美しい…！」

「もしもに浸ってる場合じゃないんだけどねぇ…」

モロスは、こんな状況でもよく普通に妄想を繰り広げられるなと呆れていた。

「はっ…、それはよく考えたらそれは私の役じゃない！！　私は囚われの姫を助けるヒーローになりたいのにいいっ！！！」

「何訳わかんないこと言ってるのよ！　…ともかく、これでセイルーンは私の思うがままよ！」

「いや、お前じゃなくて―」

「いいえ、いかに陰謀を巡らそうとも、最後に勝つのは正義です！！　確かに今の私は囚われの身！！　正義を愛する誰かが私を助けに…！！」

来た。爆発音が鳴り響いた。すさまじく砂煙を放ち、兵士が吹き飛ばされていた。

「なっ、なんだぁっ！！？」
「もしかして、セイルーンの奇襲攻撃！！？」
「そんなぁぁぁっ！！！」

「“炸裂弾”！！！」

―この声はもしかして、リナさ―

塔の天辺が大爆発した。破片が次々と落ちて来る。

「よっと！」
「助けに来たわよ、アメリア！！」

そこに現れたのはリナ達であった。リナは“翔封界”、悟空は舞空術を使って着地したが、ガウリイは唯一空を飛べないため２人に支えられていたが失敗した。

「だっ、誰だ貴様は！！？」

リナは髪を靡(なび)かせ、自らを名乗り出た。

「ふん…、問われて名乗るもおこがましいが、誰が呼んだか美少女天才魔道士リナ＝インバース―」
「お、おい…」
「あああああっ！！！　何よもう！！　今いいところなんだから邪魔しないでよぉっ！！！」

ガウリイに台詞を遮られ、いらつきながら彼に応えた。

「どうでもいいけど、アメリアまでふっ飛ばしちゃってるみたいだぜ」
「えっ？」
「ありゃまぁ」

悟空とリナがガウリイの指差した方向に目をやると、アメリアがボロボロの姿で首まで鐘を被っていた。

「大丈夫アメリア！！？」

3人は駆け付け、リナが鐘を振ってみた。すると、アメリアの頭が振動し、脆くなった鐘を砕き割った。

「随分かてぇ頭してんだなぁこいつ」
「大丈夫じゃありませんよ！！　なんてことするんですかリナさん！！」

アメリアはリナの姿に気付くと文句を言った。

「ごめん！　なんせ久しぶりなもんで力はいっちゃってさぁ…、でも心配して助けに来たもんだからいいじゃないのよ！」
「よくありません！！」

リナは何とか誤魔化そうとしたが、アメリアに言い訳は通じなかった。

「とにかく、こいつらが黒幕ってわけか！！　おめぇらのことは既に聞かせてもらったわ！！」
「あんたらの悪事はこれまでよ！！」

2人はモロスとマルチナの方に振り向いてそう言い放った。

「おっ、お父様…！」
「リナ＝インバースだとぉっ！！！？　もしやあの滅び屋の申し子、生きとし生けるものも全てを天敵、通った後には破壊と殺戮しか残らないという、あのドラまた―」
「うるさぁぁいっっ！！！！」

散々悪名を言われたリナはついカッとなって遮った。ちなみに、リナはドラゴンでさえも跨るという武勇伝もあるのであった。

「おめぇ、やっぱわりい奴じゃねぇのか？　どこでもボロクソ言われてんじゃねぇか」
「あんたも黙ってなさいっっ！！！」
「わかったわかった…！」

悟空は困惑しながら落ち着かせようとした。

「かかれぇぇっ！！！」

モロスが言い放つと、一気に兵士が3人に襲ってきた。

「はぁぁぁっ！！！！」

ガウリイは鞘から剣を抜くと同時に、大きく剣を振り上げ、兵士を吹き飛ばした。

周りに誰も2人を守る人達が全滅してしまったので、すっかりオロオロしていた。

「自己紹介が遅れたが、俺はこいつの保護者、ガウリイ＝ガブリエフ！！」

「オラは孫悟空だ！！」

2人は名乗りを上げた。

もはや数分で悟空達が有利と化していた。

「ぜっ、ゼルガディス様ぁぁぁっ……！！！」

マルチナは助けを呼んだ。すると、破片の山の天辺にゼルガディスが着地した。４人は目をやった。

「あっ、あいつは…？」
「リナさん！！　ゼルガディスさんったら、この国に雇われて、私のことを敵だって言うんですよぉっ！！？」
「こいつもおめぇらの知りえぇか。妙な気を感じるなぁ…」

ゼルガディスは高く飛び上がり、着地した。リナ達を睨み、剣を引きぬいて構えた。

「どうやらそうみたいね…」
「悪いが、俺は依頼人が裏切らない限り、契約を遂行する」
「見上げたプロ根性だわねぇ」

リナは皮肉を込めてそう罵った。一方モロスとマルチナは彼の姿に感激し、特にマルチナは応援していた。

「リナ…、お前を殺す…」

ゼルガディスは静かに告げた。

「待てよゼルガディス、本気なのかよぉ！！？」
「これも、俺が元の姿に戻るためだ」
「元の姿に戻るためですって…！！？」

ゼルガディスは今まで人間の身体を取り戻すための方法を求めて旅に出ていたのであった。そのためにはどんな手段も選ばぬ、そういう男であった。

「そうだ。依頼料がわりにゾアナの魔道書を頂くことになっている」

その言葉を聞いた悟空とリナ、ガウリイは顔を合わせた。

「なぁ、そのゼルってやつ」

悟空が口を開いた。

「なんだ…、その、胴着を着た見知らぬ輩は…？　それに、俺の名前を略して呼ぶな…！」
「おめぇの言う、そのゾアナの魔道書ってさぁ…」
「これのこと？」

リナはあるものを取りだした。それは本物のゾアナの魔道書であった。

ゼルガディスは唖然としていた。いつの間に横取りされていたので、当然取り返そうとした。

勿論もう一人も黙っていられなかった。

「そっ、それはゾアナの魔道書…！！　なんでお前が…！！」
「さっきお城に忍び込んだら偶然この保管庫に入っちゃってさ、折角だから頂いちゃったんだ！！」
「この泥棒！！！」

モロスは、笑いながら経緯を話すリナを罵倒した。

「リナさん！！　私のことを心配して助けに来たんじゃなかったんですかっ！！！？」
「わりいな、元々オラ達はこいつを一目見るために来たんだ」
「酷いですよ！！！　私は正義の味方が囚われの身の私を助け出し、共に悪の根源に裁きを下すという展開を期待してたのにいいいっ！！！」
「わりいけど…、おめぇの言ってることさっぱりわかんねぇや…」

悟空は、アメリアの美化しすぎた正義に対する志に汗を掻いていた。

「てか、リナによりゃ、オラ達もおめぇもはずれくじを引いちゃったようだぞゼル」
「何？　どういうことだ！？　・・・ってそれに言ったはずだ！！
他人（ひと）の名前を勝手に略すなって…！！」
「いいじゃない、あたしだってそう呼んでるんだから。…話を元に戻すけど、このゾアナの魔道書は残念だけど、あんたの役に立たないわよ」

マルチナは忍び足で逃亡を図っていた。しかし、6人は気付いていなかった。

リナはそのままゼルガディスに真実を話した。

「このゾアナの魔道書に書かれてあるのは、昔のゴーレムの造り方と操縦の仕方。それっきりだからね！！」

つまり、ゼルガディスが元に戻るための方法は一行とも書かれていないということだ。モロスはその事実を隠し、わざと嘘を伝え、自分の用心棒に仕立て上げていた。

彼は呆気に取られていた。

「そっ…、それは…」

モロスが焦り始めた。事実だったようだ。自分のいいままに利用

されていたことを後悔し、また自分を騙した彼を睨んだ。

「貴様の悪行もこれまでだ！！」

ゼルガディスはすぐにリナ側に戻り、モロスに刃先を向けた。悟空は扱けそうになった。

「お前さぁ、結構わかりやすいパターンしてるなぁ…」

ガウリイは呆れ事を言った。

「……だぁぁっ…！！！」

モロスは逃亡を図った。しかし、悟空達は逃がす訳にはいかなかった。

悟空は額に指を乗せ、瞬間移動して回り込みを図った。勿論、モロスの目の前に秒速で悟空が現れたのだから、驚かないはずがない。

「よっ！」

「なぁぁぁぁぁぁ！！　いつのまに…！！！」

「よっしゃあ！！　いいぞ悟空！！」

一方マルチナはある倉庫の中に入っていた。円形の模様の中心にある装置に向かい、一つ一つ、レバーを回して作動させた。

マルチナが見上げた先には、灰色の人型機械が塞ぎこむように座っていた。

「あっはははははは！！　はははははははは！！」

彼女が高笑いを無意識にしてしまうほど、余裕があった。

「さて、あなたには５つの選択肢があるわ」

リナは次から指を折りながら、一つずつ条件を述べていった。

「一つはこのままあたしに成敗されるか、それともガウリイに成敗されるか、それともアメリアに成敗されるか、それともゼルガディスに成敗されるか、っでもってそれとも悟空に成敗されるか」

「どれも一緒じゃないか…！」

「あは～、やっぱし～っ？」

ドSなリナの条件はもはや地獄であった。やり方が違えども、その点を除けばどれもモロスに取って2つの意味で痛い手段であった。

「仕方ないわねぇ…。じゃあもう一つ追加しよっかぁ？　…あたしに口止め料を払って何もなかったことにしちゃうのはっ！？」
「アホォォッ！！！」

リナの無謀すぎる手段に突っ込みを入れたガウリイであった。

「あら、あたしは本気よ？　こんなおっちゃん成敗したってあたしの懐が潤わないもん」
「ダメですよっ！！」
「ちなみに、どれくらい搾り取るつもりなんだ？」
「このお城まるごと全部かな！？」
「誰が出すかぁっ！！！」

城を取る、つまり明らかに侵略に近い行動であった。勿論モロスは涙ながらに大反対した。

「じゃあ仕方ない、ここであたしが成敗してくれる！！」
「結局そうなるんか…！！　ああっ…！！？」

リナが構えると同時に地震が起きた。５人は後ずさりした。モロスが倉庫に目をやるとある事に気付き、逆転勝利を確信し笑い始めた。

「ふはははは！！　ゾアナの魔道書と共に伝わる最終兵器、出ませ、オリハルコンゴーレムよ！！！」

彼が言いきると同時に王室から灰色の巨人が屋根を突き破って立ち上がった。大きさは一番高い塔に匹敵するほどであった。

「でけぇ～～～～っ！！！」
「なんだありゃあ！！？」
「もしかして、ゾアナの魔道書に書かれてたってやつ！！？」

パーティ一行はすっかり度肝を抜かしていた。

「このゴーレムのボディは並の呪文をも弾き返し、あらゆる直接攻撃も耐えるのよ！」

操縦しているのはマルチナだった。これを持ちこむために、暫く悟空達のもとを後にしていたのであった。

ゴーレムは跨ぎこみ、彼らに一歩を踏みこんだ。すぎに5人は回

避した。

「千年の眠りから目を覚ませゴーレムよ！！！」
「お父様！！　お任せください！！！！」
「ああっ！！　いつの間にいなくなったと思ったらあんなとこに！！！」

リナ達はそこにマルチナがいたことにやっと気付いた。

「さあ、魔人ゾアメルグスターの名のもとに、行きますわよーーっ！！！！」

ゴーレムから異様なオーラが湧きだした。

「なんか世界が違うような…」
「魔人ゾアメルグスターって…」
「知ってるのか！？」
「あたし、その手の伝説や伝書には結構詳しいんだけど、聞いた事ないわねぇ…」
「えっ…？」

魔人ゾアメルグスターはリナでさえも知らない謎の存在であった。

「貴方達が知らないのも無理はないわ」
「ふえっ？」
「魔人ゾアメルグスターとは…、私が考え出した魔人だもの！」

いわゆる空想上の魔人であり、当然実在しない存在であった。しかし、彼女はそれでも本当に存在すると信じ込んでいるのである。

「そんなの知るかぁぁぁぁっ！！！！」

リナは怒声を浴びせた。そう言うのも無理はない。

「そんなこと平気で言ったら、オラ達ビビるどころか、呆れちゃうよな」
「ある意味可哀そうですね…」

悟空とアメリアは困惑しながらコメントを付け加えた。

「行くわよ！！」

マルチナは一つのレバーを横に捻った。すると、ゴーレムの胸部が大きく展開し、中から壺状の装置が引き出してきた。

ある方向に照準を合わせ、もう一つのを大きく引っぱった。する

と壺から青い閃光が放たれ、真っすぐに光が飛んで行った。すぐに照準の先で大爆発が起こり、茸状の黒煙が湧きあがっていた。見た感じだが、大規模の被害を受けたであろう。リナ達は唖然としていた。

「ひぇぇぇぇぇっ……！！！！！」

特に悟空はゴーレムのビーム砲の威力に仰天していた。これはさすがのリナ達も、まともに喰らってしまえば一溜りもない。

「ふはははは！！！　見たか！！　我がゴーレムの力を！！！」
「感謝するのね！　貴方達を魔人ゾアメルグスターの最初の生贄にしてあげるわ！！」
「じょーだんじゃないわよ！！！」

勿論リナ達はやられるわけにはいかなかった。むしろ、所詮フィクションに過ぎない魔人の生贄に何故ならなければならないのかと、彼女の趣味には誰もが呆れ果てていた。

「覚悟っ！！」

マルチナは先ほどのレバーの柄を掴み、リナ達のいる所に照準を合わせた。

「ちっ…！！！」

―こいつにはわりいけど、誰も知らねぇし、何処かのおとぎ話に出るようなやつの生贄になるなんてまっぴらだな！！

悟空はかめはめ波の体制に入った。何とか相殺させようとしているのであった。

「ふふふ…！！」

一気にレバーを引き、壺からビームを放った。

「波ぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

悟空もまたかめはめ波を放ち、ビームとぶつかりあった。

という風に決死の戦闘シーンと化することになるはずだった。

マルチナがレバーを引くとビームを出すどころか、湯気が漏れ始めた。

「うひっ！！？」
「ふぇっ！！？」
「ありぃっ！！？」

マルチナ、リナ、悟空はつい間抜けな音をつい漏らしてしまった。

ゴーレムの所々から湯気が漏れ始め、そして動きが止まった。ゆっくりと前のめりに悟空達の方に倒れ始めた。

「ちょっとちょっとぉぉぉっ！！！！！」
「うあああああっ！！！！」
「「「「うわあああああっ！！！！！」」」」

ゴーレムは見事に倒れ、大量の砂埃が立った。悟空達は倒れると同時にすぐに走って逃げたので無事である。

砂煙が消えた後に残ったものは、無残にも粉々に砕けてしまったオリハルコンゴーレムの哀れなる姿であった。

「考えてみたら、魔道書と共に伝わってたってことは、あのゴーレムは相当古いってことよねぇ…？」
「そういやぁあのおっちゃん、千年前の眠りとかなんか言ってたしな」
「そうそう」
「そんなの、まともに動くわけないじゃないか！」

リナ達がいうには、思ったよりもそんなに大した事のない相手だと実感したということだ。

瓦礫にはモロスとマルチナが挟まっていた。

「た…、たたたた助けて……」
「ちょっとあんた達！！　堂々と呑気に見てないでどうにかしてよっ！！！」

マルチナが自分達を蔑にしているリナ達に吼えてきた。

「どうにかって言ってもなぁ…」

次の瞬間、先ほどのビーム砲と思われる装置から火花が走った。マルチナがすぐに振り向いたと同時に、同じようなビームを放ち、城のほとんどを破壊し始めた。

「あっ、暴走してるし」
「とっ、とっ…「止めてぇぇぇっ！！！！　あああああっ、止めてよおおおおっ！！！！！」」

今はリナ達を敵と見なしている状況ではなかった。すぐにその2人は彼女達に助けを求めた。

「止めてって言われても…」
「並の呪文も、攻撃も通じないとなれば…」
「ってことは、並の呪文じゃなきゃいいのよね？」
「ええ、まぁ…。……あああっ！！！！！」

アメリアはリナの短絡的に導いた解決法の内容を自覚した。

「そっか、あれを使うんか！！　こんなことはリナ一人で充分だろ？」

「当たり前でしょ！？　こんな欠陥だらけのガラクタを一掃するなんてチョチョイのチョイってもんよ！」

リナは悟空の問いに対して自信満々に答えた。

「悟空さん！！！　リナさんがあれを使うと周りの人に被害がぁぁっ！！！　…こうなったら、正義を貫くために警報を鳴らして避難させないと！！！」

「そうだな！！」

「ちょっとあんた達、あたしをおちょくってるんじゃないわよね…？」

リナがアメリアとガウリイの、まるで自分が危険人物と見なすような発言にいら立っていた。

「竜波斬警報発令！！！」

「市民の皆さんは直ちに避難してくださぁぁぁい！！！」

「早くこの街から逃げるんだ！！！　ここにいたらみんなあぶねぇぞぉぉっ！！！」

悟空はブザーを鳴らし、アメリアとガウリイはメガホンを用いて喚起した。

人々はそんな他愛もない目的での避難であるにもかかわらず、まるで騙されたかのように一斉に街から逃げ出していた。

リナは大きく腕を広げ、呪文を唱え始めた。

「『黄昏よりも暗き存在、
血の流れより紅き存在、
時の流れに埋もれし
偉大なる汝の名において、
我今ここに闇に誓わん、
我等の前に立ち塞がりし
全ての愚かなるものに
我と汝の力もて、
等しく滅びを与えんことを』…！！！」

両腕を右脇腹に持ち込み、両手に魔力を貯め、両手を前に突き出した。

「“竜波斬”！！！」

掌から“竜波斬”を放ち、装置に向けて真っすぐ飛ばした。

「はぁぁっ…！　確かに、並の呪文じゃ効かないって言ったけどぉおおおっ！！！！！」

あまりにも効きすぎた。それよりむしろ、今のゴーレムの状態ではどんなレベルの呪文でもすぐに撃破できるほど老朽化が進行していたのであった。しかし、マルチナの悲鳴はあまりにもタイミングが遅すぎた。

装置を中心として、一気に爆発し、さまざまな建物を飲み込んでいった。

「まっ、運が良ければ助かってるようなもんでしょ？」
「運で助かるようなもんだったか、今の？」

リナは遠くからその後の光景を見て、気楽に念を押した。

ゼルガディスは、ゾアナ王国に雇われた日から今までの自分の振舞いを後悔し、落ち込みようが激しかった。彼はプライドが高く、その分脆かったのだった。

「いいじゃありませんか…。少なくとも一つの悪が滅びたことに違いありませんから…」
「何よアメリア、元気ないわねぇ…」
「私……、このままではセイルーンに戻れませ～～～～ん！！！」
「確かにこれじゃあなぁ…」

４人の視線にあるのはゾアナ王国がかつてあった場所、今ではただの莫大なクレーターである。そこから多量の黒煙が湧きだしていた。

アメリアは武力行使なしで口だけで交渉を進めて、軍縮を勧めたはずだった。これは、今回リナとの再会が引き起こした悲劇に過ぎ

なかった。

「あいつら、めっちゃわりいこと企んでたけど、結局はどっちもどっちってことかなぁ…」

「ちょっと悟空、どういうつもりよ…？　さっきあんた、あたしにそれを甚だしく勧めてたじゃないの！！？」

「そうだけどさぁ…、…ときにおめぇ、“竜波斬”って、かめはめ波みてぇに力の調整が利かねぇのか？」

「そんなの利くわけないでしょぉっ！！　でもあたしにとってはそれで満足よ！！　…はぁ、何言ってんだか…」

「「「……はぁぁ…」」」

悟空はアメリアとガウリイに一瞬目を合わせると、同時に深いため息をついた。

―ホントにあいつら、大丈夫なんかなぁ…？

悟空は彼らのことを心配していた。すまないと思っていた。彼らが敵だとはいえども、結局は未遂に終わったことや、オリハルコンゴーレムを発動して悟空達を圧倒しようとしたが失敗に終わったことを踏まえれば、そんなに彼らの犯した今回の悪行は彼にとって大したことはないと思っていたのだった。

一方ボロボロになり果てたマルチナは、ゾアナ王国の現跡地をトボトボと淋しく歩いていた。モロスは行方不明、非常時に備えた品物でさえも消滅してしまったので、今の彼女は王女らしからぬも、何処にでもいる一文なしと堕落してしまったのだった。

彼女は強く拳を握り始めた。

「あいつ…！　覚えておきなさいよ！！！　魔人ゾアメルグスターの名に掛けて、必ず復讐してやるんだからぁぁぁぁっ！！！！」

マルチナは大きく手を広げ、リナの復讐を誓った。リナは軽い気持ちながらもマルチナを助けようとしていたのだが、逆に目の敵にされてしまったのだった。

一瞬、自分の服が肌蹴そうになったので、慌ててすぐに押さえた。

今のマルチナの状態では、金銭的にも戦力的にもリナへの復讐を完遂するには程遠い。

それに気付かず、パーティ一行は再び旅路に足を踏み入れたのであった。果たして、一体どんなことが起きるのやら…。

パーティ全員集合！！　最初の敵は御伽噺の魔人！？　：　後編（後書き）

今回初登場の呪文

“霊呪法（ヴーヴライマ）”

石人形（ゴーレム）を生み出す地系の呪文。周囲の砂を集め、低級霊をを憑依させることによって、さまざまな形の石人形を創り出すことが出来る。今回リナが使用した場合のように、その場にあった銅像を操るという使用法も可能である。

“爆煙舞（バースト・ロンド）”

複数の小型火球を撃ちだす火系の攻撃呪文。着弾すると派手な爆炎を上げるが、威力は軽い火傷程度に過ぎない。「爆炎舞」とも表記されることがある。

敵か味方か！？　謎の神官ゼロス介入！！　：　前編

ただの跡地になってしまったゾアナ王国を後にし、旅に出始めたパーティ一行、総勢５人。

「アメリアさまぁぁぁぁーーーーーっっ！！！！」

セイルーンの家来２人が追いかけてきた。しかも、その一人は彼女の着替えが入った鞄を持っていた。僅かな傷は残っているものの、奇跡的に“竜波斬”に耐え抜いたので、彼女は大喜びした。このままこんなボロボロのドレスを着たままの姿だと恥ずかしくてたまらない。

早速ガウリイとゼルガディスは、アメリアの身長の２倍ほどある布を半分に折り、その中に彼女が入った。ドレスを脱ぎ、服や星印の付いた青い球のリストバンド、アミュレットを装着し、着替えが完了した。リナ達と旅に出る時はいつも、この服装である。

それが済んだ事で、次の目的地へと出発した。その道のりは長かったが、リナ、ガウリイ、アメリア、ゼルガディスの４人が再会し、そして悟空が新たに加入したことで、今までの雰囲気とは大きく異なっていた。いろいろ雑談しながら、森の中を歩いていった。

夜になると、焚火をして、持ってきた肉を焼き始める。いい具合になると、肉を貪り合っていた。特に悟空とリナ、ガウリイである。後の２人は普通に食べていた。

「おやおや…」

そんな5人を、木の上から見下ろしていた紫色の髪の青年がいた。うまく気配を隠していたので、彼らには気づかれていない。この青年は以前、この世界に来たばかりの悟空の姿も目撃していたのだった。

旅には休憩が付き物である。旅を続けていたある日の正午、ゼルガディスを除く全員は、通りかかった草原で休憩を取っていた。触り心地がとても良いので寝転んでいたのであった。空は青白の比率が丁度よかった。

そんな気持ちよさが眠気を誘ってくるのも、よくある話であろう。

「ふわぁ～…」
「あ～あ、いい天気～」
「平和だなぁ…」
「気持ちいい～…、これで弁当もあればピクニックですね」
「うん、そうだわねぇ。けどあたし達は旅の途中だし、そうそうのんびりしてはいられないわねぇ…」

ガウリイはあまりの気持ちよさに眠りこんでいた。寝返りを打っ

て、腕をリナの胸に置いてきた。

「ふん…、そんな呑気になっている暇があったら、お前達だけでそのままここで野宿すればいい…。俺はそういうの」

「ぬあああっっ…！！！　コラぁっ、寝るなぁぁぁっガウリイぃぃぃっっ！！！」

リナはすぐに起き上がり、ガウリイを前後に大きく振って起こそうとした。しかし、彼は既に爆睡していた。旅を進めたがるリナにはイライラさせるだけだった。

「いいじゃないですか。もう少しこうしていたいですよね？　ねっ、ゼルガディスさん？」

しかし、一言も戻ってこなかった。違和感を感じ、彼女は起き上がった。

「ゼルガディスさん…？」
「あれっ、ゼルのやつがいねぇぞ？」
「ふえっ？」

見回すと、彼がまるで誰も付き人を持ってなかったかのようなオーラを醸しながら、独り身で先に出発しているのに気付いた。

「あああああっ！！！」

「もう自分勝手なんだからぁぁっ…！　ちょっと待ちなさいよ、ゼルーーっ！！！」

「あいつ、そんなに急がねぇでもいいじゃねぇか」

ガウリイを引き摺るリナ達は彼を追いかけた。そんな彼の利己的な行動に困っていたのだった。

夜、ある街中の宿で食事を取っていた。

ゼルガディスは不満を持っていた。再びリナの旅に加わってから、あまりにもペースが遅くなっていた。すぐにでも元の身体を取り戻して、人生をやり直したい彼はついに本音を吐露した。

「確かに…、俺は“異界黙示録”を探す旅に出るとは言った。しかし…、これはあくまで個人の問題だ！　それをだな……、勝手についてきて……、とやかくいるのはやめてくれって――聞いとんのかお前らぁ！！！！」

ゼルガディスは立ち上がって一喝した。今彼は蚊帳の外にいる状態であった。誰も彼の話に耳を傾けようとせず、食べることに専念していた。

「しょうとはいふけど、『ふぁいしょうでしゅか』っていふとおもうのぉっ！？」
「いうぁないでしゅよ！！」
「あのなぁ、食うか喋るかどっちかにしてくれ…」
「「「「ふぁっ…？」」」」

一瞬４人の手が止まり、ゼルガディスの顔を見た。しかし、結局は全員一致で食べるほうを選び、再び食べ始めた。彼はすっかり呆れていた。

「俺が悪かった…、食うのをやめて喋ってくれ…」

今自分の言った言葉を渋々ながらも訂正し、何か言ってくれるように頼んだ。

するとリナはジュースを一気飲みし、器をガタンと鳴らして置いた。そこからリナ側の反論が始まった。

「そうはいうけどねぇっ、満更知らない仲じゃあるまいし、『はい、

そうですか、それじゃあ！』って行くと思うのぉっっ！！？」
「水臭いですよゼルガディスさん。折角こうしてみんなが再会できましたし、新しい仲間もできたんですもの。私たちにできる事ならば、協力します！」

ゼルガディスはリナ達の仲間だ。それぐらいは彼でも分かっている。しかし、今では自分のことを優先したかったのだ。

「俺には単なる退屈凌ぎのように思えるのだが…」
「やだわ、そんなことないわよ！　ねっ、アメリア！」
「えっ？　え…ええっ！！　勿論ですとも！！」
「まあいい…。とにかく…、俺の邪魔だけはしないでくれ。俺は……、別世界の魔族や魔法の奥義が記されているという、謎の魔道書“異界黙示録”の存在に……、全てを懸けているのだからな…」

彼は邪魔しない代わりに、彼らが協力することを遠回しに認めた。

「ふ～ん…。で、それを見つけてどうするつもりなんですか？」
「「だあああっっ！！！！」」

アメリアの素朴な疑問はリナとゼルガディスをこけさせた。

「えっ？　だって、魔族を懲らしめるためにゼルもそれを探してんじゃねぇのか？」

「あのなぁ…」
「ゼルはねぇ…、“異界黙示録”に記された呪文を使って、合成生物にされた身体を元に戻そうとしてるんじゃないの！」
「いいっ！！？　おめぇ魔族じゃねくて人間だったのかぁっ！！？」
「「「「でっ…！！！」」」」

今度は5人がこけた。今更だが、初めて出会った時はすっかり魔族だと思い込んでいたのだった。当然ゼルガディスは魔族ではなく、邪妖精（ブロウ・デーモン）と岩人形（ロック・ゴーレム）との合成獣にされた、哀れな青年である。とはいえども、外見は自分でも異様な姿をしているため、さらに悪行を続けていたので、リナ達に出会う前は色々な人から恐れられていた。

「……今日は何だかムカムカする…」
「まだそんなこと言っているんですかっ！？　結構カッコいいのに…」
「嬉かねぇよ…」

フォローされてもなお、ただゼルガディスに蓄積されるのはストレスと憂いのみであった。

「もう…、本人が嫌だっつんだから…」
「どうしてですかゼルガディスさん！？　例え見た目が違っても、私達の友情は永遠です！！　…それなのに…」
「何の友情だか…」
「ちょっとデリカシーがないわよアメリア。本人を目の前にして、肌が岩だの髪の毛が針金のようだなんて…」

―お前がじゃ！！！

３回目、ゼルガディスはこけた。数本の髪の毛が木製のテーブルに深く刺さっていた。

ゼルガディスは一気に力を入れて毛を抜いた。

「そこまで言ってませんが、見た目にこだわるなんてやっぱり間違ってます！」

「まあなぁ…、どんなわりいやつでも何か裏にはちょっとした事情を必ず持ってるってぇのもあるしなぁ…」

アメリアはリナに反論していた。しかし、彼にとってはもう今の雰囲気には懲り懲りだった。

「もういい…。寝るわ俺…」

ちぢれった一本の毛を真っすぐ伸ばしながら立ち上がり、客室に戻っていった。４人にコケにされた彼の心はすっかり凹んでいた。

「お前なぁ…」

「う～ん…。ちょっとからかいすぎたかなぁ…？」

「えっ、からかってたんですか！？」

テーブルには彼の髪の毛が数本刺さったままだった。

「ゼルガディスさん…、髪の毛ちゃんと生えて来るかしら…？」

「お～いちちち…」

彼の身を心配しているアメリアとは逆に、悟空はゼルガディスの髪の毛を一本抜いて触っていた。

一行はそれぞれの客室に入り、寝たのだった。

リナは髪を櫛で梳いていた。また、夕食時のことを思い起こしながら、ゼルガディスがのどから手が出るほどどうしても欲しがる魔道書のことを考えていた。

「“異界黙示録”ねぇ…。まず情報を集めないと…」

梳き終わった後、櫛を片付けた。

街ではヨタカが鳴いていた。街の人々は店を閉め、就寝に入っていた。また、誰も街中を歩いていないのですっかり静かだった。

しかし、突如沈黙を破ったのは街から離れた山地での大爆発であった。

「なっ、なんだ！！？」

ゼルガディスは瞬く間に起き上がった。自分の剣を持って窓越しで爆心地に目をやった。

アメリアもまだ眠気はあるもののゆっくりと起き上がった。ガウリイは爆睡したままで、悟空は渋々ながらもベッドから降りた。

「どうしたんだ一体…？　ん…？」

何度も何度も、その山地では炎の柱が出来あがっては消え、出来あがっては消え、と繰り返していた。

―もしかして、魔族のおでましってことか？　でも待てよ…、そんなにてぇした気が出てねぇのに…、いってぇ誰が…？

「悟空さん！！　起きてください！！　悟空さん、悟空さん！！！」

部屋のドアの外から慌てているアメリアの声がしたので、すぐに悟空は開けた。

「アメリア、どうしたんだそんなに慌てて…」
「そんなに呑気にしている場合じゃないですよ！！　どうしても起きてこないんですよリナさんが！！」
「えっ？　何でこんな時に…？　リナってそんなにオラみてぇにノンキなやつだったっけ？」

彼が廊下を見回すとガウリイはゼルガディスが廊下に立っていた。しかし、未だにリナの姿が一向に現れなかった。

「リナにしては随分珍しいなぁ…」
「いや、あいつはそんな能天気ではないはずだ」
―いや、待てよ…。てぇした気を出さなくても、派手にやらかしてるってぇことは……。

悟空は一つの答えに辿り着いた。

「おめぇら！！　ちょっくら先に行ってくるわ！！！」
「ちょっと、悟空さん！！？」

彼はすぐに階段を駆け下り、宿を出た。そして山の方に身体を向けた。

—あっちのほうだな…。

「ふん！！」

悟空は空を飛んで、山の方へと向かっていった。

実はその山の麓にある盗賊団のアジトが置かれてあった。しかし、今では断末魔の叫びが耳を覆いたくなるほど無様に鳴り響いていた。あちこちが火に覆われていた。

沢山の盗人達が必死に逃げていた。

「お助け…、お助けをぉぉぉ……」

一人がある人影に命乞いをしていた。ある人影とはリナであった。彼女はそんな男を見て嘲笑していた。

「ふふ～ん……。逃がさないわよ～～～っ！！！！」

しかし、こんなことがリナの快楽であった。

「“炎の矢（フレア・アロー）”！！！」

リナは数本の炎の矢を作り出し、彼に向かって飛ばした。彼はすぐに逃げたのにこけてしまった。

「おおお助けって言ったのにぃぃぃ！！！！」

すると人影が盗賊の一人を捉え、その呪文を回避した。炎の矢はそのまま真っすぐ進み、塔に直撃して大爆発した。

「ふえっ…！！？」

リナは一瞬疑った。

一方、盗賊は目を押さえていたものの、少し違う感覚に気付いた。両足を揺らしても何も当たらないのだ。ゆっくりと目を開けた。

「ななな何じゃこりゃあああああっ！！！？」

リナはその悲鳴にハッと気づいてすぐに見上げた。そこには盗賊の一人を前屈みになって抱えた悟空の姿があった。

「ご、悟空…！！！」

「反省してんだったら、ふつうは許してやるもんじゃねぇのか？」

悟空は格闘が大好きだが、どちらかと言うと平和主義であった。

「ちょっと邪魔しないでよ！！　あたしはね、今情報収集にちょー忙しいの！！　とっととそのクズをあたしによこすのね！！」

「い、いやだぁぁ！！！　誰があんな凶胸の悪魔の元に―」

「“炎の矢”！！！！」

「おわぁっっ…！！！！」

すぐに悟空はリナの呪文を回避した。

「あっぶねぇなぁ…！！　…ってあれ？　あいつは…」

しかし、その勢いで手が滑り、盗賊を落としてしまっていた。

「どええええええっ……！！！！」

真っ逆様に落ちていき、地面に激突した。リナはゆっくりと近づいていき、リナは彼の襟首を掴んで持ち上げた。

「盗品の中に“異界黙示録”があるでしょ！？　あんたらさっさと大人しくだしなさぁぁぁいっっ！！！」

リナは男を強く前後に振って問い詰めた。

「はぁっ、クレア…？　何それ…？」
「えっ…？　あっそ…。…はずれちゃったかな？」

リナは彼を離した。そのまま彼は気絶したのだった。

彼女は“異界黙示録”を探していたのだった。まず情報を集めないとと彼女は先ほど言っていたが、彼女なりに細かく探していたのだった。

悟空が着地し、リナのもとに歩いた。

「こりゃあ、こんな時間にみんな起きちまうのも無理はねぇよなぁ…」
「う〜〜ん…。まっ、気を取り直して次いこっか！！」

「いいっ！？　おめぇまだ懲りねぇんか！！？」
「リナーーーーっ！！！！」

リナが次のアジトへと進み始めた。彼はすっかり困り果てていた。しかし、急に彼女の足が止まった。ガウリイ達もこの場所に到着したのだった。

「あらららら……！！」
「なんだこの有様は！？」

誤魔化したくても誤魔化しきれないほど派手にやらかしてしまったリナの顔から焦りが浮かび上がった。

「それはその……、悪党を倒してお金もザクザクッとね！！　あ～盗賊いじめはやめられな～い！！　って……、その…」

そう言って誤魔化そうとしたが、さらに４人の気分を悪くさせるだけだった。特に、正義と言う概念を愛するアメリアは憤慨していた。彼女から見てはただの情けない暴行に過ぎなかったのだった。

「いや……、その……」
「こんなあくでぇのしちゃいけねぇことぐれぇ、天才魔道士のおめぇにはわかっとるんじゃあ…」
「リナさん…、いつもこんなことやってたんですかぁっっ！！？」

「いいっ…！」

悟空は半分からかう気持ちで注意した。アメリアの鋭い目つきがリナを突き刺していた。

万事休す。リナは大人しく目的を話すことにした。

「“異界黙示録”…。“異界黙示録”の情報探してたのよ…」
「なっ…！？」
「それはいいとして、お前世界中の盗賊をシラミ潰しするつもりかよ！？」

ガウリイが彼女の行動に反論する。一方アメリアは彼女の目的を聞くと、既にクールダウンしていた。

「リナさん…。もしかして、ゼルガディスさんのために…」
「うあああっ！！！　違う違う違う！！　あたしが欲しかったの！！」
「そういう割には顔赤くなってんじゃねぇか」
「ホントだ…。まさか…、本当に―」
「ぶっ飛ばすわよ…？」

からかってくる悟空とガウリイを脅すリナだった。ちなみに、最近になって冷やかすというような遊び心が目立つようになった悟空であった。

「とにかく！！　盗賊のお宝と情報網ってバカにできないのよ！！
お目当てのものにはけっこう確実な方法なんだから！！」
「いやぁ～～」

５人は謎の拍手と感嘆に気付き、声の主がいる方に目を向けた。
木材の上に先ほどの青年が悟空達を見下ろしていた。

「なかなか素晴らしい意義、僕は感服致しました」
「「「「なあああっ！！！？」」」」
「おめぇ、いつの間に！？」
「さすがは“盗賊キラー”とは名高いリナ＝インバースさん…。もうその事に気付くとは…」

すると青年は高く飛び上がり、リナの直前で着地した。彼女は当然ビビっており、やや引いた状態であった。それでも彼は顔を近づけて来る。

「いやぁ、密かに後を追ってきた甲斐がありました！　僕も色々あって“異界黙示録”を探している身…、よろしければ、僕の追っている盗賊から“異界黙示録”の写本を取り戻していただきたいと思いまして…」
「ええっ！？」
「“異界黙示録”の！？」
「写本だと！？」

青年もまた、“異界黙示録”を探す旅に出ていたのだった。

悟空は彼から異様な気を感じ取っていた。外見的にもあまりにも異様なオーラが漂っているように感じられるのだが。

悟空達は目つきを変えていた。何故急に彼らのもとに現れたのか、何故“異界黙示録”のこと、リナ＝インバースを知っているのか、これらを踏まえれば明らかに不審だ。

火だるまになった丸太が真っすぐ倒れ、さらに炎を大きくした。

「あんた……、何者…？」

リナが静かに問いかけた。

「ああ、御心配なく。決して怪しい者ではありませんから。御覧の通り謎の神官（プリースト）、ゼロスと申します！！」

「ぜ…、ゼロス…」

急に彼の印象が変わった。

今まで彼は悟空などを監視していたのだった。自分の目的を果たすために必要な人材を求めていたのだった。

さすがにあそこでは暑過ぎて楽に話を続けられない。なので、彼らは山の麓にある小屋に入った。薪を燃やして明りをつけていた。

「随分人良さそうな顔をしてるけど、どうなの、あの男…？」
「自分のことを“謎の神官”と言いきっちゃう当たり、明らかに怪しさ大爆発ですよね…？」
「だよねだよね…！」

リナ、ガウリイ、アメリアは集まってひそひそ話をしていた。ゼロスと言う名の青年の顔は愛想があり、誰でも触れ合いやすいような感じがした。未だに油断は禁物であった。

「でもよ…、写本のありかを教えてくれるって言うんだから、悪いやつじゃないんだろ…？」
「あのねぇ…、その写本が本物って保証はどこにもないのよ…？」

ゼロスが薪を一本追加すると、リナ達の元にすぐに現れた。

「それは御心配に及びません！」
「うわっ！！」
「僕が追っている写本は、代々“異界黙示録”の写本を管理してい

る由緒ある正しきとある寺院から盗み出されたものなのです」
「ってぇことは、おめぇんとこにとってそんなに重要なもんなんか？」
「そうは言うけどさぁ、じゃあなんだってあんたが盗まれた写本を追ってるわけ？」

するとゼロスの口調が弱くなった。

「私は、その寺院に使える神官ですから。寺院の名誉に関わる事、出来ることなら事を荒立てずに取り返したいと、腕の立つ方を探してたのです…」
「おめぇ、利口なやつだなぁ…」

悟空はゼロスのそういう善意に感心していた。

「う～ん、一応筋は通ってるか…」

リナも彼の話に納得した。とにかく、目的は違えども狙う的は一緒だ。ならば仲間を増やして、協力して写本を手に入れ、情報を供給しようじゃないか。そう思いかけた矢先。

「―という風に言われたら、信じてくださいますか？」
「「「「あらっ…！！！」」」」

４人はこけそうになった。ゼロスの話した事は全て真っ赤なウソであった。ただ彼の巧みな話術に惑わされただけだった。

「おい、作り話かよぉ…」
「こらゼロス！！　こっちは真剣なんだかんね、おちょくんないでくんない！！？」
「別にふざけてませんよ！　大筋は本当ですし、何よりこの役目はリナさん達でなきゃ困るんです」
「だから…、その理由は？」

４人は詰め寄った。しかしゼロスは黙ったままであった。

しばらく沈黙が続くと、ゼロスは人差し指を立ててこう言った。

「それは、…秘密です」

４人はまたもやこけそうになった。教える気はないようだ。

業を煮やしたリナは悟空ら3人を集めた。

「何ですか何ですかあの態度…！？」

「ちっとあれっぽいなぁ、うまく惑わせて最後に横取りするってやつ…」

「けあ～～っ、どこまでも人を食ったやつ～～っ……！！」

「け～～っ、人を食った…！？　そんな残酷な奴に見えないんだけどな…」

「ドアホ～～～～～っ！！！！」

リナは言葉の綾がまったく通じないガウリイに鉄拳を一発喰らわせた。

すると今まで黙って聞いていたゼルガディスが口を開いた。

「ふん、下らん…。いずれにしろ、同じ獲物を狙ってるとわかってる奴に、わざわざ協力してやるバカが何処にいる…？」

彼はゼロスを冷たい視線でからかった。

「それならば、写本の中からゼルガディスさんに必要な情報は必ず提供するってのは如何でしょう？」

「…当てになるものか…」

「おやおや…」

ゼルガディスはゼロスの襟首を掴んだ。今のゼロスの一言は、ゼルガディスのことは分かりきっていると生意気に言っているような感じがしたので、気に食わなかったのだった。

「貴様…、何を企んでる…！！」

「やめろよゼル、そんなにカッカすんなって！」

「まあまあ、過去に色々あってあんたが人間不信になる気持ちはわかるけど…！！」

「そうそう！　ダメでもともとってこともあるじゃないですか！」

「俺はそんな悠長なことをするほど物好きじゃない…」

「じゃあ一体どうすればいいの？」

「言ったはずだ…。これはあくまで俺個人の問題だ」

ゼロスの襟を離すと、ゼルガディスは小屋を出ていった。

「ゼルガディスさん…」

「か〜〜〜〜っ、もう自分勝手なんだから！！！　いいわゼロス！！　要はその盗賊団に忍び込んで、写本のありかを探ればいいのね？」

ゼロスを含むこの5人で捜索しなければならない。

ゼルガディスに横取りされないために、自分が手に入れて呪文に関する手掛かりを掴むために、ゼロスの依頼を受け入れることにした。

「ただし！！」

「ただし？」

「あなたに協力するのは、“異界黙示録”の写本を手に入れるまで！　その後のことまでは、あたしは保証しないわ」

リナはゼロスを指差して条件を突き付けた。ゼロスの口元が緩んだ。

「いいでしょう…」

「そうと決まれば、早速盗賊団のアジトに案内して！！　“竜の牙”だか“ドラゴンヘッド”だか知らないけどねっ！」
「おし～い！　盗賊団の名は、“闘竜血団マッチョバトラー”！！」

リナの予想は明らかに外れた。いや、あっているのはただ一つ。名前に“竜”の字が入っていることだ。

「と…」
「闘竜血団…」
「マッチョバトラー…！？」
「ま、マッチョ…？　なんだかすっごい嫌な予感がする…」

悟空達はすっかり混乱していた。

いつものリナは盗賊団の撲滅に楽観的な考えを持っているが、マッチョという言葉を聞いて、今回はある意味そう簡単にはいかないと不安に思ったのだった。

敵か味方か！？　謎の神官ゼロス介入！！　：　後編

悟空達はその“闘竜血団マッチョバトラー”と珍妙な名を持つ盗賊団のアジトに向かうことにした。まず悟空が気をうまく隠して、外見だけ下見してみた。

「いいいっ…！！　気色わりぃっ…！」

彼がそう言ってしまうのも無理はない。莫大な要塞型のアジトの入口に、獣の仮面とマントを被る2人の門番がいるのだが、時に胸をピクピクしたり、誰も見ないのにボディビルダーのように筋肉自慢をしたりしているからだ。

名前からわかるように、盗賊団一筋肉美にこだわる盗賊団で有名なのだ。しかし、その割には力が強靭なのだった。ただ、悟空からしてはイチコロなのだが。

悟空はリナ達の元に戻り、外の様子を報告した。そして作戦を練り始めた。

「リナ、もしかしてまたさっきみたいに突撃するつもりか？」
「いいえ…ってそれはそれ、これはこれっていうもんよ！！　さす

がに今回は迂闊に突撃できないわよ」
「そうですよね。その盗賊団が逃げる際に誰かが写本を持ちだしてはキリがないですからねぇ」

アメリアはそう言った。リナは彼女の方を向いた。

「…そうだわ！！」
「なんだ？　なんかおめぇついたんか？」
「ちょっといい？」

アメリアに目を向けると、突然リナは作戦を思いつき、後の３人に話した。

「えええっ！！？　私がですかぁっ！！？」
「あなた、セイルーンのお姫様でしょ？　その肩書を利用してアジトに入りこむっていうのよ！！」
「そんなぁぁっ！！　私にそんな脇役みたいな役割なんて無理ですよ！！」
「脇役だなんて、何言ってるのよ？　いい？　あなたにはねぇ、あそこの鍵になる素質を持ってるの。それだけの価値で十分よ！」
「そのような価値のままで散るなんてそんなの出来ませんよ…！！」

何故かアメリアは驚き、真向に拒否した。しかし、悟空とガウリイは納得していた。

「とは言っても…、俺はリナの提案に賛成かな？」
「ガウリイさん！！？」
「オラもだ。他にも何もいいの思いつかねぇしな…」
「悟空さんまでっっ…！！？」
「ようし！！　全員一致と決まれば作戦決行よ！！」
「わわ私はまだ認めてないですよリナさんっっ！！！」
「問答無用！！！」

結局アメリアは彼女のシナリオに弄ばれる羽目になったのだった。

それにしても、何故彼女は動揺しているのか。それはリナの考えついた作戦からだった。

悟空達は身を潜め、例の2人の様子を窺っていた。未だにいつも通りの行動と見張りを両立していた。

リナは小屋にいた時はあれほど余裕をこいていたものの、実際に来てみると急に下降気味になっていた。『百聞とは一見に如かず』とはこのことだろう。特に女子陣は気味悪がっていた。

「リナさんリナさん…！　やっぱり危ない人達です…！」
「う～っ…！　でもここまで来たらジタバタしない…！」
「さぁて、とっとと行くとすっか…！」

こうして作戦が開始された。リナとガウリイ、悟空は門番の前に現れたが、何故かアメリアに限っては縛りつけにされ、地面に引き摺られていた。

「オッス！！　いっつも御苦労さん！！」
「んんっ？」

門番はリナ達の方を向いた。

というのも、アメリア以外全員は何処かの盗賊が付けていそうな衣装を身に纏っていた。リナは髪を縛って眼帯を付け、ガウリイは笹の葉を広げて張ったカチューシャを付け、悟空は帽子を被ってさらにコートを被っていた。

「あたしはさすらいの賞金稼ぎ、リリー！」
「同じくガウリイ！」
「そしてオラ悟空！」

皆さんもご存知のように、“リナ”のままだとすぐにばれるので彼女のみ偽名を使っている。

また、リナの作戦はこうだ。

第一段階：アメリアを引き渡す

←
第二段階：門番にボスの元に案内してもらう
←
第三段階：ボスに写本の居場所を教えてもらう
←
第四段階：手に入れる

アメリアの肩書を使うというのは、国の王女を明け渡すということであった。ここが気に入らなかったのだった。これでは暫くの間閉じ込められて、結局は何も活躍できないじゃないかと思ったのだ。

少し棒読みであったが、色々喋りまくり、彼らに信用させようとした。

「ん～っ…、ほっ！」

すると了承したのか門番の一人がポーズをとって、胸の筋肉を痙攣させた。リナは引いていた。

「い～っ…、またやりやがった…！」
「おいリナ…！　どうやら胸ピクピクしないと入れてもらえないようだぞ…！」
「おっしゃあーっ！　胸ピクピク～っ…って出来るかぁぁっ！！！」
「がぁっ…！！」

リナはガウリイに頭突きを喰らわせた。

彼女が貧乳だからか、本気で言ったのか、あの時の彼の本意は未だにわからない。

「ああっ…！！」

早速アメリアは牢屋に放り込まれた。すぐに門番を睨んだが、また彼が筋肉を見せつけると急に恐れの色が彼女の顔に現れた。

「こ…、怖い…」

一方悟空達はもう一人の門番に案内されていた。

「なぁリナ、今んところうまくいってんのか…？」
「さぁ…？　中に入れたってことはうまくいってるんじゃない…？
あとは敵のお頭からうまいこと写本の在り処を聞きだすだけ…。
その間見計らってアメリアが脱走騒ぎを起こせばいいから…」
「そうか、そのどさくさに紛れて写本を手に入れればいいんだな…？」

「ピンポ〜ン、ガウリイにしては上出来。うまくいくよね？」
「ああ…！」

とうとうボスがいるとされる部屋に辿り着いた。門番がゆっくりと扉を開け、カーテンを上げていく。

「さてと…」

ここからが本場である。ボスと対面して写本のある場所を聞き出すだけだ。

「「いいっ…！！？」」

しかし、ボスの第一印象はあまりにも強烈だった。門番に比べてさらにワイルドな体つきをしている男が土台の上で胡坐をかいて、肉を貪り食っているのだからだ。

リナやガウリイは、『引いている』と『ビビっている』の狭間の状態であった。

「うへぇっ…」
「かなり濃いなぁ…」
「いや、普通じゃね？」
「どこがよ！」

悟空のみはそういう者を見ることには慣れていた。様々な戦いで経験を積んだからである。

ボスは悟空達を一目見ると雄叫びを上げ、頭の上で腕を組み、大きな声で笑い始めた。

「がはははは！！！」
「うひゃあああっ……！！」

ボスの迫力に怯んでしまうリナ。そこでガウリイがアドバイスしようと専念した。

「おいどうしたんだ…！　うまいこと会話を成立させろよ…！」
「だだだだって、どうすりゃいいのよ…！！」
「例のアレか…？」

悟空がある方向に指を差した。ボスが胸の筋肉を震わせた。

「そうそうアレアレ…！　さっきの胸ピクピクだ…！！」
「おっしゃあ！！　いっちょ――って出来るわけがないでしょぉぉっっ！！！？」
「ごへぇぇぇっ……！！！」

今度はパンチで突っ込まれ、ガウリイは吹き飛ばされた。
するとそのコント的なやり取りを見ていたボスは少しずつ笑い始めた。

「ふふっ、むふはははははは！！！　面白いやつらだ…。まあそう怯えることはない。セイルーンの姫を捕らえて来るとはなかなか見所がある！　仲間となった証になにか褒美をとらそう！　金だろうとくいもんだろうとなんなりと言ってみろ！！」
「おめぇ…、いげぇとよくしゃべるやつなんだなぁ…。…じゃあくいもんを―」
「ぜんぜんちがーう！！！」
「いってぇぇぇっ……！！！」

今度は悟空がリナに頭をひっぱたかれた。

「…じゃあ話は早いわっ！　へへっ、でしたら、“異界黙示録”の写本を頂けると嬉しいんですけど！」

意外と接しやすい性格だと納得したリナは早速、交渉に入った。

「写本！？　そんなもん欲しければいくらでもくれてやる！　好きなだけ受け取れぇぇい！！」

これで写本が手に入れば、リナのシナリオは完璧であることが立証される。

しかし、ここからがオリジナルだった。

一気に沢山の獣人が現れ、悟空達を囲んだ。

「おい…。これらが例の写本なんか？」
「んなわけないでしょ…！！　ばれてたのよ！！」

３人は衣装全てを取り払った。

「その通りだ！　あれを狙って侵入者があることは先刻承知よ！ものどもかかれぇぇっ！！！！」

ボスの叫びを皮切りに、一斉に獣人達が襲いかかってきた。

「しゃあないなぁ…。やったるわぁぁぁぁい！！！！」
「やるっきゃねぇか！」

３人は構えた。

一方忘れられがちであったアメリアはここぞと縄をほどいていた。

「リナさん達うまくいってるかしら…？　もうそろそろかな…？」

目を閉じて、気持ちを切り替えた。いまこそチャンスだと思い、一念発起した。

「“フレア―”」

アメリアは“炎の矢”を使って牢屋を破壊し、脱出を試みた。次の瞬間、謎の振動が彼女を襲った。

「うわっ…！！」

彼女は思わず尻餅をついた。しかし、それだけでは終わらなかった。天井にはひびが入り、一気に破片が崩れおちてきたのだった。

「ええっっ、なんでぇぇぇぇっ！！！！？　おあっ―」

彼女が見上げた頭上には大きな破片があった。

それもそのはず、悟空達があの部屋で大暴れしているのであった。

「“火炎球”！！！」

リナは呪文を駆使して獣人を吹き飛ばしていた。既にここにいる敵はまっ黒けで燃え盛っていた。彼女にとってはこういうのは茶番である。

「な…、なんじゃこのベラボーな強さ…！！　こりゃ話が違うぜぃ…！！」

ボスは目にもとまらぬ速さで逃げていった。

「おい、逃げたぞ！」
「ああっ待て！！　悟空、ガウリイ！！　ここをお願い！！」
「おう！！」
「任せろ！！」

リナはあとの敵を2人に任せ、ボスを追跡した。

彼女が出発すると同時に更なる敵が攻め込んできた。

「来るぞ！！」

「おっしゃあ！　こっちもひさびさにいくか！」

ガウリイは鞘から剣を抜いた。しかし、彼の剣は少し違っていた。刃先がないのである。普段はあるのだが、それはただの仮の姿でしかなかった。

「光よ！！！」

彼がそう叫ぶと柄か光がら放出されて光の刃を作り出し、刀身に形成された。

「てあああっ！！！」

彼は剣を振って、敵をなぎ払った。

ちなみに、彼の剣は“烈光の剣（ゴルン・ノヴァ）”、通称“光の剣”である。伝説の剣の一つであり、人の意思を光の刃として具現化し、相手の精神を断ち切り、物質的な破壊力を放つという性質を持っている。

悟空は一人ずつ吹き飛ばしていた。勿論格闘である。剣を折っては気絶させたり、おどかしたりして次々とひるませていた。

上から敵が襲いかかり、悟空を包みこんだ。しかし…。

「でああああっ！！！！」

彼の全身から一気に気を放ち、彼を包み込む全てを吹き飛ばした。

それでもなお、次々と獣人が増えてくる。例え一人一人がそんなに手間がかからなくとも、今の状態は完全無欠のいたちごっこである。むしろ、どれだけ部下を従えているんだと不思議でたまらない。

一時2人は一点に集まった。

「くっ…、キリがないな…！！　これじゃあこっちが疲れるのも時間の問題じゃないか？」

「いや、オラはまだそんなにパワー使ってねぇけど」

「そうか…。意外とお前はタフなんだな…」

「おめぇこそ」

そして次なる集団が襲いかかってきた。

「よぉし、第3レーン！！」

実際3人が全滅させたグループは今のところ2組である。悟空とガウリイはそのまま集団の中に突っ込んでいった。

一方リナはボスを追跡中だった。自分のシナリオに沿わない展開が繰り広げられたのでイライラしていた。

「んもう…！！　どうなってんのよ！？　せっかく立てた段取りが台無しじゃない！！」
「いやぁ、そんなことはありませんよ」
「え…、ええっ…！？」

リナが振り向くと、いつの間にかゼロスが現れており、一緒に追跡していた。

「一応僕の計画通りに進んでいますから！」
“僕の”…？　…ってんああっゼロス！！　一応計画通りってどういうことよ！！？」
「実は写本を狙う連中がここに来ると密告したのは僕だったりするんですよ！」

衝撃を受けた。いきなりの爆弾発言である。リナは急ブレーキを

かけ、彼に怒りをぶつけようとした。

「ぼく〜〜〜っ！！！？」
「それより、もうすぐ写本のありかに着きますよ！」
「ああっ…！」

しかし、ゼロスは笑顔のままでペースを緩めず、ボスを追いかけていった。でも今は写本が先だとリナも思い、ついていった。

ボスは隠れ部屋に入っていった。そこには今まで盗んできた金貨や財宝、骨董品などが腐るほど置かれてある。彼は金貨の山をよじ登り、ある額縁を壁から外した。

「冗談じゃねぇや！！　誰があんな女のチョチョイのチョイだぁぁっっ…！！？　これだけでも意地でも渡さねぇからな！」

その額縁のガラスを何度も踏んで粉々に割り、その中から紙切れ数枚を拾った。これこそが、ゼロスの言う“異界黙示録”の写本である。

この様子を天井裏からリナとゼロスが監視していた。

「ほらね？　やっぱり人間ってパニックになると必然的に自分の一番大切な物を取りに行くようです」
「あぁん…！？　だからわざと騒動を起こして、本人にお宝のあり

かを案内させたのぉぉっ！！？　いけしゃあしゃあとあたしを利用してぇっ！！？」
「利用？　う～～ん…、……そうとも言えますね！」
未だに能天気なままであった。もう我慢できないと思い、ここで一喝しようと思った彼女。
「なっ―いてっ…！！！」
しかし天井裏のさらに天井に頭をぶつけてしまった。
「でも、敵を欺くにはまず味方からともいいますし！　ねっ？」
するとゼロスは人さし指を自分の唇に触れ、さらにそれをリナのに触れたのであった。彼女の顔が一気に真っ赤に染まった。
「『ねっ』っっって…！！！　ごまかすなぁぁぁぁっ！！！！！」
「さてと、行きましょうか！！」
「ぐぅぅっ…！！！　人の話を聞かんかい！！！」
リナがリアクションしてもなお彼はマイペースのままだった。女に慣れているような態度、自分達を道具にするような狡猾さ、どんな時でも愛想笑いを振りかけるなど様々な要素を兼ね揃えている謎

の青年ゼロス…。

2人は下の様子を窺ってみると、空気が違っているような気がした。

何故ならもう一人ここに現れたからだ。ゼルガディスである。

「うおおおっ！！！　…ぐはぁっ…！！」

ボスは写本を取られまいと彼に立ち向かったが、一振りで撃沈した。

「安心しろ、峰打ちだ」

しかし、峰打ちにしては音の鳴りが何かおかしい。確かに峰で打って、ただ気絶させたはずだ。なぜズバッとすっきりするような効果音がなったのか。まさかと思い、自分の剣に目をやると、彼は冷や汗をかいた。

「すまん…！　これは両刃だった…！！」

剣が両刃だったことをすっかり忘れていた。何故いつも使う剣の刃元の種類を忘れていたのか…？　昔みたいに殺すつもりはなかったのだが、ただ謝ることだけでしかできなかった。

リナはぶら下がった状態で声をかけた。

「こらゼル！！　さてはあんた最初から抜け駆け狙ってたわね！！？　別行動のフリして、あたし達のあとをつけてきたんでしょーが！！！」

「悪いな。　この件に関してはお前に譲るつもりはない」

「ちょっと……！！　ゼル！！」

ボスが掴んでいた写本の一部を拾うと、そのままこの場を去っていった。

「おやおや…。まずいですねこれは…」

するとゼロスの姿が消えた。一瞬何が起こったのかリナには理解できなかった。

燃え盛る中、ゼルガディスは目的を達成できたと思い、大いに満足していた。後は自分の縄張りに戻ってそれをじっくり読み、方法を見つけるのみだ。

「さてと…。写本を手に入れたからにはここにはもう用はない。なんだか利用してしまったようだが、悪く思うなよリナ…」

今この場所にいないリナに話しかけた。でも今では彼女達には関係ない。すっかり、彼の顔からは笑顔が浮かんでいた。

しかし、そういうのも束の間、嫌な気を感じ取った。前を見てみると、炎の中に謎の影がゼルガディスの方を向いていた。ゼロスであった。彼は悟空の瞬間移動のような能力を使って先回りしていたのだ。

「き…、貴様…！！」

「すみませんが、先に中を確かめてもらいますよ…！」

するとまたもや瞬間移動を使って、ゼルガディスから写本をスッと奪い取った。

「しまった…！！」

そしてゼロスは柱の上で座り込み、じっくりと写本の中身を確認しようとした。勿論ゼルガディスは納得がいかない。

「貴様ぁぁぁっ……！！　とっとと俺にそいつをよこせぇぇっ！！

！！」
「今渡しますよ。私に用がないものだと分かればね…」

ゼルガディスは普段は冷静のままでいるが短気でもある。すぐに取り返そうと彼は必死であった。

「“炎の矢”！！！」

ゼルガディスは炎の矢を数本ゼロスに目がけて飛ばした。しかし、見えない結界がそれを無効化した。

「なんだとっ…！！？」
「せっかちな人ですねぇ…」

リナもゼルガディスとゼロスを追いかけてここに辿り着いた。

「ちょっとゼロス！　ゼルには情報を提供するという約束でしょ！？　とっとと降りてきなさいよ！！」
「構うなリナ…。もう…、止めても無駄だぞ…」

ゼルガディスはもう臨界点に突破していた。リナは止めようとした。ゼロスの顔から初めて笑顔が消えた。

「“ボム・ディー”」
「あああ！！！　ダメダメェェッッ！！！！！！」
「“ウィーーーンッッ”　！！！！！！」

ゼルガディスは風の力を爆発的に発揮し、リナがいるのもかまわずに周りにあるもの全てを吹き飛ばした。その呪文の強大な力で、見事にアジトを破壊してしまったのであった。

「やっべっっ…！！」
「うおおっ…！！？」

悟空はガウリイの肩を掴み、瞬間移動した。後に残った獣人達は次々と落ちて来る破片の餌食になったのであった。

「いたたぁぁ…。…うぇえっ…！！？」

アメリアはやっとの思いで破片をどけた。しかし、またもやそれより大きな岩が落ちてきた。

と思いきや、彼女の背後に悟空達が現れ、彼女の肩に触れると破片が落ちて来る前に姿が消えた。

リナ達がいる所に悟空達が現れた。

「悟空さん！！　ガウリイさん！！」
「おお、わりいな。オラとガウリイはちっと忙しかったからつい忘れちまうとこだったわ！」
「酷いですよ2人とも！！」

ガウリイはすっかり廃墟となってしまった様を見回していた。どおりでリナが恐れたほどだ。たかが写本の事で、こんな狭い所で問答無用に発動するとは、なんたる魔剣士であろうか。

しかし3人はリナの茶番だとすっかり思い込んでいた。

「おそらくリナのことだから、また派手にやらかしちまいやがったな」
「リナさんもですよ！！　私があのみすぼらしい牢屋の中でどんな過酷な目に遭ったか…！！」
「あれ？　ゼルもいたのか？」
「えっ…？」

悟空の視線の先にはゼルガディスの後ろ姿があった。

「ゼルガディスさん！！　…それにしても、どうしてここにあるとわかったんでしょうか？」

「さあ…？　さっき俺達にあんな態度を取ってたけど、やっぱり写本に目がないんじゃないのかな？」

「やはり奴らは雑だなぁ…。手段も性格も何もかも…。欲深き者は、どんな手だてを使ってさえもせしめようと必死になる…。これが人間の欲望という理なのだろうか…？」

燃え盛るアジトを眺めながら嘆く男がいた。外見から見て４０歳過ぎであり、頭から膝までのマントを被り、蝙蝠杖を立てていた。実際杖を立てなくても普通に自分で立つことはできるのだが、彼には何故か欠かせないのだった。

ゼルガディスは息を切らしていた。さきほどの“風魔咆裂弾（ボム・ディ・ウィン）”でよほどの魔力を消費したのであろう。

ゼルガディスの前に写本がひらひらと落ちてきた。彼は一枚ずつ丁寧に拾った。

「ぶはぁぁぁっ……！！！　くらぁぁぁゼル！！！　あたしはどおでもいいんかぁぁい！！！！」
「これさえあればな…」
「ぐぐぐぐぐ…！！」

リナは苦虫を噛み潰したような思いでいっぱいであった。

「まさか、この有様はリナじゃなかったとなぁ…」
「たまにゼルもこんなことやるもんなんだなぁ…」

悟空とガウリイ、アメリアは隠れて様子を窺っていた。

「あとさ、ゼルのやつ写本手に入れたんじゃねぇか…！？」
「ホントだ…！！　でも意外とあんな紙きれだったとはな…！」
「でもよかったですね…。これでゼルガディスさん、元の姿に戻れる可能性が高くなったんですし…。でも…、正直ちょっと寂しいです…。かけがえのない仲間であるゼルガディスさんにお別れを言わなければならないなんて…」
「まぁな」

「いや悟空『まぁな』じゃなくて…！　それにアメリア、別にゼルガディスは死ぬわけでも二度と会えないわけでもないじゃないか…！」

別の意味で涙ぐむアメリア、無意識に返事する悟空に突っ込みを入れた。

―さてと…、これで手掛かりをつかめる…。

早速、ゼルガディスは写本の１ページを開いた。

しかし、目を向けたと同時に緑の炎が立ちあがった。全て燃えると同時に灰となって地面に散らばった。５人は驚いていた。

「そ…、そんな……」

特にゼルガディスはショックを隠せなかった。折角ここまで来たのに全て水泡に帰してしまったのだった。３人はすぐにリナ達の元に駆け付けた。

「お～いリナ、ゼル！！　大丈夫か！！？」
「あっ、みんな！！」
「いや～。どうやら僕の探している写本とは違っていたようです。貴方達に余計なものを見せてしまっては困るので、処分させていただきました」

天井からゼロスの声が響き渡った。

「なんだとぉぉっ！！！」
「ああそうそう…。ゼルガディスさんの知りたがっている情報もそれにはありませんでしたから、ご安心ください」
「そっか、ならいいや」
「「いいわけあるかぁぁっ！！！！！」」
「そうだった…！！」

唯一納得する悟空に、一番ストレスが溜まっているリナとゼルガディスに喝破された。

「いずれまた貴方達にお会いすることになるでしょう。その時はまた一つ、よろしくお願いします」

また彼の声がしたので上を向いた。

「ゼロス！！　あんたの本当の目的は何！？」

リナが問うと、天井にゼロスの影が浮かび上がった。

「それは…、秘密です」

ゼロスは決まり文句を言い、姿を消した。

「うぐぐぐぐっっ…、ぬわあああああああああっっっ！！！！！！」

ゼルガディスが悔しがって叫びを上げると、一気に力が抜けたかのように後ろに倒れた。

「ゼルガディスさん！！！？」

リナ達が彼の元に慌てて駆け付けた。彼は精神的に重傷であった。

いつの間にかすっかり夜が明け、山から朝日が顔を出していた。その光を浴びながらパーティ一行は旅を続けていた。しかし、謎の神官ゼロスについて腑に落ちない事ばかりだ。

「なんかとんでもない災難にあったみたいだなぁ…」

「全くよ！　このあたしをダシに使うなんて、“竜波斬”もんよね！」

「一体なんだったんでしょうねあの人？」

しかし、まだ腑に落ちない事がもう一つあった。

「その点ゼルガディスさんはさすがですね！！　一人でどうやって秘密の場所を突き止めたんですかっ！？」
「ギクッ…！」

アメリアが目を輝かせながら質問すると、ゼルガディスの足が止まった。

「ホント！！　さすが大見得切って飛び出すだけのことはあるわねー。でもどーやって写本を見つけたのかなー」
「そっ…、それはだな…」
「いっちゃいなさいよゼル…」
「おいおい…」

リナがからかう程度に迫ってきた。切羽詰まった彼は奥の手を使った。

「あの…、それはだな…、秘密だ！！」
「おめぇ、ホントはあいつのこと気に入ってんじゃねぇのか？」

ゼルガディスの今の行動はゼロスの時とそっくりだった。悟空がそう言うと慌てて自分の有様を確認し、すぐに何もなかったかのように普段のままに戻った。

アジトの焼け跡からはすっかり鎮火していた。そこに、先ほどの男が歩いていた。

「とんでもないことする奴らじゃのう…。ん？」

男はあるものを目にした。それはゼロスが焼却処分した写本の一部であった。

「これは…、写本か？」

それを地面に置き、杖で一突きつくと燃える直前の状態に復元された。彼はそれを拾い、内容をざっと読んでみると、一気に顔色が曇ってきた。

「なんだあ…？　ただの絵空事ではないか…。くだらん！」

そう罵って後ろに投げ捨てると一瞬で燃えきった。

実はその写本には“異界黙示録”の内容には一切触れていない事柄ばかりが書かれていた。どんな内容かは、現存していたアジトの

性質をヒントに、個人それぞれで想像してほしい。

「まったくゼロスの奴め、獣王からどんな教育を受けてきたのか…。未だに卑劣のままではないのだろうか…？」

何故かこの男はゼロスに関することまで知っていた。

「さてと…、この先一体どんな事象が待ち受けているのだろうか…？」

男は振り向き、この場を去っていった。

敵か味方か！？　謎の神官ゼロス介入！！　：　後編（後書き）

初登場呪文・技

・炎の矢（フレア・アロー）

火炎球と並んで初歩的な火系の攻撃呪文。生み出せる本数は使用者の間よくに比例し、リナの場合１０本以上生み出すこともできる。

・風魔咆裂弾（ボム・ディ・ウィン）

圧縮した風の力を爆発的に発動する風の攻撃呪文。

・気合砲

両目もしくは両掌から不可視の気の塊を放出する技。

次回はオリジナルキャラクターが姿を現します！！

完全無欠に一撃！！　無鉄砲すぎる魔道士ロン！！　：　前編

ある街中、その中にあの男がいた。全く見慣れない服を着て。

彼を知る者は誰もいない。ただの黄昏者である。そんなことはどうでもいい。

彼が旅をしているのはただ何となくである。ふと旅がしたくなったという単発的な欲によって動かしたのであった。何の目的もないが、目的がないことでただ自由奔放にどこでも行くことができ、自分の知らない事を経験することができる。

また魔道士でもある。先ほどのように、杖付きでも、素手でも、両方の手段で呪文を発動することができる。また、魔族の事も知っている。しかし、これに関してはこの先の出来事につながる事柄なので、説明するのはやめておこう。

ある時、金を求めるボロ布の女を見かけた。建物の日陰で、奇妙な顔をしているお守りを、まるで大事にしているかのように強く胸に抱いていた。彼女の前に置かれているのは、あちこち罅があってもう使い物にはならない茶碗である。その中には数枚金貨か銀貨が

入っている。

―哀れなヤツだなぁ…。

男はコートのポケットから金貨一枚を取り出した。左手の親指の上にのせ、ピンと音を鳴らして高く上げた。そして、そのまま彼は去っていった。

彼が飛ばしたコインは回転しながら、貨幣の山の上に一回跳ねて乗っかった。その音に動じて女は茶碗の方にハッと目を向けた。

すぐに茶碗の中を確かめ、今増えたか増えていなかったか確認した。その瞬間、何故か茶碗が真っ二つに割れ、コインがあちこちに転がっていった。

「ひゃあああああっ！！！！　泣く泣く腰を低くして貯めた私の資金がぁぁっ！！！！」

彼女は慌ててコインを拾った。その周辺での人々は白眼で見ていた。金を一度見ると必死になるほどの困窮さであることが、彼女の容貌を一目見ただけでわかったからであろう。

―なぁに…、世の中にいい事もあれば悪い事もあるさ…。

彼は満足そうな顔をしながら、何も無かったかのようなオーラを醸して去っていった。そもそも、ちょっとした悪戯をする気は彼にはあったのだが。

―待てや…。『資金』とは何ぞや…？　…ま、オレとは無縁のことだろ…。

男は混んでいる喫茶店のベランダにて、男は背もたれに寄って座っていた。

「ふわぁぁ…」

欠伸を？いていた。紅茶を一杯飲んだはずなのに、自然に漏れてくる。

先ほど“異界黙示録”を求めて旅をいるリナ達を見かけて、少しずつ気になり始めていたのであった。

―あのリナという魔道士は何の名目で、あの魔道書を手に入れるつもりなんだ…？

頬杖をつき、歩きまわっている人々を眺めながら推理していた。しかし、何も思いつかない。

―よくわからん…。だが、追ってみる価値はありそうだ。何かこの世界で不穏な動きがあるそうだしな…。

紅茶を飲み干し、テーブルにお金を置いておくと立ち上がった。

―やれやれ…。オレは旅を楽しんどるというのに…。ゼロスの奴め…。

八つ当たりする男。

気楽に旅を続けたかったのだが、とある事情を思い出したことによって、早速彼女達を追うことにしたのだった。彼は一度興味を持ったものをそのまま受け流すことができない。そのまま野放しにすればムカムカしてくる。

杖をつきながら喫茶店を後にした。ウェイトレスが通ってきたが、次の瞬間、階段が坂になり、その人は足を外して転げ落ちた。

「おわぁぁぁっ…！！！」

男は立ち止り、振り向いた。こういう悪戯をついしてしまう癖が

あったのだった。

それを聞きつけた店長らしき男性が現れ、仁王様みたいな顔つきをした。

「こらぁぁぁっ！！！　足元に気をつけろ！！」

「違うんですよ店長！！！　今階段が……ってあれっ…？」

店員が階段を確認した時には元に戻っていた。

「階段がどうした？」

「おかしいなぁ…？　今坂道になってたはずなのになぁ…」

「アホ！　階段が坂になるなんてそんな…どわぁぁぁっ！！！」

―へへへへ……。

男は歯をこぼして微かに笑い、また杖を強く地面に突いた後歩き始めた。

一方リナ達は“異界黙示録”を求め、次の地へと旅を続けていた。しかし、今のところ状況は平行線のままだ。

「てか、これからどうすんだ？」
「どうするのなにも…、まず、とんだ邪魔が入ったってことよ！！
そいつに横取りされないうちに、とっとと“異界黙示録”を手に入れないと…！！」
「だが…、あの時あいつに攻撃呪文を発動したが、明らかに結界を張っていた。ということは、奴もまた魔道士かもしれん…」
「そんなのアタシだって承知の上よ。あんな唐突にアタシ達の前に現れたり消えたり…」

唯一変わった事は、ゼロスという不気味な青年が顔をつっ込んで、同じくそれを狙おうとしていることだ。ゼロスがまた何か干渉してくるに違いない。その時は“竜波斬”をぶっぱなして彼を懲らしめよう…。リナはそう心に決めていたのであった。

「ところで私達、今どこに向かってるんですか？」

するとリナが一歩前進もうとするポーズのままで止まった。彼女は振り向いた。

「き、決まってんじゃないの！　情報収集のためにあちこち回るのよ！！」
「あちこち回る…、そんなの時間の無駄だ。何の段取りも無く、転々と彷徨って物色するなど…。このままでは、ゼロスに先を越されるのも無理はないんじゃないのか？」

ゼルガディスは、彼女のカムフラージュに構わずに、重箱の隅をつつくような一言を漏らした。

「邪魔が入ったんじゃあなぁ…。確かに今のペースだと、写本取られるのは時間の問題かもな。でも、あいつなんか変な気が出てたんだよなぁあの時…」
「仕方じゃないの…！！　じゃあアンタに何か案でもあるってわけ！？」
「おやおや…。そこらにお困りのようなアホどもがおるわ」

聞きなれない声がしたので、一行はその方を向いた。そこには男が大きな岩に杖をついて座っていた。

「アホどもとは何よ！！　誰なのそこのアンタ？」
「なぁに…、オレは見ての通り、通りすがりのさすらい魔道士ってもんよ…」

自分の顔を指差しながら、そう答えた。

「魔道士…？」
「あちゃ～、こりゃまた胡散臭い人がお出ましみたいね…」

リナは片手で顔半分を覆ってそう言った。

男は岩を滑り下り、着地すると立ち上がった。しかし、しばらくして彼はお尻を押さえて、後ろに捻るように跪いた。

「あの人…、痛かったんでしょうか…？」
「みりゃわかるでしょ…。あんなごつごつした岩をわざわざ滑って降りて来るとはねぇ…。普通に降りなさいよ…」
「おーい大丈夫かそこのおっちゃん？」
「当たり前だろ！！」

彼は振り向いて立ち上がった。立ち直るまでの速度が速すぎて、一行はこけそうになった。

男は立ち上がり、一行に近づいてきた。

「何なんだあのおっさん…！？」
「ところでお前ら、“異界黙示録”を探しとんのか…？」
「ふえっ…？」

彼女はとぼけたような声を出した。突然“異界黙示録”の事を突き付けられたのだ。そう反応してしまうのも無理はない。

「おっちゃん…、知ってんのか？　“異界黙示録”のありかを…？」
「全〜然知らん」

「だぁっ…！！」

即答したのでつい転びそうになった。何故“異界黙示録”の名を言っている癖に、知らないと言ったのか。

しかしこれは、彼が自分の素性を悟られないためである。

彼は片手で顎を掴んで横に傾け、思い出そうとするような仕草をした。

「まぁ一文字一文字のカタカナはあるがなぁ、そんな単語聞いた事一切ないわ」
「そんなことどうでもいいですよ！！！」
「クリアファイルなら知っちょるけどなぁ…。なんだ、そんな紛らわしい名前は…？」
「ガチで紛らわしいのはどっちじゃい！！？」
「お前だろ」
「なんでっ！！？」

リナはこの時反語で言ったつもりなのだが、なりふりかまわず答えられた。

「ああ〜〜っ…！！！　何よ…、このムカつくおやじ…！！」
「ロンだけど？」
「誰も名前なんか聞いとらんわ！！」

ノホホンとした顔で、自らを名乗った男に突っ込みを入れた。

「もう…！！　こんなヤツほっといて、みんな行くわよ！！」
「ああ…」
「まぁまぁ、そう怒らずに待ってくれや」
「誰のせいでこうなったのよ！！？」
「お前のほうからじゃ」
「答えんでもいい…ってさっきからアンタのせいに決まってんでしょーが！！！」

業を煮やしたリナは仲間を連れて、出発しようとしたが、そのロンと名乗る男に呼び止められた。ムカつきながらもリナは振り向いた。

「ったく…、今度は何よ…？」
「そのクリアファイルやらとか、それらしき魔道書があるとされる場所は知っとるだけどな…」
「“クレア・バイブル”よ！！！」

リナが未だにイライラしながらも訂正した。

「まぁまぁ…。その魔道書のありかは…、そっちの方だ。ついてこい」
「ホントかおっちゃん？　そんな簡単に手ェ入るもんなんか？」

「入った事ないからわからん」

そのままロンは出発していった。未だに一行は腑に落ちなかった。

「で、どうするんだリナ？　このままあのおっちゃんについていくのか？」

「そんなのアタシに訊いたって…、早速ゼル出発してるし…」

リナが親指で差した方には、早速足を踏み入れているゼルガディスの姿があった。

「ええっ…！？　信憑性がないのにそれでも行くんですかぁっゼルガディスさんは！！？」

「もう…！！　最近このことになるとああなっちゃうとはねぇ…！！　でも…、行ってみなきゃわからないってのがオチってもんよ！　あのおっちゃん気に食わないけど、このままついていくしかないわね！」

渋々ながらも一行は出発した。

ところがどっこい、ある時は幅広い川を渡り…。

ある時は険しい山を登って下り…。

というように、ある意味脱線しているように見えた。ただの趣味にすぎないのではないのかと思った。悟空やロン、ゼルガディスを除いて他の3人に疲れの色が浮かび上がっていた。

「はぁ…、はぁ…、こんなんで…、ホントに…、ありかに着くと言えんの…！？」
「これじゃあ無駄足に過ぎないんじゃないか…？」

とうとう愚痴を言うまでにもなった。

「おい、そこのオレンジ色の服。ちょっとオレの元に来てくれんか」
「えっ？　オラか？」

何故呼ばれたのかわからなかったが、とりあえず悟空は彼の元に向かった。

「なんだおっちゃん？」
「お前、以前空から真っすぐ落っこちてきたヤツだろ？」

杖で彼の身体をつつきながら尋ねてきた。

「うえっ？　知ってたんか！？」
「なぁに、あの時オレが旅してた時、遠くから見てたんだ。まるで撃ち落とされた鳩の如く、いや…、彗星の如く真っすぐ垂直にズドンだったからなぁ…！　おまけにそっくりな声で悲鳴が響いとったからのう」

しかし、だんだんと頭の中が曇ってきた。

「それにしても、この世界の何処に行っても全然見かけん服装だが…。それに―っってなんじゃ？！！」

ロンが振り向くと、ロン達とリナ一行との間の距離が大きく広がっていたことに愕然とした。すると彼は懐からメガホンのような筒を取り出した。

「ちょいとごめんな…。お前ら、まだ若もんのくせに結構たるんどるじゃないか！！」

「アンタらの足が速すぎんのよ！！」

リナは負けじとメガホンなしでも、それに負けない大声で応えてきた。

「すまんのう、オレの連れが…、じゃなくてお前の仲間か…。へへへへ…」

ただ困惑するだけしかできなかった悟空。

「話がずれたが、あの時一体何があったんだ？」

「ああ、あの時はなぁ…」

悟空はロンにあの事を話した。神龍のことではなく、ふと眠りに着いたときに目を覚ますとこの世界に自分がいたと、信用されやすいように少し改変して話した。

「そうかそうか…。おそらく、“平行世界（パラレル・ワールド）”という概念に基づく空間にお前は迷い込んだのだろう…」

「“パラレル・ワールド”…？」

悟空はその言葉を反芻した。

同一の時間を、同一の宇宙で、同一の人間が生活を営んでいる。しかし、それらは全て別々で何の因果関係をも持たないのだ。

悟空の世界を例に挙げるとしたら、未来の方のトランクスのことである。2人の人造人間によって悟空以外の戦士が戦死し、彼一人で戦わなくいけなくなった。しかし自分と人造人間との実力の差があまりにも広すぎる。そのために彼は歴史を変えようと、過去に戻って悟空達にこの悲惨な未来があり得る事を警告した。

この事で歴史に大きな矛盾が生じる。トランクスの世界に出る筈がない敵が次々と現れたのだ。このことでさらに厄介になってしまったのだ。しかし、悟空達の活躍で間一髪で食い止めることが出来た。つまり、地球の未来を変えたのだ。

そのことで、未来のトランクスの世界と悟空の世界は何も因果関係を持たなくなり、要は後者を“現実世界”とすれば、前者は“平行世界”ということになったのだ。ただ、彼の母であるブルマが開発したタイムマシンは、どんな時空も飛んでいけるので、確かなのかどうかは言えないが。

「わりいけど、なんだか難しい言葉ばっかでまったくわかんねぇや…」

「わからなくていいんだ、世の中なかなか理解できんもので詰まってるし、あくまでこれは哲学みたいなもんだからな…」

「さらにチンプンカンプンになってきた…」

「まぁオレが言えることは…、今お前がいる世界はお前の世界とは全くの別物で、案の定ここにはお前を知る人間は誰一人もいねぇ」

ロンはそう言い放った。もし自分と瓜二つの姿を持つ者に出会ったとしても性格などがそもそも違う。悟空を知るのは悟空自身のみである。

「ってぇことは、けっこう離れたとこにオラは飛ばされたんか？」
「そうじゃ。…残念だが、この概念は今でも科学的に実証されとらん。未だにお前を元の世界に戻すことは不可能だ」
「そっかぁ…」

ロンから見ては落胆したような感じがした。少しすまないと思った。

「わりいな、何も得にならん話をしてしもうて」
「……ま、いっか！！」
「だぁぁぁっ……！！！」

彼は大きく転んだ。

「リナさん、あのおじさん何故か転びましたよ…」
「そんなこと、どうだって、いいじゃないのよ…！　それより、アタシ達何だか無視されてない…！？」
「下らん…」

一方、ロン達から距離を置かれているリナ達は愚痴をこぼしていたのだった。

ロンは手前にある大木に手を置いて項垂れていた。勿論、悟空は何故彼がそんなことをしだしたのかは全く分からない。しばらくすると彼は振り向き、『待て』と言っているかのように、広げた両掌をを前に突き出して振ってきた。

「ちょっと待ってな…。待て…。今お前はどこにいる？」
「へっ？」
「いいから答えろ…」
「ああ、オラんとことは全く違ってる世界…？　…もう何回も言ってんのに、急にどうしたんだおっちゃん？」
「『急にどうした』じゃなくて…。お前、うまい棒並みに軽いんだな…」
「なんだ、そのうまい棒ってぇのは？」
「あぁそれは、なんかサクサクしてて……ってそんなことはどうでもいいわ！　何故に故にそんな楽観的でいられるのかが妙に不思議でたまんねぇんだよ！！」

ロンは悟空を心配したことを後悔した。こんな消極的な状況に立っているにもかかわらず、それでも笑顔でいられるのが非常に不思議でたまらなかった。

「だってさぁ、ただ落ち込むんじゃ何も進まねぇし、楽しくねぇかんなぁ！　それに、別にオラがいなくても、代わりにあいつらがチチを支えてやってるにちげぇねぇ…」
「お前、なかなかの無鉄砲男だな…。なんかに取り憑かれてるのか…？」

もはや彼は驚き呆れるだけでしかできなかった。とはいえども、彼も普通に悪戯をしたり、気ままに旅をするくらいだから、悟空とほぼ似たようなものであった。

ちなみに、“あいつら”とは悟空の息子である悟飯と悟天、そして唯一の孫娘であるパンのことである。彼が愛してやまない子供たちであり、共に闘ったりするなど、非常に絆が深かった。

しかし、あの日に遠回しなお別れを告げて神龍と共にあの世界を去り、しばらくして戻ってしまっては彼らにはすまない。そう心が詰まるような思いをたまにする事がある。しかし、心の9割がこの世界に対する期待感である。あまりにも身勝手すぎるが、旅をして自分よりすごい者に出会えることに嬉しくてたまらない。

「ヘンなヤツ…」

そう呟きながらも、再び出発した。その時はやっとのことでリナ達が追いついてきたのだ。

「着いたぞ」
「随分時間かかったもんだなぁ…。いってぇ何時間ぐれぇかかったんだ？」

すると4人が息切れの状態で到着した。ロンはその様を見て呆れていた。

「大丈夫かおめぇら…？　めっちゃ息が切れてっぞ」
「なんだ？　たかが徒歩2時間ぐらいでお前らこんなにへこたれるなんて、若造のくせになんて情けない…」
「2時間！？　それで十分ですよ？！！　そう言ってるおじさんはどうなんですかっ！？」
「オレか…。この通り未だにピンピン―」

するとロンは前に倒れて、地面に着きそうな位置の所で、さらに前の所で杖を突いた。

簡単に言えば、某有名歌手のダンスの一場面のようなポーズを取っていた。

「そういうおっちゃんも疲れてんじゃないかよぉ…」
「疲れとらん！！　ふくらはぎに溜まった乳酸を追い出しとるだけ

に決まってるだろ！！」
「一緒じゃぃ！！！」

一行は大きく喘いでいた。日向にいる状態で長時間もハイキングをしていたのだ。山を登り、河を渡り、長い長い坂を上っていたり、さらに気温が高い状況だったので、疲労度が増すばかりであった。

「もう…！！！　さっきまでアタシらを差し置いて…！！　ホントに案内する気があんの！！？」
「さぁてここだ。魔道書の在り処は…」
「人の話を最後まで聞けぇぃぃっっ！！！！！」

悟空達の目の前には、大きな大きな入口が立っていた。

一間休憩を入れた所で、一行はその中に入っていった。

完全無欠に一撃！！　無鉄砲すぎる魔道士ロン！！　：　前編（後書き）

新キャラクター

ロン（ＣＶ　：　野沢那智）

彼曰く、『通りすがりのさすらい魔道士』。地味な服装をしており、まだ４０歳代なのに蝙蝠杖を常に持っている。しかし、初級並の呪文から上級の黒魔術に至るまで様々な魔法を使えるという、外見に寄らないほどの実力を持っている。世界の各所を探訪していたが、悟空達を見かけてから、それ以来彼らに興味を持つようになる。

普段はギャグ交じりで人々と触れ合う。階段を坂道に変形させるなど“滑稽な悪戯”を行ったり、自分のノリに乗ってスリッパで突っ込みを入れるするなど。

完全無欠に一撃！！　無鉄砲すぎる魔道士ロン！！　：　後編

ロンという名の、突如悟空達の前に現れた謎の魔道士に案内され、2時間の過酷なハイキングの末に辿り着いた謎の洞窟。彼らは“明り（ライティング）”を用いて、そのまま坂を下っていく。

一体ここはどこなのだろうか。誰もがそう思ったのだった。

「ここは何ていうとこなの？」

リナが彼に尋ねた。

「この洞窟は、“狡猾たる洞”という名で知られている」

そのままロンが話し始めた。

何百年か前、とある有名な魔道士が近くの村に身を潜めていた。その魔道士はとてもずる賢く、自分が魔道士であることに乗じて、数え切れぬほど沢山の悪事を働いていた。自分に有益な魔道書をあちこちから集めていたり、盗みを犯したりなどしていたのだ。

しかし、バチがあたったのか、彼は若い歳で不治の病にかかってしまったのだ。死ぬ間際に、誰も入ってこれぬよう、ここに多種に亘る罠を仕掛け、自分にとって最も重要な魔道書を奥深くの場所に隠したということだ。

「なんだかそいつ、リナにそっくりそのまんまだなぁ…」
「何よそれ！？」

リナは今彼の漏らした一言を聞き逃さなかった。やることは正反対だが、性格がほとんど同じといえるのも事実である。

「魔道士であることを逆手に悪事を働くなんて…、そんなの私がガツンと懲らしめたいところです！」
「とっくに死んでいる奴に因縁つけてどうするんだ？　…しかし、その魔道書が、“異界黙示録”の写本である可能性が高いということなのか？」

ゼルガディスはそう解釈した。しかし、それとは裏腹にそんな貴重な書をよく手に入れることが出来たもんだなと疑問に思うばかりだった。

「いや、そうとは限らねぇ。そいつはお前らみたいに魔術に長けておるわけではないそうでな、悪事を働いたとしても、僅かな範囲での上でのことだったそうだ」
「それにしてもアンタ、そのことよく知ってるだわねぇ…」
「まぁ、オレはそいつの存在を以前見かけたんで―」
「『以前』？　『以前』って、その魔道士は何百年前にとっくに死んでるんでしょ？　なのに『以前』って、…生き返って彷徨ってるっていうの？」

するとロンの足が止まった。内心焦っているように見えた。

「さあな…、今のは言葉の綾とも言えるが…」

リナの問いに、彼はそう言い返した。それでも彼女は納得しないままだった。

「なんか怪しいわねぇ…。さっきもアタシ達が魔道士だと知ってるようなこと言ってたし…。もしかしておっちゃん、その魔道士となんか関係あるんじゃないのっ！？　アタシ達を欺かせて息の根を止めようってつもりっっ！！？」

彼女はロンに詰め寄った。それに対しロンは腑に落ちないと、内心プツンと切れ、負けじと反論し始めた。

「なんだと？　確かにオレは悪戯する気満々だったがそこまで疑うこたぁねぇだろ？　やはり“ぺちゃばあさん”のお前さんは、胸の小ささと心の小ささが比例してるんだな」

「おかしいでしょ最初の一言！！　それに、そんな焦りで言い逃れしようたって、アンタの―」

『命取りになるだけよ』…。そう言いかけたリナなのだが、急に

2人の口論が中途半端なところで止まった。彼女の顔が一気に沈み、それとは裏腹に、彼女にはある感情が湧き上がっていた。

「ちょっと待って…、今アタシのことなんて呼んだ…？」
「“ぺちゃばあさん”！　あちらこちらでは“米寿”、“まな板”、何故だが知らんが“関東平野”って言われてるもんだから、オレが主観的にそのあだ名をわざわざ考えてやったんだ。　感謝するんだな！」

ロンはぶっきらぼうに即答した。

なんて躊躇という言葉を知らない男なんだ…。悟空、ガウリイ、アメリア、ゼルガディスは途轍もない焦りを抱いていた。そんな平気にリナの導火線に火をつけるなんて、命知らずにもほどがあると思っていた。

リナは強く掌を握っていた。勿論怒りで満タンだった。

「さんざん言いたい放題して…、それに、触れてはいけないことにふつーに突っ込んで、何が感謝よ！！！！」
「ほ～れほれほれ、やれるもんだったらやってみろ」
「おいおい待てって2人とも！！　こんなとこでわざわざケンカするこたぁねぇだろ？」

そして喧嘩に発展してしまったのだった。また、リナとロンの両者が魔法を使おうとしたので、慌てて悟空達が仲介に入った。こん

な狭い所で使っては生き埋めになってしまう。

「まったく…。たかが自分への劣等感で時間を無駄に使いやがって…」

「誰のせいでそうなったのよっっ！！？」

「お前だろ？」

「違うわ！！」

結局喧嘩は中断されたが、因縁は残ったままだ。この洞窟を出たら、“竜波斬”か何かでぶっ飛ばしてやる…。特にコンプレックスのことに突いてきたのがどうしても気に食わなかったのだった。

しばらくして彼らは最初の関門に辿り着いた。一本『危険』と書かれた立て札が置かれてあったとはいえども、何も無く、ただの道にしか見えなかった。

「ここに立て札があるけど、どう見たって何もないよなぁ…？」

「あのねぇ、そう見えるけど裏に何かあるというパターンが必ずあるってもんよ。みんな、気をつけて！」

リナは仲間に念を押した。確かにそういうパターンがないとは限らない。周りを見渡しながら一行はその道を渡っていった。

しかし、とは言っても何も起っていなかった。なんだ、ただの脅かしだったのか…。そう思っていた悟空達。

その時だった。急にリナが放っていた光が急に消えた。

「あれっ？」
「急に消えた…」

一瞬途轍もなく、背筋が凍るような不安を感じ、ロンは足を止めてゆっくりと見下ろした。

「どうかしたのか？」

―地面が……、まっ、まっ黒……！？

足場が…、ない…。

全員がその場に足を踏み入れたと同時に、足場が一瞬で消失していたのだった。ロンが下に指を差すと、つれて見下ろした他の人達も焦燥感を感じた。

「やな感じ～…」

ロンは顔を上げ、そう呟いた。

「「「「「うわぁぁぁあああああっ……！！！！！」」」」」

同時に悟空達はそのまま等速直線運動の状態で落下していった。

「なんでこうなるのぉぉっ…！！？」
「リナぁぁっ…！！！　何とかしてくれぇぇぇっっ……！！！」
「くっ…！！　こうなったら…、“浮遊（レビテーション）”！！！」

この時の為にこの呪文がある。リナは咄嗟にその呪文を発動した。

しかし、ただ一筋の光が輝きを失っていくばかりだった。そう、空を飛べていないのだった。

「ええっっ！！？」
「ウソっ…！！？」
「呪文が使えないだと…！？」

アメリアもゼルガディスも呪文を唱えるものの、何も起きなかった。もしかして、今日は女子に限っての“ある日”なのだろうか。いや違う。とっくにその日は過ぎたはずだし、ゼルガディスにはそんな日はない。

「ちょっとおっちゃんっっ！！　どういうことよ！！？」
「そんなん、天才魔道士のお前がオレに訊くことかぁっ？！！　…そうだ、今オレ思い出したんだが、ここのあちらこちらに封魔陣を敷いていたことを聞いたような…」
「それを最初に言わんかぁっ！！」

しかもこの穴は奈落の底のようで、同じようにここの犠牲になった者達も少なくないようだった。

「そんなぁっ…！！！　こんな狭いところが私達の墓なんてイヤですよぉぉっっ…！！！　まだ正義の為にやらなきゃいけないことがいっぱいあるのにぃぃっっ…！！！」

「おーい！」

リナ達は悟空の声のした方に顔を向けた。

何ということなのだろうか。悟空だけが宙に浮いていたのだった。このまま落下していくリナ達と対照的に彼は見下ろしていたのだった。

「ごっ、悟空さん！！？」

「どうやらオラは何ともねぇみてぇだぞ！」

「『何ともねぇ』って…！！　そんなとこでノホホンとしてないでアタシらをどうかしろぉぉーーいっっ！！！」

悟空はリナの方へと飛んで行き、まず彼女の手を掴んだ。

「みんな掴まれっ！！」

そのままゼルガディス、ガウリイ、アメリアとロンが？まってい

く。そして悟空はUターンして一気に穴の外へと急上昇していく。

「だりゃあああああっっ！！！！」

彼は一気に腕を振り上げ、彼らを投げ飛ばした。

「「「「うわあぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」」」」

彼らは弧を描いて飛んで行き、地面に叩きつけられた。悟空が着地すると、『いててて…』などのうめき声が耳に入った。

「わりいわりい！！　つい勢いに乗っちまった！！」

「だからってアタシらを軽々しく投げ飛ばすことはないでしょーーがっっ！！！」

「いいじゃないか。これで最初の関門を通過できたんじゃし…」

悟空に突っ込みを入れるリナに念を押した。

「でも、どうして悟空さんだけが使えたんでしょうか？」

「そうよ！！」

「ああ、どうやらオラの“舞空術”は何ともなかったようだ」

“翔封界”や“浮遊”などの風系の魔法は勿論魔術の類に入るものなので、今封魔陣に足を踏み入れているリナ達には発動不可である。

ただ、この名前からしては魔法だけを無効化するので、“舞空術”など身体中の気、ここでは所謂精神系に類する手段とは一切関係はないようだ。だからである。

「なるほどね…。…ってそれを先に言わんかっ！！！」
「いやぁ、おめぇらの使う魔法と気は似てるようなもんだからさぁ、すぐに気付けなかった」
「世の中似て異なるもんがゴマンといるというもんだろ。こんな話しとる場合じゃないんだがな。…さてと日が暮れぬうちに、とっとと魔道書を手に入れてしまうのが先決じゃないのか、お前ら」

ロンがそう言うと、一行は出発した。

「け～～～っ…！！　何よさっきから人をコケにするような態度して！！！」
「お前も同類じゃないのか？」
「一緒にするな！！」

それ以降も、吊り天井や無数の吹き矢などの典型的な罠に困っていた。しかも、そこでも封魔陣が設置されているらしく、魔法が使

えなかった。ただ、そういう飛び道具などに関してはガウリイの光の剣で対処してきた。光の剣はもともと精神などを集中することによって光の刃を作り出すので、これもまた魔法とは関係がないことに等しかったからだ。

そしてついに目的地に着いた。ここに限っては天井までの高さも、この場所の広さもこの洞窟で最大であった。

こここそが、“異界黙示録”の写本らしき魔道書が置かれている広間である。奥に魔道士の墓と思われる一つの棺桶がポツンと置かれていた。

「ここに写本があるってわけか…」

悟空が呟いた。

「それにしても地味ねぇ…。大事なもんを隠したにしても、言葉にならないほど退屈じゃないの…」

「だが、写本を手に入れたことに変わりはない。俺はとっとと中身を知りたいんだ」

「わかってるわよ」

そう言って、リナは魔道書があるとされる棺桶の方に走りだした。その時だった。

「はっ…！！　危ないっ！！！」
「うわぁああっ……！！？」

何かに気づいたガウリイが咄嗟の判断でリナをかばったと同時に、その足場が爆発した。

「だっ、大丈夫ですかリナさん！！？」
「いったぁぁ…、っていつまで触ってんだ！！」
「うわっ！！！」

リナは突っ込みの意味合いを含めて彼を蹴り飛ばした。

「ハハハハハ！！！」

そして謎の笑い声が空間内に響き渡ったのだった。

「君達、よーくここまで来れたね！！」

急に声がした。一行は見回すと、魔道書が置かれている台座の目の前に、さっきまでいなかったはずの少年が立っていた。黒いラインが施されてる真っ白な服を着ているが、そんなに魔道士だと思えそうになかった。

「なんかちょっと…、私のイメージと大きくかけ離れたような…」

あまりの差に、アメリアは失笑してしまった。それに加え、あまりにも喋り方が幼稚ぽかったのだ。

「驚いたよ。僕が仕掛けた罠を乗り越えた人なんて、君達が初めてだからね」

「なにもんだ、おめぇは！」

悟空が大きな声で問いかける。ロン以外リナ達も目の色を変え、彼の方に顔を向けた。

「僕？　ああ、君達が噂などで知った魔道士張本人さ。君達は僕の事を知ってここに来たんじゃないか？」

「何だって？」

「どういうこと！？　とっくの昔にここで死んだはずじゃなかったの！？」

「そうさ！　本来はね！」

彼がそう言う。

とはいえども幽霊にしては、姿が透明でも半透明でもどちらでもないのは、明らかにも胡散臭い。

「でも、死ぬ間際に夢の中で“ヘンなヤツ”に出会ったんだ。『お前の願いを叶えてやろう』って言われてここに一生いる代わりに、“すごい力”を手に入れたんだ！！」
「“ヘンなヤツ”ですって？」
「ヘンなオッサン？」
「違う意味に置き換えるな！！」

その魔道士はそれに誇っているかのように言い放った。

「だが、“異界黙示録”の写本は…？」
「“クレア・バイブル”？　…何それ？　僕はあらゆる所から魔法に関する書物をかき集めてきたけど、さすがにそういうの聞いた事ないなぁ…」
「何！？」

ゼルガディスは動揺した。

「何だか知らないけど、とんだ災難だったね！」
「アンタのいたわりなんか結構よ！　こっちなんてしゃらくさいジジイにやけにしゃれまわされたせいで散々な目にあったんだから！！」
「さぁ？　何のことか…？」

ロンはそっぽを向いてとぼけた。しかし、無視されただけであっ

た。

しかし、リナの言っている事は正当かつ事実である。実際ここには写本がないというのも大きいが、ほとんどの原因はわざわざトラブルに付き合わせたロンであった。

「でも、君達を帰したりはしないよ！　何故なら君達がこの力の餌食になる初めての人達だからね！！」

魔道士はそう言い放つ。リナはこういう馬鹿馬鹿しい展開にストレスを感じるようになっていた。

「あのねぇ、アタシ達はここに探しもんがあるからと聞いて出向いただけで、別に待ちぼうけのアンタなんかと戦う気なんかさらっさらないわ。悪いけど、別の相手に回してちょうだい。行くわよ」

リナはそう言い放ち、この場を後にしようとする。しかし、それでも認めないままだ。

魔道士が手首を下におろすと、入口が瞬く間に消えた。

「んなっっ…！！？」

「さっき言ったばかりだよ。僕は本気だからね、十分に楽しませてもらわないと」

彼はささやかに笑っている。どうしてもこの魔道士をどうにかして片付けなければここからは出れないようだ。

「随分何気に自信あるんだなぁおめぇ…」
「チッ…、ムカつく顔しやがって…、いちいちしつけぇ野郎だなぁ…。わーったよ…、オレ達が相手すりゃいいんだろ？」

ロンがそう言い放つ。

「やっとする気になれたようだね」
「ちょっと…！！」
「やってみなきゃわかんない…。さっき、お前さんそう言ったじゃないかぺちゃばあさんよぉ…」

確かに悟空一行がロンに初めて出会い、ここに目がけて出発する前にリナはこんなことを言っていた。

しかし、彼女にとってはそれは『あれはあれ、これはこれ』みたいなものであった。

また、最後に言った彼の一言が引き金を引いたのであった。

「“火炎球”！！」

怒りの一球が彼に目がけて投げつけられた。
…と思いきや、何も起こらなかった。

「何っ！？」
「“炎の矢”！！」
「どわっ…！！！」
「うああっ…！！？」

その一方で魔道士は何不自由もなく魔術を駆使し、一行に攻撃してきた。避けるだけでしかできない一行。

「そうか、今その子が出そうとしたのは“火炎球”…。やっぱり僕と同じ魔道士の人達なんだね」
「そりゃそうだが」
「アンタが答えてどうするっっ？！！」

即答したロンにリナが突っ込みを入れた。

「ハハハ！！　今僕のいるこの場所も、そのためだと思って結界が張られてるのさ。僕以外の人限定だけどね」
―そこまで対策を練ってたとはなぁ…、どんだけ結界好きなんだこいつ…。

それに対し、彼は下らない言い訳を言ってきた。

「だって今やってるのは僕中心みたいなもんだよ？　なのに僕がやられてばかりじゃあ成り立たないじゃないか」

―エゴ丸出しの言い訳ばっかしやがって…、ってやられてばかりって今始めたばっかだろうが…！　アホにもほどがあるわなぁこいつ…。

表には出さないが、実際彼の裏ではいらつきを感じていた。

とはいえども誰も魔法を使えないのでは、今回の戦闘はしゃれにならないほど一方的なのは確かだ。しかし、方法はあった。

「待てよ…、ってぇ事はオラかガウリイがいかなきゃいけねぇってことか…」

「そうだ！」

この中で魔力を使わなくとも十分に戦える力を持っているのは、悟空と、光の剣を持つガウリイの2人だけである。しかし、どちらかというと悟空の方が意欲が強かったのだった。

「そんじゃあ、久々にオラが行ってみっか」

「お、おい、本気でやるのかよ？」
「なぁに、すぐに終わることじゃねぇか」
「ああ、いっぺんこいつの根性をしばいたれ！」
「ああ。あと、オラ一人で大丈夫だから」

そう答えると、悟空は彼と対峙した。

「君一人で行くつもり？」
「いや…、２人で行ったら単なるいじめみてぇになっちまうからなぁ…。オラそんなの気にいらねぇんだ」
「へぇ…、結構優しいほうなんだ。でも…、ということは一人ではこの僕には勝てないとでも…？」
「いいや、そんなことはねぇ。てか、別に一人で十分だけどな」
「君も結構自身があるんだね」

魔道士が半分からかう気持ちで言う。しかし、そんなことは気にしなかった。

「さぁて行くよ！！“氷の矢（フリーズ・アロー）”！！」

―うわっ、カッコつけやがって…！！

一人虫唾が走った人がいた。華麗にポーズをとって魔法を放ってきたからだ。

「くっ！」

悟空は高くジャンプして回避した。氷で形成された数本の矢は地面に突き刺さる。

そして彼は魔道士に急接近する。しかし、咄嗟に次の手段に打って出てきた。

「おっと…！！“火炎球”！！！」

「おわっっと…！！？」

高速で火の球が接近してきた。しかし、ブレーキが効かない。避けようとしても、万が一それが壁に命中し、その瓦礫で彼の後ろの方にいるリナ達に被害を被っては…。

「だっ！！」

悟空は片手で魔道士の方に跳ね返す。

「素手で跳ね返しただと！！？」

それを見たゼルガディスが驚く。他の皆もそうだが。

「“氷結弾（フリーズ・ブリッド）”！！」

それに対し彼は青白い光球を放った。２つの球は衝突して相殺し、澄んだ音を立てて消滅した。

「驚いたよ。何千度もある“火炎球”をまさか素手で僕に跳ね返してくるとはねぇ…」

「あちちち…！！　並じゃねぇ熱さだな…！！」

「当たり前でしょうが…」

しかし、それなりの熱さは感じていたようで、焦りに焦って一生懸命息で冷やしていた。

「じゃあこれは？“地撃衝雷（ダグ・ハウト）”！！！」

今度は地面から岩石の槍が出現した。

「あいつ色んな魔法使ってくんな…」

ロンがそう呟く。

またもや“見切り”を用いて回避するが、今度は悟空が丁度着いた壁全体から無数の槍が突き出してくる。

背後は塞がっているため、右折して回避した。

「ただ逃げるだけじゃつまらないじゃないか。もっとかかってきてよ」

やや挑発的に言い放つ魔道士。するといきなり彼の目の前に悟空が現れた。

「えっ…？」

「そらぁっ！！」

悟空が一発かます。リナ達は勝利を確信した。

「やったか！？」

しかし、拳はその姿をすり抜け、そしてその幻は消えた。

—残像…！！　あっちか…！！！

気の感じる方に振り向くと、魔道士が立っていた。
ちなみに彼が使ったのは“夢幻覚(イリュージョン)”という魔法である。避ける際に自分の分身、すなわち影を作り出し回避していたのだ。

「今のは少し油断した。僕がちょっとからかった途端、言われたとおりに現れたからね」
「おしかったなぁ…。もし実物だったらオラが勝ってたのにな」
「もし僕が一発でも殴られたりしたら、結界がすぐに消えちゃうからね…」

魔道士が言う。
この結界は魔道士独自に改良したものなのだが、一つ欠点があった。ほとんど彼が精神を集中させることで、結界が維持されている。つまり、もし一発でも彼がダメージを受けると集中が途切れ、結界が消滅してしまうのだ。
「ある意味さすがだな…。自分に自信を持ちすぎの反面、それを糧に独自の結界を維持させているというわけか」
ゼルガディスがそう言う。ある一人、感心している場合かと思っているが。

「いいのか？　そんな大事な事オラに話しても？」
「別にいいさ。勿論口封じだし、それにこの勝負は必ず僕が勝つこ

とになっているからね。」
「そんな余裕扱いた発言はもう聞き飽きたわよ！！　悟空！！　あいつに一発ぶん殴ってやんなさい！！」

リナがそう言い放つ。

「おめぇなぁ…。ま、いっか！！　そんじゃあ次はオラの番―ってあれっ…？」
「ふっ…。でも、これで僕の勝ちは決まったもんね」

怪しげな笑みを浮かべ、勝利宣言する彼。

「うっ…、うぐぐ…」

明らかに悟空の様子がおかしかった。

「ちょっと悟空！！？」
「どうなってんだ…？　足が動かねぇ…！？」

悟空の足が静止している。勿論意識はハッキリとしているのだが、身体をどうしてもコントロールすることができないのである。

リナは一瞬動揺したが、あることに気付いた。

「悟空のやつどうしたんだ？」
「“影縛り（シャドウ・スナップ）”よ…！！　あれを見て！」

リナが答える。魔道士が既に裏を？いていたのだった。

その呪文を発動したと同時に悟空の影にナイフが刺さっており、それと連動して彼を縛っているのである。

「はっはっは！！　さっきまで調子扱いてたけど、こんなことに気付かなかったなんて、どうやら僕ほどではなかったってことだね！！　安心して、今楽にしてあげるから」

魔道士は片手を悟空の方に差し向け、止めの準備に差し掛かっている。薄い紫の光が照らしている。それに対し悟空は歯を食いしばっている。何か方法はないのかと思索しているのだ。

リナ達もまた思索していた。魔法を使えない今、どう対処すればいいのか。こうなれば、もう一人の今回のキーパーソンであるガウリイを介入させるとするか。

「こうなったら…、ガウリイ！！　彼をお願い！！」
「ああ、わかった！！」
「そう急かすなってぇの」
「えっ？」

助けに行かせようとするリナをロンが制止した。

「急かすなって、アンタ見殺しにする気！！？」
「まぁまだ終わったんじゃねぇんだから、もうちょっと見てみな」

ロンがそう言う。勿論納得されないままだ。

―この術から抜けるにはどうにかしてオラの影を消さなきゃ…！
でもどうやって…！！

悟空は頭の中で考えていた。しかしその時間が一秒ずつ過ぎるにつれ、魔道士の片手では強大な力が貯蓄されていく。

―そうだ！！　あの技があった！！！
「みんな！！　顔伏せろ！！」

悟空がリナ達にそう促した。

「えっ！？」
「悟空さん、何か策を思いついたんでしょうか！？」

「じゃなきゃ俺達に注意なんか…」
―天津飯、ここにはいねぇけど借りるぜ！
悟空は額に両手をのせた。魔道士はふと疑問に思った。
「太陽拳！！！」
「うおっ…！！？」
彼が叫んだ次の瞬間、彼の身体が一気に光り出した。
「「「うあああああっ…！！」」」
「くぅぅっ…！！」
「またおどれぇた…。“翔封界”だけじゃなく、“明り（ライティング）”までも魔法なしで使えるんか。こいつの世界は一体どんだけ逸材で満たされてんのか不思議なもんだ」
「ってそれアンタのだけかい！！」
目を覆うリナ達とは対照に、ロンはサングラスをいつの間にか掛けていた。
「目がぁぁぁっ…！！！」

その光は半端なく強く、魔道士は目を眩ましてしまった。名前の通り、太陽並みだから当然であろう。その隙に悟空は自縛から抜け出していた。

「もらったぁぁぁーーーっ！！！」
「ぐわあああああっ！！！」

悟空は隙をついて魔道士に一発を喰らわせた。そして彼は吹き飛んで行く。

そして彼は着地した。

「よっと。危ねぇ危ねぇ…。何せ全然使ってねぇもんだからついつい忘れちまうとこだった…。そうだ、どうだおめぇら、力が戻ってきたか？」

悟空が彼女達に確認すると同時に、瓦礫から爆音が鳴り響いた。まだ懲りていないようだ。それどころか、こういう展開になるとは少しも思っていなかった魔道士には怒りが込み上がっていた。

他の人から見れば、そんなしょうもない事で…と呆れそうだが。

「そんな…、そんな筈はない…。僕は最強の、最強の力を手に入れたはずだ…！！　それなのに…、こんなザコ如きにいいいっっ！！！！」

先ほどまで余裕を誇大に示していた魔道士だが、一気にプライドが傷ついてしまったのだった。

または本性を露わにしたようなものであった。

「おのれぇぇぇぇーーーーっ！！！！！」

悟空に一発の魔法を当てようとする。しかし…。

「“塵化滅（アッシャー・ディスト）”」

「うっ…！！！　ぐわあああああ！！！！！」

急に魔道士が苦しみだし、瞬く間に黒い塵と化した。

悟空達が一瞬の出来事に驚く。そこには杖を向けたロンが立っていた。

「“塵化滅”って…！！　黒魔術の一種…！！」

リナが驚く。彼女曰く、黒魔術の一種で勿論上級、習得するのに長い年月がかかるそうだ。

「なぁに、ヤケになったところで勝負は見えたもんだ」

杖を肩にかけ、ロンがそう言った。

結局今回もまた、“異界黙示録”に関する手掛かりを得ることはなかった。

リナ達はしょんぼりとした気持ちで洞窟を後にした。

「結局何もありませんでしたねリナさん…」
「今日も最悪だわ…。いざとなってあるかと思ったら…。あんなに調子こいた魔道士なんて…、前も見たような感じはするけど…」
「ほとんどただの散歩みたいな感じだったしな…」
「全くだ…」
「アンタが言うことか?!!」

ロンが何故かそんな事を言ったので、一気にリナの導火線に火がついた。

「ノリだよ今の」
「そんなことよりどうしてくれんのよ!!? 今回あんな目にあったのアンタのせいだよ!!!」

「どうやら今回は…、オレのアテが意外に外れた…。という事でいいだろ？」
「ごまかすな！！！」

彼女はたまらず突っ込みを入れる。

「まぁまぁ今回は見逃してくれや。お前さん胸が小さい割には心が広いじゃないか」
「“火炎球”！！！」
「あらよっと！！！」

どんなお世辞でも少しでも自分のコンプレックスに敏感に反応する彼女であった。それよりむしろ、先ほどの発言とは明らかに矛盾が生じていた。しかし、これは彼の意図的によるものであった。

蝙蝠杖をバットのように大きくスイングし、リナが放ってきた“火炎球”を空高く打ち上げた。その球は大きく弧を描いて落ちていき、大爆発を起こした。そこから多くの断末魔が悲鳴を上げていた。2人を除く他の人は困惑していた。

彼は満足したような顔つきで、杖を肩に掛けた。

「いい歓声！　まぁ起死回生のホームランを打ったからな！　よし、気持ちが高まったところで、それじゃあ達者でな」
「ああっ、ちょっと待ちなさいよ！！」

すると瞬く間にロンの姿が消えた。

「行っちゃった…」

「今日もまた一本取られちゃったなぁ…。一体何だったんだ？　謎の神官といい、さすらい魔道士といい…」

「おっと、一つ言い損ねたがな」

悟空達より遠いところにロンが立っているのに気づく一行。背中に大きな袋を背負ってきた。

「まだいたんかい！！　もうアンタの顔なんか二度と見たくはないわ！！」

「それ相応の勘定はさせていただいたからな」

「えっ、あいついつの間に―」

「…ふえええっっ…！！」

リナがそれを見ると急に慌てだし、ポケットなど手で探った。

「あれっ……！？　なんで…！？　ない…、ない…」

「おい、どうかしたんかリナ？」

「…昨日の盗賊からかっぱらってきたお金が全部ない…！！」

「「「「えええっ！！！？」」」」

４人は驚いた。しかし、悟空の場合は別の動機づけで驚いていた。

「おめぇ、どうやってあんなでっけぇ袋を服ん中に入れたんだ！！？」

「あらっっ……！！！　そういう問題に戸惑ってる場合じゃないわよ悟空！！！　どーすんのよ！！　このままじゃあ晩飯もこの先何も食べられないじゃないの！！？」

いつの間にかロンは、昨夜“異界黙示録”を探しに盗賊のアジトに訪れた際に奪ってきた金品全てを掏っていたのだった。

「待てぇぇ！！！　このドロボーーっっ！！！　てか何も得なかったってのに他人のお金を勝手に徴収しやがてぇぇっっ！！！！！」

彼女はすぐにロンを追いかけていく。しかし、彼はまったく気にせずに夕日の中へと去っていった。

「でも、いつも盗賊をいじめてるリナさん自身が言えることなのでしょうか…？」

「さぁな…」

アメリアはリナに聞こえないぐらいの大きさでそっと呟いた。

「なんか複雑だなぁ…」

悟空達はそんな彼女をただ見ているだけでしかしなかった。

?.初登場呪文・技

・明り（ライティング）

白魔術の一つで、光る球体を作り出す呪文。持続時間と光量の間に反比例の関係があり、その性質を応用することで目暗ましに使うことが出来る。

・浮遊（レビテーション）

風系の呪文の一つで、対象に浮力を持たせる。速度は遅いが、初心者でも使用可能である。

・氷の矢（フリーズ・アロー）

水系の攻撃呪文の一つ。氷で形成された矢で攻撃する。

・氷結弾（フリーズ・ブリッド）

水系の攻撃呪文の一つ。青白の光球で相手を凍らせる。しかし、火炎球に着弾すると相殺される。

・地撃衝雷（ダグ・ハウト）

地系の攻撃呪文の一つ。地面から岩石の槍を出現させ、相手を貫く。

・夢幻覚（イリュージョン）

精神系の呪文の一つ。自分が見せたい幻影を見せる。しかし、何故かそれは対象である相手にしか見えない。

・影縛り（シャドウ・スナップ）

精神系の呪文の一つ。その呪文を相手に掛け、その影にナイフなどで突き刺すことによって相手の動きを拘束する。しかし、影が消えてしまうほどの光の強さで無効化されてしまう。

・塵化滅（アッシャー・ディスト）

黒魔術の一つ。対象を一瞬で黒い塵に変えてしまう。

・太陽拳

身体中の気を発光させ、相手の目を眩ませる技。元々は鶴仙流独自の技だった。

?おまけ、少し思いついた小ネタ

題名：結論（スレイヤーズＴＲＹのあるシーンより）

『スレイヤーズＴＲＹ』とは、スレイヤーズアニメシリーズ第三作目であり、後にこの小説の後半に登場する魔竜王ガーヴ一味の残党であるヴァルガーヴとの戦いを描いたものです。しかし、彼には暗い過去があったのです。次の対話は、それを知った後のリナとガ

ウリイの会話シーンです。

ガウリイ
「なぁリナ、一つ聞いていいか？」

リナ
「何よ…」

ガウリイ
「本当に悪いヤツは誰なんだ？」

リナ
「…！　そっ、それは…」

言葉に詰まるリナ。彼女らしくないと思ったのですが、このまま答えが出ないままでした。
そこで、彼女を助けようと思います。あるセリフによって、彼が質問してから数秒で結論がまとまります。では、もう一度。

ガウリイ
「なぁリナ、一つ聞いていいか？」

リナ
「何よ」

ガウリイ
「本当に悪いヤツは誰なんだ？」

リナ
「そっ、それは…」
ボス
「悪いのは“ヤツ”じゃない。“ヤツ”を作り出した世の中だ」

ボスのセリフは、皆さんご存知の缶コーヒー『ＢＯＳＳ』のＣＭからのものです。ちょっと辻褄が合うように感じるのは僕だけなのでしょうか？

パーティ分裂！？　2党のいたちごっこの火蓋が切れた　：　前編

まず話に入る前にこんな言葉がある。

いたちごっこという言葉がある。もともとこれは子供の遊びの一つの名前として使われていた。ルールは簡単、その名前を発しながら相手の手の甲を抓っていき、両手が塞がったら片手を一番上に持っていくというのを永遠に繰り返すだけである。そのため、今では2つの派閥が同じような方法で衝突しあい、埒が明かない状態が続くという意味で使われている。

そんな出来事が彼らに起こったのであった。

ここはライゼール帝国の主要都市の一つ、アトラス・シティ。街のあちこちに屋台や露店が立ち並び、昼間になるといつも多くの人々が買い物をしにやってくる。また、物流が優れており、異国などから食品などを輸入している。

そんな賑やかな雰囲気の中で、異様な熱気を上げているのがいた。

「どうしたどうした！？」
「お～い！！　ケンカだケンカだ！！」
「ケンカだって？」
「何だか知らないけれど、やばい空気が漂ってるわね」

その周りに沢山の野次馬が囲むように群がってくる。人々が見て

いるのはリナ達である。

しかし、何故かリナ・ガウリイ派、アメリア・ゼルガディス派と2党に分かれていた。仲間割れなのかと多くがそう言っている。

「どうしてあんた達はそんな聞き分けのない事ばっか言っちゃってくれるのよ！！？」

「リナさんが勝手すぎるんです！！　少しは私達の意見も聞いてください！！」

「なぁ、この際どっちでもいいじゃないかよぉ…？　だったらリナに―」

「いやガウリイ、この機会にハッキリと言わせてもらおう。俺は別に、リナに従う義理はない」

その真剣ぶりに人々は目が釘付けになっていた。それにしても、何故急に彼らの中が悪くなったのかが謎である。まさにそれこそが焦点である。

「そりゃ俺だってそうなんだが、ここはリナの意見が正しいと思うぞ？」

「そんなことはありません！！　リナさんはただただ自分の好みで言ってるだけです！！」

「好みでものを言ってんのはあんた達のことでしょ！？　アタシはしっかり事前調査した上での結論なのよぉっ！！」

「調査ならこっちだって済んでいる」

「そうです！！　このアトラス・シティの名物料理といえば…！！」

「“にょへろんの焼き肉”っっ！！！」
「“にゃらにゃらの鍋”ですっっ！！！」

リナはステーキ屋、アメリアは鍋屋と、それぞれのレストランの看板を指差しながらそう言った。

人々がわかったこと。興味を示した自分達が馬鹿だったということだった。ただリナ達はここの名物料理の事でベクトルの向きが違っていただけだった。

寂しい風が吹いてきた。一気に興味が失せていった。

「なぁみんな…、もう行こうぜ」
「そうだな…。これ以上こんな茶番劇を聞いたって何も得しないし…、てか元々してなかったか」
「もう…、たくさん時間を食われちゃったないの…！！　これから約束があるのに！！」
「俺はボヤ程度のを期待してたんだけどな…」
「それはさすがにダメだろ！？」

さーっと人々は自分の拠り所へ、または屋台へと向かっていったのだった。

「俺も、にょへろんがいいと思うのだが…」
「いいや、にゃらにゃらだ」

「にょへろんよ！！」
「にゃらにゃらに決まってます！！」

どちらとも譲ろうとしなかった。リナとアメリアの両者は睨みあったままだ。

「うまそうだな～。やっぱこの世界でもうめぇもんがいっぺぇあんだな…」

一方、悟空のみが何故かその場から離れていた。店の前に掛けられているメニューを見て、食欲を湧き出していた。ちなみに、悟空が見ている名物料理はアメリア・ゼルガディス派が推している“にゃらにゃらの鍋”である。

「でもなぁ、リナが言う焼き肉も気になるんだよなぁ…」

しかし、リナ・ガウリイ派が勧める“にょろへんの焼き肉”にも興味があった。

―いっそのこと、両方いっちゃおうか？　でもなぁ…。

『にょへろんよ！！』
『にゃらにゃらです！！』
『せっかくこの街に来たんだし、両方食っても別にいいんじゃねぇか？』
『はぁぁっ！！！？　あんた何へんちくりんなこと言ってくるのっ！！？』
『そうですよ悟空さん！！　両方を食べようだなんて欲張るにもほどがありますよ！！！』
『それにねぇ、この名物料理を食べるチャンスをこいつらに明け渡すわけにはいかないの！！　わかる！！？』

…ってなりそうだよなぁ…。

実を言うと、アトラス・シティに着く前からこういう揉め事は始まっていたのだった。

しかし、悟空はどちらかの派閥に入るのではなく、中立派という派閥を作りあげていたのだった。生まれつきおいしい料理には目がなく、必ずおいしいものは全部頂くと決めていたようなものであった。

「ほ～～、これこそ、ツルツルシコシコとしたのどごし、噛めば噛むほど染み出るまろやかでコクのある味がウリの“にょろにょろの鍋”というもんか」

別の男の声がした。

「あっ、おっちゃん」
「あぁ？　お前はあん時の…」

ロンであった。彼もまたここの料理の存在を聞きつけて訪れていたのだった。

「久しぶりですね悟空さん。こんなところにいたんですか」
「ん？」

悟空とが振り向くと、後ろにゼロスがいた。彼は杖を突きながら近づいてきた。

「おめぇは…、ゼロス！」
「アキラっ…！！」
「うおっとっ…！！」

ロンの呼び方で思わず着地が失敗しそうになった。

「だっ、誰なんですかアキラって…？」
「お前から若干アキラのオーラを感じてなぁ…」
「だから誰なんですか！？」

「ところで若造、お前はなにもんだ？」
「ああ、こいつ曰く謎の神官、ゼロスってやつだ」
―この野郎、何変わらなくヘンな目つきしやがって…。

ゼロスとは初対面であるロンに悟空が紹介した。

「確かにお前、見るからにしては謎だなぁ…。何だ今の、自分は華麗だとナルシーを誇示するような登場のしぶりは？　最近の流行ってもんか？」
「流行って…。…そうは思っていませんよ。ただ、僕は『正体不明の好青年』と言われたいだけなんです」
―ますます謎だろ…！！　よく自分でそんなキャッチコピー言えるな…！！

彼は心の中でそう思った。

「それにしても、ここがにゃらにゃらの鍋の店ですか。貴方達もここに入るのですか？」
「ああ、っていったって、オラ一文なしだしなぁ…」
「ちょうどよかった！！　オレもだ！！」
―一体何処が丁度よかったんですか…？

ちなみに、この前リナから掏ってきたお金は全部叩いてしまったそうだ。何に使ったかは不明だが。

「そこにお前という若造が登場して、オレ達におごってやるというもんでこの話が成り立つんだろ」
「ええええっ！！？　そのために！！？」

ゼロスはロンに肩を叩かれた。そしてこんなことを言う。

「あのなぁ、普通年下は年上のもんに何かうめぇ御馳走してやるのが常識じゃねぇのか、　こことかさぁ…？」
「ちょっと待ってくださいよ…！！　あまりにも不条理過ぎませんか…！？」
「こっちからも頼む！！」
「悟空さんまで…！！？」

ただ困り果てるばかりであった。本当は自分だけで食べたかったのだが、万事休す、仕方なく受け入れることにした。

「はぁ…。…仕方ないですね…。わかりました、これでも十分持っているようなもんですからね…」
「わりいな…。でも…、あっちはどうなんだろ？」

悟空が指を差す。焼き肉の店である。

「そうだお前さん、そういやぁあのにょろへんは最近どこでも食べられるそうだぞ」
「そうなんか？」
「ああ、だがにょろにょろはこの店でしか食べられないそうだが…」
「じゃあこっちだな」
「あっ、ちょっお前、その…、なぁ…」

悟空はその店に入っていった。何か言いたかったようだが、すーっと頭から抜けてしまった。

―軽っっ……！！　少しはオレを疑わねぇか…！！

実は彼の言ったことは、にゃらにゃらの鍋を食べたいがためのまやかしであった。しかし、予想外にも悟空が疑いを持たないがままに彼と同じ選択肢を選んだので、少し困惑していた。

「さすが名物料理とあって、こんなに人がたくさん来とるもんだな」

3人が店に入ると今昼だからかほぼ満員状態で、盛りに盛っていた。ちょうど咳が飽いていたので3人はその席に座った。

「お前、あのペチャばあさんとその仲間達の姿はどうした？　逸れたのか？」
「あっ、そういやあそうだなぁ…」
「知り合いなんですか？」
「少しな」

ロンがそう答える。

「僕リナさん達のことならさっき見かけましたけど、絶交してしまったようですよ」
「先に言わんかぁっ！！！」
「がっ…！！！」

ロンは懐から取り出したスリッパでゼロスをひっぱたいた。スパンとキレのいい音が響き渡った。

「痛いですよロンさん…！」
「ってか今言っても遅くはねぇと思うんだけどなぁ…」
「ほっとけ」

ロンがそう返す。すると腕を組み始める。

「どういうことだ？　あんな仲が良さそうなお前らが…。まるで仮

面夫婦に騙されたみてぇなもんだな…」
「いや〜、このアトラス・シティの名物料理のどちらを食べるかということで意見が食い違ってしまい、挙句の果てに別行動となってしまったようで…」

ゼロスが親指である方向に指を差した。そこにはアメリアとゼルガディスが楽しく団欒していた。彼は相変わらず無愛想のままでいるが。

「ほらね…。おそらくリナさんとガウリイさんはあちらの焼き肉の方に…」
「困ったなぁ…。結局はそうなっちまったか…」
「それより、さっきからオレは気になっとるんが…、なんで笑っていられるんお主は…？」
「元からそういう奴なんだよなぁ、こいつは…」
「笑い上戸か…！」

悟空が耳元でそう言った。

「さて、めしの後どうリナ達を仲直りさせるかだな…」
「そうですね。“異界黙示録”の写本を収集するのに大きな支障が出ないとは限りませんから…」
「もともとこんなしょーもないことでもめるあいつらが悪いんだろ。…ったく最近の若造ってのは……」
「お待たせしました。にゃらにゃらの鍋でございます」
「うおおおっ！！　来たっ！！」

目的の料理が来ると、同時にロンの表情が１８０度切り替わった。

「うっひゃあ、こりゃうまそうだなぁ！！」
「そんじゃ食べるか！！」
「あのちょっと悟空さん…？　ロンさん…？」

すっかり2人の視線は鍋一筋である。すぐに2人はスタートしていた。そんな2人のペースに追いつくことが出来ないゼロスであった。

「お食事の所申し訳ないが、旅の傭兵と魔道士と見受けた。仕事を受け入れるつもりはないか？」

誰かがアメリアとゼルガディスに話しかけるのを聞いて、彼はその方を向いた。

「誰ですか？」
「このアトラス・シティの魔道士協会副評議長、ミスター・デイミアの用心棒だが…。どうだ？　悪い話ではないぞ？」
「食べてからお話をお伺いしますわ。あっ、ゼルガディスさん、ここ美味しく煮えてますよ！」
「こっちの魚もよさそうだ！」
「あの…、あのねぇ…」

２人もまたここの名物料理に目が釘付けになっていたのだった。用心棒と名乗る男は困惑していた。

しかし、何らかのシナリオが出来た事には変わりはない。

「おやおや…。どうやら面白いことが起こりそうですね…」

「「ん？」」

うまく状況を読みこめていない悟空とロンにとってはわからないままであった。

一方偶然にも、リナとガウリイにもそれと同じような依頼が飛び込んできた。ただ、担当するのはデイミアと同じく副評議長であるタリムである。

２党は対立関係にあった。というのも、来月に魔道士協会評議長選挙が予定されており、その中でも有力な２人は自分達の支持を確保するのに必死なのである。自分が評議長になるためにもどんな策を投じてもかまわなかった。

タリムはリナやガウリイ、デイミアはアメリアやゼルガディスをそれぞれ私邸に呼び出し、自分の用心棒になって欲しいと依頼した。両組は破格の報酬を受け入れる事で承諾し、それぞれ擦れ違い様に

目的の所へと向かっていった。2人ともお互いの相手はまともに選挙するつもりはないと述べているが、お互い様だろと気付くのは、中立派である悟空達である。

悟空は建物の屋根の上で街の様子を眺めていた。ゼロスから聞いた事実から際するに、それで2組の間の溝がさらに深まってしまうのではないのかと考えている。

「とにかくえれぇことになってるもんだなぁ…」

悟空がそう呟く。仕方なく何とか仲直りさせようかと思い、屋根から飛び立っていった。

「全く…、あそこだったら公職選挙法違反で2人ともムショ行きだろうな」

ロンはそう思った。

やはり人間というのは欲深い生物なのか。自分の望みを果たすためにあらゆる手段を使おうとは、こんなときに優柔不断なんだなと改めておもったロンであった。

―やれやれ…。だがオレは首を突っ込むつもりはねぇ。ただ見ているだけで十分だ。

そう思い、街中を歩いていった。

パーティ分裂！？　２党のいたちごっこの火蓋が切れた　：　中編

午後１時２４分、二組、それぞれ目的地に向かう。

リナ・ガウリイ組の場合…。

２人はいざそのデイミアの傭兵を倒そうと、彼の私邸に向かっている最中であった。だが、最初リナはこの依頼に乗る気は一切なかった。

「しょーもない権力争いってことね…」
「でもさリナ、報酬は破格だったよな」
「まあね。そうじゃなかったら受け入れなかったわよ。まったく…、向こうにいるデイミアの傭兵を叩き潰せだなんて…」
「お前にはピッタリだと思うが？」
「なんか言った？」
「いや…。そういやぁアメリアとゼルガディスはどうしたのかな？」
「さぁね…、まだ鍋でもつついてるんじゃないの…？」

そんな会話をする２人であった。

アメリア・ゼルガディス組の場合…。

前者の２人とすれ違うように、この２人はタリムの私邸に向かっていた。ゼルガディスもまた、最初はこの依頼に乗る気はなかった。

「タリムという人許せません！！　選挙を暴力で無効しようだなんて！！」
「デイミアの言っていた事、全て真実だと思わない方がいいぞ。所詮、権力争いだ」
「じゃあ、どうしてゼルガディスさんはタリムの傭兵退治を引き受けたんです？」
「報酬が破格だったからな。だが、別にどっちが評議長になったのだろうと、俺達には知ったことじゃない」
「そうですか。ところで、リナさんはどうしてるんでしょうか？」
「それこそ知ったことじゃない」
「ですよね…。どうせまだガウリイさんと焼き肉の奪い合いを続けてるんですよ…」

皮肉にも、先ほどの２人との会話とほとんど同じであった。
これは偶然の一致なのか、神がそうシナリオを描いたのか？　未だに謎である。

午後１時２５分、悟空、アメリア・ゼルガディス組を発見。

―あっ、アメリアとゼルじゃねぇか！

２人を発見すると、悟空は彼らに声をかけた。

「おいおめぇら、こんなとこにいたんか」
「悟空さん！」
「お前こそ、今まで何処をほっつき歩いていたんだ？」
「オラも今まであっちにいたぞ」

悟空が彼の問いに指を差して答える。勿論、「知らないよ！！」と言いたげそうな顔になっていた。

「ええっ！！？　悟空さんもいたんですか！！？」
「まぁな。ところで、リナとガウリイとはまだ…？」
「あいつらのことに構っているヒマはない。さっさとあそこの傭兵を倒して報酬をもらわなければな」
「そうでした！　早くこの手で懲らしめてあげないと！！」

こうして2人は出発しようとする。

「お、おい、ちょちょちょっと！　そのタリムって、そんなに悪いやつなのか？　あっちも悪いそうだけどさぁ…」
「デイミアさんはそんな私達を欺かせるような人ではありません！！　あの人とは違って公平な選挙を望んでいるんです！！」
「いや、オラ的にはどっちもどっちだと思うんだけどなぁ…」
「行きましょうゼルガディスさん！！」
「そうだな…」

悟空の中立的な意見に呆れたのか、アメリアとゼルガディスは出発したのだった。

―困ったなこりゃ…。

午前1時30分、2組、傭兵と対面。

リナ、ガウリイ、ロンの場合。

「ここがデイミアの家ってことね…。なんてぶっ壊し甲斐のある門構えなの！」

いつもの彼女のことだ。盗賊だろうとお偉いさんだろうと構わず、一気に魔法を発揮してすぐに終わらせようとしている。

「壊すって、お前何するつもりだ？」
「まず“火炎球”を『ドコドコドコーッ！！！』ってぶち込んで…」
「そんなあからさまなことしたら、役人がぶっ飛んでくるだけだけどなぁ…」
「え～っ、じゃあどうすんのよ？」

リナの問いかけに、ガウリイは首をひねって考えだした。

「ここに傭兵か何かが来てくれりゃあ、何とかやりがいがあるように思えるのだが…」
「タリムに雇われた傭兵か？」

早速登場である。デイミアの傭兵らしき男が“浮遊”を用いて彼らを見下ろしていた。黒いマントを被り、両肩には獣の顔をした金色のアーマーを身につけている。どうも彼女の視点からを除いては、只者ではなさそうだ。

「まさかそちらから来るとは計算が違ったが、まぁよい。デイミア様に立てつくものは、この魔道士カルアスが片付けてくれるわ」
「人間、出来ない事をそう口にするもんじゃないわ」

リナが口を緩めてそう言う。

「ふん、身の程知らずが…。『大地よ我に従え』…」
「ん？　うわっ…！！！　どうした？！！　なんだぁぁっっ？！！？」

足元が急に茶色く変色し始め、それに加えてぬかるみ始めた。ガウリイはそれに足を取られてなかなか移動することが出来ない。

「あぁーーっ！！！　ずるいぞリナ自分だけ！！　こうなったら…、ここは任せるからなぁっっ！！！」

それに対し、彼女は“翔封界”を発動して回避していたのだった。一名、早く出ろと突っ込みを入れたがっている男が情けない彼の姿を見ていた。

「地の精に干渉して、地面を泥に変えてから攻撃？なかなかいい発想だったけど残念ね」
「とっさに“浮遊”か。なかなかやるな」
「あなたも見かけよりはやるようね。“浮遊”と地面を泥に変える呪文を同時に使ったからね」
「ふふっ…」

しかし感心している場合じゃない。リナは既にその事を承知している。さっさと片付けて、それ相応の報酬を貰わなければ…。

「でもそこまでね。“翔封界”！！」
「なんと…！！」

リナは強力な突風を放った。

実際この呪文は自分が空を飛ぶためだけではなく、相手を吹き飛ばす事も出来るのだった。この手段で彼を地面に叩き落とそうという考えである。

しかし、その範囲はとても広く、ガウリイまでも吹き飛んでしまいそうだった。

「これ以上の呪文の使用は無理でしょうね！！　そろそろ地面に叩きつけてもらいましょうか！！」

「“炎の矢”！！！」

ところが、カルアスは炎の矢をまっすぐ飛ばしてきた。まさかの3回オチを放ってきたのである。

「ええっ！！？　ウソォォッ！！？」

間一髪で回避したものの、そこで集中力が途切れてしまい、“浮遊”の効果が切れてしまった。

「だぁあああああっ…！！！　うぐっっっ…！！」

リナはそのまま屋根に落下し、頭をぶつけてしまった。しばらく頭を押さえて痛がっていた。

「「ふぁっはははははは！！！」」

彼はリナをコケにするかのように高笑いする。

しかしよく見てみると、カルアスだけではなく彼が装備しているショルダーアーマーまでも笑っていた。

「ショルダーガードをもらってる…？」

リナの呟きを聞くと、自分が勝ち誇ったように、さらに傲慢にこう言い放った。

「ふははは！！　こいつらはただのショルダーガードではない、生きているのだ！！」

「生きてるって、この肩の顔が！？」

「その通り！　こいつらはデイミア様が邪妖精（ブロウ・デーモン）を元にお創りになった合成獣（キメラ）なのだ！　それぞれが簡単な魔法なら使える、それ故、これを身につけることで３つの魔法を同時に操ることが出来るというわけだ！」

しかし、それを聞く内に驚きから徐々に呆れに変わっていた。それを聞いた上で、ある結論が導かれたからだ。

「いわゆるなんちゅうの…、てことはアンタは一つの呪文しか使えないってことじゃない…」

「う…、うるさぁぁい！！！」

ロンでさえも納得した。あまりにも期待外れだということだ。

この事を指摘されたカルアスにとっては、あまりにも致命的であった。

「“明り”！！」

突然リナは彼に目暗ましをかけた。2体のショルダーガードも強力な光で目をやられ、混乱していた。

「うおっ…！！　くそっ、見えん！！　上…！？　ぬわぁあああっ…？！！！」

カルアスが気付いた時には、目の前に彼女の靴底である。もろに顔面に蹴りを喰らわれ、屋根から落っこちていった。

そして彼女はその上に乗っかった。

「“氷の矢”！！」

彼女の掌から放たれた氷の矢は地面に突き刺さり、ある程度の範囲で地面を凍らせた。

これにて傭兵退治は終了した。

「まっ、こんなもんでしょ」

ただ、リナの視線の先には下半身を氷漬けにされていたガウリイがいた。それよりも、この泥は元々浅かったのではないかと疑問を持つばかりである。

「おいこらぁぁっ！！」
「あっ、ごめん…！　ついつい忘れてた…」
「ウソだ！！　ハーックション…！！！」

時間を遡って、アメリア、ゼルガディスの場合…。この2人が目的地にちょうど着いた時のことだった。

タリムの私邸の門の前に、剣を構えた傭兵が立っている。装備に関しては芳しくなく、この見た目からしてはそう大した相手ではなかろう。

「デイミアに雇われた傭兵か？　まさかそちらから来るとは計算が違ったが、まぁよい。タリム様に立てつくものは、この俺が片付けてくれるわ」

「能書きはいい、さっさとかかってこい！」

ゼルガディスがそう言い放つと、タリムの傭兵は少し剣を揺らした。するとかすかに刃に赤いオーラが生じた。

「はっ…！」
「でやあああああっ！！！！！」

剣を構え、掛け声と共に走りだした。視線は殺気に満ちている。

「おあっっ…！！！」
「くっ…！！！」

２人は回避する。振りおろされた剣の刃先から、地面を大きくへこませた跡があった。

「何っ…！？」

ゼルガディスは顔色を変えた。こいつ只者ではないな…。おそらく魔力か何かを自分の剣に蓄積させ、振りおろすと同時に開放したのであろう。彼はそう推測した。

しかし…。

「ふふふ…、これはタリム様が作りあげた暗黒魔法剣だ！　この威力をとくと思い知るがいい！！」
「そうですか…。つまり、今の技はあなたの実力ではないという事ですね！！」
「いいっ！！？」

案の定、そういうことになる。アメリアに弱点を突かれた傭兵は動揺していた。

偶然にも、両方とも同じ展開を繰り広げている。要は、確執が起こったとしても、何らかの縁は切れないままであるということであろう。

「んうううぅ〜〜〜うるさいっっっ…！！！」

ゼルガディスは呆れながらも剣を抜いた。決着はどっちがつくかを既に読んでいたのだった。むしろ自明である。

「はぁ…。来い！　実力の違いを教えてやる！！」
「ううっ…。うおおおおおっ！！！！！」

一分後。

3人の目の前には真っ黒けになった傭兵が倒れていた。元から剣術に優れているゼルガディスとは全くの雲泥の差であったのだ。

用が済み、彼は剣を鞘に戻した。

「さてと、戻って約束通りの報酬をもらうとするか」

「ええ、悪い傭兵も懲りましたしね」

上記2通りから言えることは、ただ強い武器を持っているだけでは戦闘はつまらない。武器を極めるだけではなく、自分自身までも極めなければならないということだ。光の剣を持つガウリイならまだしも、強力な武器を持っていた2人だが、実力はイマイチだったからだ。

それぞれ2チームが依頼者の私邸に戻ると、彼らに待ち受けていたのは激怒した両氏であった。両者の傭兵がやられたこと、まだ傭兵が残っているという2点で頭に来ているのである。

そんな騒動が起こっているにも相変わらず、何も無かったかのように街中は混むばかりである。

「どうしよっかなぁ…」

悟空は屋根の上で胡坐をかきながら考えていた。どうも仲直りしそうにはないように見えたからであった。

「おい、何じっと座ってんだこんなとこで…」
「あっ、おっちゃん」

ロンが現れる。杖を持って悟空のもとに歩いてきた。今まで街中を歩きまわって、軽食を取ったり店を回っていたりしていたのだった。

「どうだ？　丸く収まりそうか？」
「いいや、まだわかんねぇ。ゼルとアメリア、まだ根に持ってるようだろうな」
「ふーん…」

彼の返事は、興味ないという気持ちが表れているようであった。

「そもそも、あいつらは何でも気付かねぇんだ？　結局は駒にされてるだけなもんだしな…」

今の発言を聞いて、悟空は振り向いた。

「駒…？　駒って、どういうことだ？」
「よくある漁夫の利ってもんだ。２人が無駄に争ってるその合間に、自分がお偉いさんになろうってことだ。そもそもあんな２人に選挙される権利なんかねぇけどな。それか２人を“こけさせる”ためか…」

どうもこの騒動について何か知っていそうな感じがした悟空。さらに事情を知ろうと彼に尋ねた。

「でも、そいつっていってぇ誰なんだ？」
「さぁな…」

ロンは振りかえり、そのまま次の目的地へと向かうかのように歩き始めた。

「そんじゃ、頑張ってな。オレは、こんないたちごっこに頭を突っ込もうとする気はねぇ。元々お前らとはなんら関係ねぇかんな」
「お、おい…！」

悟空が言いかけたときには、彼は既に連なる建物の上を渡っていったのであった。

「素早く締めたなぁ…」

そんなことより肝心なのはあの４人である。どう和解させるかが焦点である。二たじ考えようとしていた。

しかしその矢先…。

「ん…？　ありゃなんだ…？」

悟空があることに気付く。デイミアの私邸に視界が入ったのだが、どうも気になり、目を向けてみた。

「何であそこ氷漬けになってんだ…？」

実はこれはリナが仕向けた行動であった。“氷の矢”を用いて私邸を氷漬けにし、デイミア達を降参させるためである。いつから私邸にこんな悪戯をするようになったのだろうか。

またしばらくして…。

「あれ見てよママ！」

街中、ある子供がとある方向に指を差す。

「あらまぁ、あそこってタリムさんのお宅じゃないの？　あの方、メルヘンチックな人だったかしら？」
「なんだ？　メルヘンチック？」

偶然そこを歩いていたロンはその言葉が気になり、タリムの私邸に顔を向けた。どうも気になり始め、よく見やすくするために屋根に上り、改めて見てみた。

「おいおい…、なんだぁありゃあ…」

困惑しながら呟いた。

何故なら、彼の私邸には様々な色で猫や熊など、落書きがされていたからだ。おそらくクレヨンで描かれたのだろう。それにしても、さっきは何もなかったのに何故いきなり現れたのか…。ここまで目立った落書きをするには、相当な時間がかかるだろう。このような事を短時間で済ますには、留守中に忍び込んだ複数の人間か、魔道士である。

しかし、急に片手で両目を覆った。

「くっだらねぇ事しやがるわぁ、あいつら…」

先ほどこの騒動に介入する気はないと言い放った彼だが、茫然なしにはいられなかった。

この場合、アメリアが“染色魔法”を用いてそうなった結果であった。実行する前、正義の鉄槌をお見舞いしてやると宣言した彼女だが、ロンに限らず他人の視点からはよくある悪戯にしか見えないのであった。

そこまでエスカレートするとは、子供染みた行動といっても程がある。それより、何処からこんな量のゴミを仕入れてきたのかが不思議でたまらなかった。

ロンは彼らの心の幼さに呆れているのであった。

それだけでは終わらない。実際互いに私邸を荒し合い続けた。氷漬け、強風、今みたいなゴミや落書き、水攻め、火攻め…。

このような無駄な争いは日が沈み、やがて灯火が点くまで、何の進歩もないまま続けられたのだった。

結局言えることは、両組とも傭兵としての使命を全うもしていないということである。そこで両者は決意した。翌日、互いの傭兵、つまりリナとガウリイ、アメリアとゼルガディスの2組を勝負させて決着をつけようということである。

「もういいわ、どこか泊って寝るとするか…」

一つ欠伸を掻き、ロンは宿を探しに行ったのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2149u/

DRAGON BALL GT AFTER ～最強魔道士達と最強戦士の珍道中膝栗毛!?～

2012年1月2日02時46分発行